

---

# オズ魔法学園奮闘記

今井敏之

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オズ魔法学園奮闘記

### 【Nコード】

N21720

### 【作者名】

今井敏之

### 【あらすじ】

オズ魔法学園に入学したアッシュは、あることがきっかけで学園一可愛いと評判のピスキーに言い寄られるのだが、アッシュは拒絶する。

「どうして付き合ってあげないのよ!」

「断るなんてなにを考えてるの!？」

「おまえ、何様のつもりだ!」

学園中からの非難の嵐にアッシュは魂とか人生とか、何か色々なものをかけて反論する。

「ピスキーは男だろうが！」

「可愛いんだから男の子でもいいじゃない！」

「ダメだろ！」

注・この物語はBLではありません、念のため。

## プロローグ

気だるい昼下がりの午後、私は燦々と陽光が降り注ぐ洒落たカフェの二階テラスで、アップルティーを口に含んだ。

ほんのりとした甘味と芳醇な味わいが広がり、それはささやかな至福をもたらす。

眼下の街道の脇には、無数の笑顔の人々が、これからやって来るパレードを待ち構えている。街の主要道を進むパレードの音楽がここまで届いて、あと十数分もすれば、私たちのいる街道まで来るだろう。

宮殿や中央公園から花火が打ち上げられ、様々な色のスモークが空を彩り、気の早い人が窓や屋上から紙吹雪を撒き散らしている。

アスベルト帝国建国祭。

この国の人々はよほど自分たちの国を愛しているのか、それとも平凡な日常に刺激を与えてくれるイベントに心を躍らせているのか、私がこの都市にやってきてからこれほど楽しそうな住人たちを見たことはなかったように思える。そして私も、世界有数の祭典を楽しみにしていた。

さて、ここで自己紹介しておこう。

私はクレア・フィルゴートン。西塔の魔女の後継者だ。

現在は後継修行の一環として、世界唯一の公立にして最大の魔法使い養成学校「オズ魔法学園」に在学している。

私がオズ魔法学園に入学してから現在までに出会った人達や、関わった事件について、これから少し語ろうと思う。

なにより私が話したいのは、クラスメイトの一人ことについてだ。私と同じ学生にすぎないはずの彼は、世界魔術師連盟ならびに各国政府機関、さらには国連にまで危険人物として知れ渡り、同時に

畏怖の対象となっている。

そして、世界的危険性を保有しているがゆえに、逆にあらゆる組織が手出しできないでいる、人類史上最高にして最大の脅威と判断された人間。

アッシュ・スカーデイン。

テーブルを挟んで目の前にいる男の子だ。

金色の髪に、瞳は魔力に覚醒した者特有の深淵の紫。

。体格は年齢平均を逸脱しておらず、顔の造作も至って平凡。しかしその不機嫌な眼差しの奥底に、厳格な軍人の強靱なる精神と、温和な芸術家の繊細な心が同居している、矛盾した雰囲気併せたような、不思議な印象を感じさせる。

だが実際はどちらでもなく、神秘性の欠片もない、ただのチンピラモドキだ。

ちなみに先に不機嫌と私は表現したが、これは別に比喻ではなく、今の彼は大変機嫌が悪い。

その原因は、アッシュに抱きついていいる人物にある。

「ねーねー、アッシュくん。パレードもうすぐだね」

少し癖のある羽毛のように柔らかい金色の髪に、瞳はやはり魔力覚醒者特有の深淵の紫。可愛らしい中性的な童顔は、よく中学生に間違われ、時折小学生と勘違いされることもある。愛しい人に触れているのがよほど嬉しいのか、先程からずっと幸福の笑みを絶やさず、周囲の人目をはばかりことなくアッシュの胸に頬をすり寄せている。

ピスキー・フィフス。

学園に私達が入学した時に、上級生が自主的に　というか勝手に行った新入生対象人気投票にて、大差で一位を獲得した経歴があり、可愛い子犬のような魅力は、ファンクラブが　学校非公認、本人未承諾で　結成されるほどだ。

誰もがピスキーを恋人にしたいと切望し、そしてその心を射止めたのがアッシュなのだが、その幸せ者は言い寄られるのを心底嫌が

っている。

今もピスキーが話しかけつつ、さりげなく顔を近づけ、かつわざとらしく口付けに挑戦したが、今までの付き合いから行動パターンを熟知しているアッシュは、唇に唇が触れる寸前、左手の平で防御した。

「クレア、黙って見てないでこいつをなんとかしてくれ」

接近しているピスキーの唇を押し退けつつ、アッシュは私に救助を求めた。

私は即座に「イヤ。ファンクラブの連中に文句言われるの、鬱陶しいし」

そのピスキーファンクラブ 以下PFCとする の中心メンバー三人が、店内からこちらの様子を 正確にはピスキーとアッシュを観察しながら、お互いの顔を近付けてなにやら小声で話し合っている。

「あーん、あともうちよつとだったのにー」と一年代表女子生徒。

「もう、焦れたいわね。いい加減に諦めればいいのに」と二年代表女子生徒。

「まったく、僕が代わりたいくらいだよ」そして三年代表男子生徒。囁き声なのに距離のあるここまで明確に聞こえるという、少し考える不可能としか思えない発声法で、二人の というかピスキーの恋愛模様を話している。

PFCの三人は常にピスキーの周辺に生息しており、ピスキーの行動を観察し続け、その様子を楽しそうに話し合う。睡眠食事などの生活行動はいつ行っているのか、謎だ。というか授業にはちゃんと出ているのだろうか？

三人の遠くまで届く小声は、アッシュにも聞こえ、不愉快が怒りを誘発させつつあるのか、拳を握り締めた。

「アッシュくん」

ピスキーがアッシュの胸に埋めていた顔を上げた。

「なんだ？」

「そんなに恥ずかしがらないで、二人の仲を見せてあげようよー？」  
「誰が誰とどういう仲だ。とつとと離れろ」

牙を剥いた猛獣に似た表情で、アッシュはハートマーク付きの科  
白を 実際ピスキーは魔法でハート型の映像を周囲に投影している  
否定するが、勿論ピスキーは離れず、逆に強く愛しそうに抱きし  
める。

アッシュは苛立ちと疲労による深い嘆息。

穏便に事を済まそうと一時間ほど努力し、全て無駄に終った結果、  
忍耐力の限界に来ている、その兆候だ。

そんな二人にカフェテラスから路上に至るまで全ての人々が、様  
々な視線を投げかけている。

微笑ましそうにしている人もいれば 私たちと同年代の女の子が  
多い、羨ましそうにしている人もいるし 恋人がいないのだろう  
か？、なぜか恥ずかしそうに顔を伏せつつも目だけはしっかり向  
けている人もいれば こういったことに慣れていないのだろう、  
人前でなんて破廉恥なことをしているのだと憤慨した様子の人 装  
飾品を過度に身に付けた厚化粧のおばさん もいる。

しかし大半を占めるのは、奇異な者を見る目つきだ。

「あー、くそ」

アッシュは毒吐くと、子犬のように首筋にキスしようとしている  
ピスキーを押し退けて、向かって左側に座っている三つ編みの女子  
に顔を向けた。

「おい、他人の振りしてないでこいつをなんとかしてくれ。いつも  
の規律が云々はどうしたんだよ？ 委員長」

バリントッ！ 彼女の手に握られていたオレンジジュースのグラス  
が握り潰された。

「アッシュくん、わたしは委員長じゃないって、何度言えばわかる  
のかしら？」

彼女は、微笑んではいたけれど、その瞳には殺意と呼ばれる種類  
の危険な意思が宿っていた。

ウエンディフィールド・モレンタニア。

黒髪を三つ編みにし、黒ぶち眼鏡をかけた、頬に残すそばすがチャームポイントの女の子だ。

親しい人は省略してウエンディと呼び、親しくない人は委員長と呼ぶ。教室や生徒会での役職についているわけでもないのに、なにかと口を出しおせっかいを焼くことから、外見と合わさってそんなあだ名が付いた。

しかし彼女の人生において委員長であったことは一度としてなく、それにも関わらず委員長と呼ばれ続けた結果、委員長という単語は彼女の感情を爆発させる起爆剤となっている。

ちなみにクラスの正式な委員長は私だ。みんな忘れてるけど。

アッシュは迂闊にも竜の逆鱗に触れてしまったことを悟り「すみません」と蛇に睨まれた蛙のように、というかチンピラに絡まれて逆に頭を下げる情けない中年親父のように、謝った。

それでウエンディの怒りは収まったのか、手の中で砕けたガラスをハンカチで拭い取ると、ショートケーキを黙々と食し始めた。ガラス破片による怪我は一切なかったらしいが、ウエンディは手に関して外見からは想像もつかないほど頑強かつ強靱で、今更心配する必要はないのは知っている。

むしろ私が心配なのは、コップの弁償を店から請求される可能性だ。まあ、一つくらいなら大丈夫だと思うけど。

不意に、どれだけ拒まれようとニコニコと笑顔で離れようとしないうピスキーが、心配そうな顔でアッシュの顔を覗きこんだ。

「アッシュくん、なんだか随分機嫌が悪いみたいだけど、どうしたの？」

言葉とは裏腹、必要以上に顔を近づけているあたり、なにを企んでいるのかよくわかる。

「おまえのせいだよ」

アッシュは答えと一緒にピスキーを蹴り倒した。面倒臭くなったので直接的に腕力　というか脚力　で解決することにしたらしい。

椅子から転がり落ちたピスキーは、一瞬なにをされたのか理解できないように呆け、しかし次第に顔に悲しみが浮かび、捨てられた子犬のような声を出す。

「アッシュくん、なにをするの？ イタイじゃないかあ」

見る者の心を締め付けるその様子も、アッシュには効果はなく、声を張り上げて抗議する。

「やかましい！ いいか！ 俺は、抱き付くなっていうか引付くなっていうか纏わり付くなっていうか近付くなっていうかできれば俺の視界に入るなっていうか、とにかくそういうことは止めるって何回言えばわかんたおまえわ！！」

ピスキーは目に涙を溜めて口許を手で覆いしなだれる。

「どうして、どうしてそんな酷いこというの？ こんなに君のことが好きなのに」

「それを止めるつつとんじゃ！」

アッシュは絶叫に近い声で、コーヒークップを床に叩きつけた。勿論カップは砕け散る。

まあ、二つくらいなら弁償しないで済む、と思う。

「やーん、ひどーい。あんなに凄い剣幕で怒らなくなつて」

「でも大丈夫。ピスキーちゃんはあれぐらいで諦めたりしないから」  
「そうだね。ケンカするほど仲が良いって言うしね」

PFCの三人がこちらに聞こえるように囁き合うという高等発声技術で応援する。

「ピスキー、ファイトー」

「がんばってー」

「でも僕としてはあんまり頑張つて欲しくないな」  
しかし三年代表がなにやら応援しないようだ。

「どうしてよ？」

「頑張らないでどうするのよ」

「失恋したところを狙う計画を立ててるから」

アッシュからピスキーを篡奪するつもりらしい。たぶん無理だけ

ど。

「あー、そんなこと考えてたんだー」

「でもダメー。ピスキーはアッシュと結ばれるの」

「うう、いいんだ。他の人と一緒になっても、ずっと思い続けるんだ」

二年代表が絶望的な現実を教えて、三年代表は泣き出した。なんというか、カフェテラスから室内という距離があるのに、凄まじく鬱陶しく感じるのは、たぶんやたらごつい男だからだろう。

「ちよつと、いい加減にしなさいよ」

委員長が……訂正、ウエンディがアッシュを窘めた。

「な、なんだよ」自分が注意されるのは予想していなかったのか、その顔に戸惑いが生じる。

「あなたね、自分を好きになっけてくれている人にそんなこと言うなんて、いくらなんでも酷すぎるわ。もう少し優しくするくらいのことはできないの」

「……いや、そんなこと言われても」

「いいじゃない、いつそ付き合っただけでも。こんな可愛い子のほうから好きだつて言っただけで来てくれるんだから、あなただって別にイヤじゃないでしょ」

「嫌に決まってるだろ」

一秒もかけない即答に、ウエンディは理解不能を余すことなく顔に表した。

「なんでよ？」

「……なんでと訊くか、なんでと」アッシュは人生に疲れたような顔でテーブルに腕を組み、それに顔を埋めた。「もうやだよ、こんな学校生活……」

「なにがあつたのか知らないけど、元気出してよ、アッシュくん？」さっきまで泣いていたはずのピスキーは、何事もなかったかのようにアッシュの側に寄って慰めの言葉をかける。

「おまえのせいだつての」アッシュはすぐさま蹴り倒す。

「あー！ また！」

ウェンディが立ち上がり叫ぶが、周囲の注目が自分に転じたことに気付き、気まずそうに咳払いをしてから、腰を落ち着けた。

彼女は基本的に目立つことが嫌いらしい。その割には目立つことばかりしているような気もするけど。

私は特に理由もないのに、なんとなく疲労を感じ、短く溜息を吐いた。

「あんたさ、そんなにピスキーが嫌いなの？」

「当たり前だろ」

やはり即答したアツシュに、私は重ねて尋ねた。

「なんで？」

「おまえまでなんでと訊くか」

返答は、生温い溜め息混じりの、独り言に近かった。

「男ってさ、まあ好みは色々あるんだろうけど、基本的に可愛い子が好きなんじゃないの？　なんか、可愛くて守ってあげたくなる恋人が欲しいって聞くんだけど。その点、ピスキーは可愛いし、保護欲を刺激してくれるし、恋人にしたいって奴、何百人いるか分からないわよ」

「そうよ」ウェンディが後を引き継いで「あなた理想の恋人が目の前にいるのに、そうやって跳ね除けるのって、小学生の子供みたいよ。だいたいあなた付き合ってる人いないんでしょう。だったらOKすれば良いじゃない。あなたにはもったいないくらいなんだから」  
「そうそう」私は同意して頷く。「あんたに恋人ができるなんて逆立ちしたってありえないんだから、今のチャンス逃したら、一生一人身ね」

そしてPFCからも、遠距離まで届く囁き声が上がる。

「そうよねー。素直にピスキーちゃんの気持ちを受け止めてあげればいいのに」

「どうしてあんなに嫌がるのかしら？」

「僕が恋人になりたいくらいだよ」

PFCの三人が推理し始めるが、根拠や証拠は一切ないことを先にお断りしておく。

「もしかして、本心の裏返して奴じゃない？」

「口ではああ言ってるけど、本当の気持ちは？」

「ということは、やっぱりアッシュくんも」

そして女生徒二人が同時に奇声をあげる。

「「キヤー」」

そして三年男子生徒が泣き出す。

「うええええん」

バキンッ！

実に綺麗な音と共に、アッシュの拳が叩きつけられたテーブルは見事に真っ二つに割れ、当然テーブルに置かれていたお茶類一式は無残に床に落ちてしまふ。ちなみに私のケーキは端に置いてあったためか、割れた反動で結構な飛距離を示した。

テーブルと食器の七八個くらいなら……駄目ね。絶対請求されるわ。

アッシュは、怒りのためか たんに痛かったのか 拳を震わせる。  
「おまえら……おまえら、黙って聞いてりゃ好き勝手言いやがって。なんでそうなにかっちゃん俺とこいつをくつつけたがんだおまえらはっ！」

最後には怒鳴り声になったアッシュに、ウエンディはやれやれという風に頭を振ると、彼の両肩に手を置いて諭し始めた。

「いい、アッシュくん」

「なんだ？」

「そうやって突っ張ってばかりいると、大人になった時、恋人と一緒ににもっと思い出をたくさん作べきだったって、後悔することになるのよ。エッチなことは大人になってからでもできるけど、制服着てプラトニックでドキドキは今のうちにしかできないの。だからピスキーの気持ちを受け止めてあげなさい」

「なんでそういう話になるんだ！？　っていかおまえ何歳だ？！」

確かに年寄り臭い話だ。しかもちよつとマニアック。

PFCの女生徒二人はエッチという言葉に過敏な反応を示して「キヤーキヤー」と奇声を 小声で 上げている。たぶんピスキーとアッシュがそういうことをしている場面を想像でもしたのだから。

気がつけば眼下の大通りにパレードが到着していた。帝国軍編成音楽隊は一矢乱れぬ歩調と共に行進曲を奏でているが、見物人たちはそちらには目もくれず、このカフェテラスに視線を集中している。パレードカーの上で誇らしげに自らの美貌を披露していた、今年の建国の女王に選ばれた美女 ようはミスグランプリ は、急に誰も注目してくれなくなったことに戸惑いを感じ始めているようだ。

その美女の代わりに注目を集めているピスキーは、不意にウエンディの手を握る。

「ありがとう、委員長」

「委員長じゃないって」

ウエンディは訂正したが、ピスキーは無視して続けた。

「アッシュくんが振り向いてくれるまで頑張るね」

「頑張るな」

端的に否定してアッシュはピスキーを殴り倒した。見事な左ストレートだった。

「あー！ またそんなことして！ しかも今の手加減してなかったでしょ！？」

「最初からしてねえよ！」

「どうしてこういうことをするのよ?!」

「だから！ なんてどうしてなんて疑問が出てくるんだよ?!」

「こういう酷い事をするからに決まってるでしょ！ 自分を好きになつてくれる人にどうしてこんなことができるの!? 性格歪みすぎよ!!」

「うがあああああ!!」アッシュは癇癪でも起こしたように、絶叫して頭を掻き毟った。「なんでおまえら当然のように受け入れる

んだよ！？　なにか致命的な問題があるだろ！？」

「問題って、そんなものどこにあるのよ？！　いったいなにが不満なの？！　可愛くて一途で献身的で、それに運動神経は抜群、成績優秀、品性は……ちよつと問題あるかもしれないけど、でもそこだつて見方を変えればOKじゃない。もうやりたい放題やりまくれるわよ」

最後あたりに問題発言があつたような気がする。

「あーはいはい、そうですね」アッシュは投げやり気味に「可愛いし、一途で、献身的で、人気もあつて、自分から誘ってくるような積極的な恋人ができれば嬉しくて涙が出るね俺は！」

「じゃあ、どうして拒絶するのよ？」

「こいつは！　こ、い、つ、は……ピスキーはあ……」

アッシュは一呼吸の間、自分の感情を抑制することに努めたが、次の瞬間には爆発し、人格や人生や魂とか、そういった己の全てを賭けた主張を叫んだのだつた。

「ピスキーは男だろうが！！」

……

「……」

「……」

「……」

なんというか、改めて指摘されると実に納得ができるらしく、周囲皆様一様に「「うんうん」「」と頷いちゃったりしている。

しかし、ウエンディは腰に手を当て、胸を張ると、必要以上の自信を持って断言したのだつた。

「可愛いんだから男の子でもいいじゃない！」

「ダメだろ！」

と言うわけで、人類史上最大の危険人物と目されている状況下で、なんか違う方向で危険な状況に追い込まれているアッシュの話をしようと思う。

その前に、改めて自己紹介。

私はクレア・フィルゴートン。

西塔の魔女の後継者だが、これからする話とはあまり関係ないので忘れていい。

## 一話 本気でやってやる 前篇

三十回目の新聖紀に入り、世界が三度目の千年紀最後の百年を迎えた年の春。

魔女の家系に生まれ、その後継者に選ばれた私は、これまでそのことに対して疑問を抱かずに過ごしてきたように、母の指示に当然のように従い、オズ魔法学園に入学した。

そして学園に到着した記念すべき日は、春の花が咲き乱れ日差しがとても暖かい、春麗かな気持ちの良い日……ではなかった。

雨だった。

土砂降りだった。

最悪。

帝国鉄道帝都本駅のプラットホームに降り立った私は、市販の地図を頼りにオズ魔法学園へ向かった。市外見物をする余裕なんてこの時の私には全然なく、初めて訪れた世界有数の大都市の中で迷子にならないようにするのが精一杯だった。

その時はまだ少し雲がかかっていた程度だった空は、やがて曇天模様となり、小雨が降り始めた時になつて傘という存在を完全に失念していたことに気がついた私は、これはまずいと大急ぎで学園へ走った。だがすぐに豪雨となり、容赦なく降り注ぐ大量の雨を避けるため、私は偶然見つけた商店街の自転車置き場のトタン屋根の下へ避難した。

そして、そこには先客がいた。

私と同じ年頃の、金色の髪に深淵の紫の瞳の男の子だった。まるで彼岸の住人のように希薄で、どんなに視覚で捉えようとしても臍に翳む、それなのに存在感だけは奇妙に強い、そんな矛盾を伴う不思議な感じの男の子だった。

私はトタン屋根の下に入るまで彼に全く気が付かなくて、それで少し驚いて見つめてしまった。その視線を感じたのか、彼も私に目を向けて、しばらくお互い見つめ合ってしまった。けれども彼は私に興味があるわけではなく、軽く会釈すると雨天へ視線を戻し、その後一言も話さなかった。

なんだか落ち込んでいるような、悲しんでいるような、それでいて楽観しているような、酷く深刻な雰囲気でした。

私は少しでも興味が湧いたが、全く見ず知らずの人に話しかけるような馴れ馴れしい真似はしない主義なので、気安く声をかけることはしなかった。勿論彼の方でも私との会話を望んでいないだろうと思っていたが、真偽の程は今も確かめていない。

それから三十分ほど佇んでいたが、雨音は一向に途絶える気配を見せず、こんなことなら箒を携帯しておけば良かったと後悔した。

魔女の家系に生誕した女性の多くは先天的に、なぜか箒を媒体とした場合のみ、浮遊、飛翔などの重力制御系統の魔法が行使できる空を飛んで行けば、道路も建築物も無視して、学園まで一直線の最短距離で移動可能。まあ、箒を持つてくることを考えるよりも、傘のほうを先に考えるべきなんだろうけど、災難に遭遇した人間は物を事を理論的に考えることができないのだ。そういうことにしておけ。仕方がない、全身ずぶ濡れになるのを承知で学園まで走ろう。私は覚悟を決めて、ふと、隣にいる彼はどうするのだろうかと目を向けると、その姿がなかった。

すぐ隣にいた私に、移動するさいの気配を感じさせず、水を撥ねる足音も聞かせず、彼は忽然と姿を消していたのだった。

どうやってそんなことができたのかわからなかったが、私はなぜだか不思議には思わなかった。彼のその希薄な雰囲気から、雨音の中に溶け込んで消え去ったのだと、なんとなく納得してしまったのだ。

灰燼<sup>Ash</sup>のように。

そんなはずないのに。

つまり、これが私とアッシュ・スカーディノの出会いだった。

国の機関が直接運営している、事実上世界唯一の公立魔法使い養成学校。

オズ魔法学園。

アスベルト帝国第一地区こと帝都の一角に位置するそれは、直径約三キロメートルの正確に円を描いた外壁に、内部の主要道は六方を星を中心部へ向かうように複数描いている、広大な面積に描かれた巨大な複合魔方阵。

中心には本校舎、主用道で分けられた区域に分校舎や寮、運動場に庭園などが施設されているが、その配置も魔法的な布石や楔の類に思えた。

どんな必要性があつて学園の敷地を魔方阵に象つたのか、その事情は学園を紹介する資料や案内書の中には記されていないかった。この時は、全く意味がなくて、ただ魔法使いを象徴する印の一つだったからそう設計したのかもしれないとも考えたが、その辺のことは後になって知ることになる。

まあ、そんな事柄はこの時の私にはどうでもよく、雨の中を全力疾走して、そのオズ魔法学園へ到着した私は、入り口付近の受付で簡単な手続きを済まし、自分に割り当てられた寮へと、再び雨の中へ突入することになった。

ちなみに受付では、天気予報の確認を忘れるような迂闊な人間にはい、私のことです。傘を貸す、なんて気の利いたことはしてくれなかった。

別に薄情だとかム力つくほど無関心であつたとかではなく、単に常備される置き傘が全部なくなっていたためだ。傘を忘れる人は結構多い。言い訳ではありません。まあ、自分の傘を貸してくれる性格の良い人もいなかったから、やっぱり薄情かもしれないけど。

オズ魔法学園の生徒のほとんどは寮で共同生活を営んでおり、実家が国外にある私も当然入居した。

部屋割りは基本的に一室二人で勿論男女別。クローゼットやベッド、机に椅子など、基本的な家具類は学園側で用意されている。風呂やトイレはそれぞれの寮で共同使用。学園食堂の食事は一応一日三食、無料で好きなだけ食べられるけど、栄養重視であまり美味しくない。

ちなみに外でアパートを借りるなり、または実家が幸運にもこの街にあるなどして、そこから学園に通いたいというのであれば、それは規制されているわけではないので、別に構わないのだが、実際外からの通学者は稀だ。なぜかといえば、経済的理由による。なんといつても寮は無料で、多少煩わしい規則や生活当番の類を我慢すれば、小遣いを違ったことに使える。これは私たちの年代にとつて大変強力な誘惑だ。それに人間関係も運がよければ親友と呼べるべき人と出会えるかもしれない。そうなれば快適で楽しい学園生活が約束される、かもしれない。

私の場合はどうだったのか、今も判断しかねている。なんというか、色々と微妙なのだ。

つまり、私と同室だったのは、委員長ことウェンディだったのだ。全身ずぶ濡れ状態の私が指定番号の部屋を見つけ、扉を開けて入ろうとした途端、先に到着していた彼女は制止の声を上げた。

「入っちゃダメ！」

私は驚いて、彼女の指示に従ってしまった。聞きようでは大変失礼な言い方だが、私はこの時そうは思わず、心身共に硬直してしまっただけのように、止まった。

ウェンディはそんな私に気づいていないのか、既に整理し終えたクローゼットの中からタオルを数枚出すと、私に手渡した。

「はい、これ。そんな雨に濡れたまま入ってきちゃ駄目よ。掃除が大変なんだから」

言いつつ彼女自身も私の髪の毛を丁寧に拭き始めた。

そのお節介の焼き方は、もし年上であれば優しい姉や、母のように感じたかもしれない。私にけして笑顔を見せなかった母ではなく、心の中で思い描いていた願望の母の姿。年下なら姉を慕う妹と感じたかもしれない。私にけして懷かず、いつも敵意に近い対抗心を持つていた妹ではない、仲の良い姉妹。

でも彼女は同年代だった。なにより黒髪に三つ編みに黒縁眼鏡、類に残るチャームングなそばかすに、どうしても委員長という言葉が思い浮かんだ。今までも委員長をやっていたんだろうな、とか、きつと委員長に真つ先に立候補するだろな、とか思った。

あまりにもわかりやすい人物像に、私は笑いの衝動が込み上げてきて、抑えきれなくなってしまうた。

「プツ、クククク……」

彼女は私の反応の理由がわからなかったのだろう、不思議そうに呆けた表情をしたが、すぐに釣られるようにして笑い始めた。

「ふふ、うふふふ……」

しばらくの間、二人して笑い合っていた。

これがウェンディフィールド・モレンタニアとの出会いだった。

そして後になって、受付の人がタオルも貸してくれなかったのを思い出し、やはりあの人は薄情だと確信するに至った。

次の日、講堂で入学式が執り行われた。

大半の学校では講堂などという大層なものはなく、たいてい体育館を代用するのだが、この学園には式や講演会などのために使う立派な講堂がある。さすがに帝国自ら出資して設立された学園だけはある。

私は講堂の前で、配布された簡単な資料と一緒に渡されたカードの番号の席を探し、程なく見つけた。番号の配置は同じ教室でまとめられていたらしく、ウェンディは三つ前の席だった。出席番号順だったらしい。

講堂前方の席は新入生で、左後方は在校生。右後方は新入生の親類や教職員、学校関係者といった配置になっている。困ったのが学校関係者の数で、式は大抵その数に比例して長引く傾向にある。偉い人の話は無駄に長く、本当に無駄なのが辛い。

私はこれからの試験を予想して重い気持ちで腰掛けると、すぐ隣の席で同時に誰かが座った。なんとなく目を向けると私は少し驚いた。

そこにいたのは、金色の髪と深遠の紫の瞳をした男子生徒。

トタン屋根の下で会った彼だった。

「「あ」」

私たちは同時の声を上げた。

少し驚いた表情のまま、しばらくお互い沈黙していたが、やがて顔の筋肉が解けると、彼から軽く挨拶する。

「やあ。また会ったな」

彼は微笑み、そして私もこの時、微笑んでいたのだと思う。

「ええ、また会ったわね」

「あんたもこの新入生だったんだな」

「君もね。しかも同じ教室」一呼吸の間を取って私は告げる。「クレアよ。クレア・フィルゴートン」

「アッシュ・スカーディノだ」

こうして、私たちは再会した。

やがて講堂の椅子に全員が着席すると、学校関係者のお偉いさんの長々しい薫陶だか説教だか、そういったありがたくないありがたい話が開始され、私は最初の三十秒で、右の耳から左の耳に垂れ流していた。

ちなみに、魔法使い養成学校の入学式に関する世間一般のイメージは、光の届かない地下迷宮の奥底で、複雑怪奇な魔方阵を中心に、尖った覆面帽子をかぶり、白や黒の統一されたローブを羽織り、蟬

燭を片手に呪文を唱え、邪神や悪魔を召喚し、入学の契約書にサインをする、というものらしい。

しかし実際は他の学校と特に変わることはない入学式だ。小難しくつまらない話を延々と聞かされ続ける。

それは強力な睡眠薬と同等の効果があり、もしかすると言葉に魔力でも乗せているのではないかと思われるほど、強烈な睡魔に襲われた。事前にドーピング 珈琲三杯服用 したにもかかわらず、一瞬でも気を抜けば即座に夢の世界に旅立ちそうなほど、危険な状態に陥った。

隣のアッシュが酷く険しい目つきで呟く。

「クソ、念のためにドーピングしといたのに、試合にも勝負にも負けそうだ」

「ドーピングって、珈琲のこと？」

「紅茶。カフェインは紅茶のほうが多いって知ってるか？」

「初耳。今度試してみるわ」

「試さなくていい。結論はもう出た。どっちも効果はない」

睡魔との闘いは一時間に亘り 私には十時間に感じられた、十数人の長い話の最後にこの学校の第二責任者、つまり教頭先生が登場した。

「続きましては、ギルガメス教頭の薫陶です」

司会の声で私は氣力を振り絞る。経験から言えば教頭の次は校長で、つまり過酷な試練は残り二人で終了する。

そして教頭と思わしき人物が現れると同時に、新生生たちはざわめいた。

「皆さん、お静かにお願いします」司会が窘める。

今まで貴重な言葉を述べてくれたのは、ごく普通のスーツ姿の人たちだった。

しかし、現れたギルガメス教頭は、二メートル近くの身長に、床まで届く純白のローブをまとい、優雅な歩みで壇上に立つ。顔にはローブと同じく白い仮面を装着しており、目の部分に瞑った瞼の状

態を模しているのか、やや吊り上った曲線を描く二つの隙間が開けられている。そして鼻の部分の盛り上がり、空気穴となる部分のみ。ライオンの鬣の如く広がる髪も真白。

それは戯曲に登場する白き魔術師のような姿。さすがに教頭クラスになつてくると格が違つと、私は変なふうに感心してしまった。

やがてざわめきが収まり、新入生はその仮面の中から紡がれる声を待つ。

「……」

私たちは言葉を待った。普段ならお偉いさんのお言葉など絶対に聞こうとは思わないが、この時は違つた。これだけ奇抜な姿を見せたのだ、ぜひ聞きたい。

「……」

私たちは白き魔術師の言葉を待つ。

「……」

あれ？ 私が怪訝に思い始めたと同時に、ギルガメス教頭は華麗にマントを翻して、教師席へ戻つた。

「えー、ギルガメス教頭でした。最後にフォグイ校長のお話です」

終り？ なにも話してないのに終り？ 全然話してないのに終つた？ 一言も喋つてないのに終つた？ 私は頭の中が疑問符で一杯になつた。

「あれで終りか？」隣のアッシュが呟く。

「そうみたいね」

「さすが世界最大の魔法学校、一筋縄じゃいかないな。なんか方向性が違う気もするけど」

私たちが小声で話している間に、次の人物が壇上に上がる。

オズ魔法学園校長、フォグイ・アジル。

齢百歳を越すその顔には年齢に相応しい深い皺が刻まれ、その立場からすれば不似合いに擦り切れた、ギルガメス教頭とは対照的な黒のローブ。頭部には、剃っているのか年齢によって失われたのか、毛髪は一切ない。腰は杖がなくては歩くことも困難なほど曲がつて

おり、元々背の低い体躯がさらに低く見える。しかしその運足に着目すれば、足腰が衰えているわけではないのは、理解できる者にはわかるだろう。

総じてそれは、人を超越しながら人であり続ける、仙人のような雰囲気醸し出していた。

そして御老体は背筋を伸ばして胸を張り、なにかの意味があるのか右手を私たちに向けて伸ばすと、その言葉を厳肅に告げたのだった。

「隣の家へいに塀かこと囲いができたってねえ。へー、かつこいー」

「……」  
沈黙到来。

「……」  
誰もなにも言わない。

「……」  
私たち新入生はなにを言われたのかまるで理解できずに茫然としてしまい、二年三年生は呆れ顔で溜息なんかついちゃったりしているし、教師など学校職員は聞かなかったことにしているのか表情をまるで変えず、つまり校長先生一世一代の発言は、ものの見事に外したのだった。

「……」  
しばらくして校長は懷から扇子を取り出すと、額を軽く叩く。  
「お後がよろしいようで」

そして校長は降壇し、司会は何事もなかったかのように締めに入る。

「以上を持ちまして、本年度入学式を終了させていただきます」  
そして生徒への指示が伝えられていくが、私は とうか一年全員が なんかもう茫然としていた。

「なんだったんだ、今のは？」  
「さあ？」

隣のアッシュの呟きに、他に答える術を持っていなかった。

しばらく誰もいない演壇を見つめていたが、そうしていても仕方がないので私は一旦外へ出ることにした。他の人たちも同じことを考えたのか、疎らに席を立ち始めていた。

そして運命の鐘が始まりを告げる。

## 一話 本気でやってやる 後篇

ドカツ！ ガタンツ！ ドゲシ！

唐突に騒がしい音が講堂に響く。音源に視線を向ければ、新入生らしい二人が司会を蹴り倒して、マイクを強奪しようとしていた。

「うう、私の晴れ舞台。私の美声を伝えるマイクは渡さないぞ」

しかし司会の人 たぶん教師 は抵抗して、頑なにマイクを手放さない。二人はさらにゲシゲシと踏みつけて止めを刺し、ようやくマイクの篡奪に成功した。

そして二人は講壇に上がると、一人が大きく息を吸い込みマイクに向かって叫んだ。

「全員注目！！」

マイクなんか必要ないくらい大きな声で、思わず私は耳を塞いだ。それに注目なものにも、いきなり暴力事件を起した二人に、講堂内の人間はすでに全員視線を向けていた。

教師を始めとした誰もが、事態の推移を止めようとしなのが気になったが、私は入学式に突然騒ぎを起した二人を観察する。

マイクを持っているのは小柄な男子で、吊り目の瞳は赤に近い魔力覚醒者とは違う紫の色彩で、背中で束ねている長い髪は銀色。特徴から推測するに、雨の民の出身、もしくはその親類だと思われる。胸を張り根拠のない自信に満ち溢れる様に、ガキ大将という言葉を連想した。

「愚鈍なる一般生徒諸君！ 我輩の名はシュバルト・シュバイツァー！ これより建国される魔導帝国の総帥である！」そして隣にいる人物を親指で示すと「そしてこの者は我輩の片腕！ 魔導帝国副総帥。ヒスキー・フィフスだ！」

「あ、どうも」

総帥のハイテンションとは対照的に、ピスキーは少ししてれているかのように、穏やかにお辞儀をした、が、明らかに恥ずかしがってはいない。なにが楽しいのかニコニコと笑顔を振りまいている。

その容貌は十人中九人が美少年との評価を下す、中性的な可愛らしい顔立ちで、少し癖のある柔らかそうな金髪に、瞳の色は深遠の紫。背は平均的だが、細い体つきと童顔と合わさって、やや低く見えてしまう。なんとなく子犬を連想し、一家に一匹飼って置きたくなる感じた。手にはなぜかオズ魔法学園推薦の鞆を持っている。

酷似した瞳の色彩に、髪の色は対照的に金と銀の二人。妙に映える組み合わせだが、どういう関係なのか想像はできなかった。いや、魔導帝国の総帥と副総帥というのはわかるのだが、厳密にはそれもわからなかったのだけだ。

シュバルトと名乗った銀髪の自称魔導帝国総帥は続ける。

「これよりこの学園は魔導帝国の支配下に入る。無論！ 貴様ら一般生徒は我が帝国の臣民に取り立ててやるゆえ感謝するがよい！ しかしっ！」誰に向けてなのか前方に指を突きつけ「ありがたく思わない者、もしくは我輩の発言に異議を唱える者は、前に出て名乗るがよい！」

「イエー」

ピスキーは演説するシュバルトの後ろで、学生鞆から出したパーティー用のラッパとクラッカーを鳴らしたりしていた。

唐突な状況変化についていけない私たちだったが、次の展開は大体想像できた。まがりなりとも世界唯一の公立魔法学校、つまりはエリート校であるオズ魔法学園で、始業式に問題を起こしたのだ。問答無用で教師や上級生たちが取り押さえて、補導されるだろう。行く先は職員室か、指導室か。それともそのまま学園を追い出されるのか。

講堂の後ろ側の席の上級生たちの話し声が聞こえてきた。

「なあ、秘密結社クラブってまだあったんだっけか？」

「あれは確か潰れたはずだぜ」

「それじゃ、邪神崇拜クラブか？」

「人数足りなくて愛好会に格下げ」

「それにあいつら、三角帽子みたいな変な白いマスクかぶって素顔を出さないだろ」

「あれは関係ないわ。新手ね」

「でも、あの子、可愛いわね」

「入学式でこういう連中出て来るの、すっかり定番になったな」

「何十年も前からこうらしいけど」

「クラブ名、なんになると思う？」

「魔導帝国クラブじゃないのか？」

「捻りないわねえ」

「世界征服クラブ」

「捻りないわねえ」

「……」

ごく当然のように事態を受け入れて動じない上級生達の会話に啞然とする中、アッシュは呟く。

「なんか後ろから信じられないような話が聞こえたような気がしたんだけど、俺の空耳か？」

できれば幻聴であって欲しいという願いが込められたそれを、私は消滅させる。

「私も聞こえた」

「コラー！」唐突にウェンディが壇上のシュバルトに向かって叫んだ。「あんた一体なにやってんのよ!？」

「知れたこと！ 我輩の世界征服の第一歩としてこの学園支配作戦が現在推進中であることは明確なる事実！」

拳を眼前に掲げて断言するが、そこはかとなく奇妙な言い回しだった。それに勢いも少し落ちてきている感じがする。

「なにわけのわからないこと言ってるのよ！ そんなバカなこと止

めてとつと降りてきなさい！ 騒動を起したことを先生に謝らせて、ついでにあの司会の人にも酷いことしたことも謝らせて それはいでなのか、お仕置きに特別調合練り芥子スペシャル目に塗りつけてやるんだから！」

「そんな宣言を受けてノコノコ降りてくる間抜けがいるわけなからうが！」

「いいからとつと降りてきなさい！」

ウエンディの手にはすでに特別調合練り芥子スペシャルが入っているとされるチューブを手にしていた。なんでそんな物持っているんだらう？

「煩い五月蠅いウルサーイ！」シュバルトは手を振り払う仕草をすると「とにかく我輩の世界征服計画はすでに始まり驀進して止まらないのだ！」また妙な言い方。「なにやら幼少の砌より色々邪魔をしてくれたがもはやおまえの妨害は無駄になつてしかたがなく終わるのである！」

最後辺りはもうなにがなにやら。

「わけのわかんないこと言つてないでとにかく降りて来なさい！」ウエンディは練り芥子入りチューブを投げつけると、ホイップしてシュバルトの額へヒット。パコンという音がいい感じ。

この二人、具体的な関係はあとで知ることになるが、ようは幼馴染らしいというのはこの時点で察しが付いた。ウエンディが色々苦労しているらしいということも。

「ぬう。こうなればいきなり最後の手段！」シュバルトはちよつと痛かったのか額を押さえつつ、パチンと指を鳴らし「ピスキー、例の物を！」

「はい」

間延びした返事と共に、ピスキーは持っていた学生鞆の中から妙な物を取り出しピスキーに渡した。

それは形状としては駆動式短弓に酷似していたが、歪な付属品が装着され、特に下部に伸びている鉄パイプの用途がわからなかった。

矢の再装填の弾倉にしては形状が明らかに変だし、第一バランスが悪くて狙いが定め難いだろう。ようするに、なんなのが見当もつかなかった。

だがこの時の最大の謎は、そんな形状の、しかもサイズが明らかに大きい物を、学生鞆の中にどうやって入れていたのか、そしてどうやって取り出したのかだった。

「なによそれ？ 望遠鏡？」とウエンディの疑問。

そんなことより聞くべきことがあるでしょう。

「ふっふっふ」シュバルトは不適に笑い「そこまで訊くなら教えてやろう」

誰もそこまでとは訊いていない。

「発射ア！」

必要以上の気合と共に引き金を絞ると、球体が射出された。

それはウエンディの頬をかすめて、後方にいたアツシユの額へ「え？」パソコンと見事に命中。アツシユは打撃で仰向けに倒れる。

「見よ！ 鉄球発射機ベースボールー育成ペナントレースマシymbolボールクンだ！ 長い 本物の鉄球だと危ないから硬式ボールを現在使用中」

自信満々の解説を聞き流して、私は倒れたアツシユの側へ。

「あーあ」私は唸ってから「大丈夫？」

アツシユは脳震盪でも起したのか視線の定まらない目付きで、上体を起すと意識を鮮明にしようと思を振った。

「なんで俺に当たるんだよ？」

疑問に答えてくれるのは誰もいない。

「さあ、ウエンディ、どうする？」

不敵な笑みを浮かべるシュバルトに、ウエンディは啖呵を切った。

「どうするじゃないわよ！ もう一回やってご覧なさい！」

「オーケイ」即座に次弾発射。

「わあ！」悲鳴を上げてウエンディは体を反らして避けた。

そしてボールはちょうど立ち上がりとしていたアツシユの額に

またもや命中。再び倒れたアッシュは仰向けの状態のまま、無言でなにやら思案している様子だった。気絶しているわけではなく、半眼ではあるが瞼を開け、しかし茫然としているような、それでいて達観しているような、なんとも奇妙な表情で仰向けのまま動かない。やがてアッシュは呟く。

「だから、なんで俺に、球が？」

自分に二回連続して当たったことにとっても不条理を感じているらしい。あたりまえだけど。

勿論これは偶然にすぎないと思う。しかし運命というものが存在するならば、ウェンディに標的を定めていたボールが、後ろ側にいたアッシュに命中したのは必然だったのかもしれない。

だけど私はこの時こう答えた。

「タマタマよ」

「……」 なにか言いたげなアッシュの視線。

「あ」私は気が付いて「今の冗談で言ったわけじゃないから」

そんなことをしている間にも、壇上で騒動が進展する。

「ウェンディフィールドよ、幼少の頃からの付き合いであったが、我が世界征服の礎となって永久に眠るが良い！ 後で保健室に連れてってやるから」

最後に妙に弱気なことを付け加えて三発目発射。

「ひえ！」

無様なフォームで避けるウェンディの背後を通過したボールは、幸いアッシュではなかった、と思いきや椅子にバウンドして上体を起したアッシュの後頭部に命中。

「グウ！」 打撲部を押さえて呻く。

「さらに行くぞ！」

「この」

四発目をウェンディは椅子でガードし、ボールは天井向けて跳ね上がり、やがて重力の力が勝り落下を始めたそれは、アッシュの頭頂部へ命中。

「オグ！」舌を噛んだような声。

「まだまだ！」

「ハッ」

慣れてきたのか五発目を綺麗に避けたウエンディ。

そして痛みで頭を抱えているアツシユの脇腹にボールは命中。

「おお、おお、おおお」

いい感じのボディブローだったらしく、なんとも痛そうな呻き声。

「オマケだ！」

「甘い！」

六発目も回避したウエンディ。ボールは後方の椅子で弾んで、脇腹を押さえて床に蹲っているアツシユの股間へ「ッ！」命中。なんだか、キンツ、という金属音も聞こえたような気がしたけど、きつと錯覚だ。

シュバルトは弾倉と思われる鉄パイプを鉄球発射機から外すと、

背後に手を伸ばした。

「ピスキー、替えを」

「はい」

ピスキーは指示通り学生鞆から鉄パイプのような弾倉を取り出して渡した。やはりどう見ても長さや鞆の大きさは不釣り合いで、絶対に入れることなど不可能としか思えない。

「ふははは、さあさあどうするどうする？」勝利を確信した笑い声を上げながら、シュバルトは弾倉を取替え「今降伏すれば昔の誼で命だけは助けてやるぞ。については我輩専属の召使にしてやらんこともなし」

「な、に、が、我輩だ！ このチビスケ！」

突然怒声を上げて立ち上がったアツシユは、全身のバネを最大限に発揮した渾身の直球ストレートをシュバルトの顔面にヒットさせた。シュバルトは倒れなかったが、鼻柱に直撃したため鼻血が出る。「な、なにをする?! 愚民その一！」掌で鼻を抑えながら叫ぶシュバルト。

「なにをするじゃねえよ！ このチビスケ！ さっきから人の頭やら脇腹やら男のタマに球をボカボカ当てやがって！ どうなつか覚悟はできてるんだろうな！？ チビスケが！！」

「チ、チビだと！ 人の気にしていることを 気にしてるんだ ズケズケと指摘するとは愚民なれど愚かしさこの上なきは天誅に値すべき！ というわけで公開処刑！ 発射ア！！」

怒り心頭に達したシュバルトは引き金を絞った、が球は出なかった。

「あれ？」

シュバルトは疑念に眩く。

アツシュは進路を塞ぐ椅子を押し退け、次いでウエンデイも押し退けて静かに壇上に足を進める。なんのために向かっているのかは明白だったが、誰も止めようとしなかったのは、その無表情とも思える冷徹な眼差しの奥に宿る激烈な感情を感じ取ったからか。

しかしウエンデイが勇敢にも彼を阻むのに挑戦する。でもちよつと怯えた声で。

「あ、あのね、あなた……えっと、名前はまだ知らないんだけど……えーと、とにかくね、暴力は止めたほうがいいと思うの。なんか今のあなた物凄く怖い顔してるし、あいつ容赦なくボコボコにしようって考えてるでしょ？ でもあつちは武器を持ってるし、入学式でいきなり暴力事件とか起すと、停学とか、もしかすると退学にもなるかもしれないから、ここは一つ話し合いで解決して、後は先生に任せるのが一番いい方法だと思うんだけど。……あの……ねえ、聞いてる？」

勿論聞いていないアツシュは、ウエンデイを無視して足を進め続けた。

「あ、クソ、取り付け方間違えたのか」シュバルトは焦り気味にボロボロホールクンに取り掛かっていたが「あ！」という声の次の瞬間には、ガシャン、と音を立てて鉄パイプが床に落ち「……」彼は沈黙した。

ピスキーが横から覗き込む。

「壊れちゃったね」

「……」

シュバルトは少しの間、無表情に床に転がった鉄パイプを見ていたが、不意に変形クロスボウを背後へ放り投げ　ピスキーがキャッチして、次にマイクも背後に放り投げると　それもピスキーがキャッチして、ボクシングのように両拳を構えた。

「よーし！　ここは一つ男らしく素手で勝負してやろう！　まあ、総帥というか、王者の余裕と貫禄というやつだな！　はっはっはっ」  
開き直ったのか妙に朗らかなシュバルトの科白を無視して、アッシュは講壇の手前で止まった。

そして、自称魔導帝国総帥を見据え、肺に空気を大きく吸引した。不意に、大気の流動が起き難い屋内である講堂内で、風が発生した。

カーテンがゆれ、衣服が靡き、髪が舞い上がる。

その風は通常ではありえない、不自然な動きで、誰もが怪訝に思う。

「！」

そして私は驚愕に目を見開いた。

アッシュを中心に世界法則が高速度で変換され始めた。

世界は厳然たる法則の元に存在している。その万物を支配する宇宙の法則を、自分の脳で言語情報化して視認し、そして法則に強制的に直接介入することで、自分の望む現象を引き起こす。

それが魔法と呼ばれる技。いわば神の定めた法に逆らう行為。

新人生のほとんどはその異常事態に気づいていないが、世界法則を見ることが出来る上級生は俄かに騒然とし始めた。法則を言語情報として見ることは、魔法の基礎であり初歩だ。進級した者なら当然習得しているべきものであり、魔女の系譜に生誕した私ならば見えて当然。

アッシュが変換する法則は空間と大気に強烈な力場を形成し、そ

れは実効命令一つで対象を消し飛ばす極めて攻撃的なそれは…

それは……

「来たれ……」

遙か彼方から届くようなそれは……

「我が元に来たれ……」

歌うように……

「我は絶対の支配者……」

祈るように……

「ゆえに我は深遠なる眷属に命ずる……」

奏でるように……

「古の盟約に基づき我が元に……」

紡がれる言葉は……

「呪文！」シュバルトが驚愕し、慌てて叫ぶ。「ちょっと待て！

それは卑怯だぞ！ こっちはまだ魔法が使えない……」

彼の言葉が終る前に、彼の言葉は終る。

COEOL

「来・た・れ」

爆発音にも似た轟音と同時に膨大な光が講堂に満ちた。

その光に一瞬目眩まされ、視覚が回復した時には、シュバルトは壇上に倒れていた。

アッシュの周辺には魔法の余韻が残留し、その体から放電現象が発生している。魔法の電撃がシュバルトだけを打ち据え、その緻密で正確な攻撃は、他に無駄な損傷を与えていない。

「フー」

アッシュの緩慢な息吹と共に、放電が収斂する。

茫然とその様子を見ていた人々の中から、私は前に出て、アッシュの側に行くと言をかけた。

「ねえ、今の魔法よね？」

わかりきっていたことだが、私は確かめずにはいらなかった。

魔法とは極めて高度な技術で、扱いは大変困難であり、例えば私のように幼い頃から徹底的な英才教育を受けたとしても、その基本能力が発現するのでさえ数年はかかる。一定以上の魔力保有者のみを受け入れ、集中的な魔法訓練を受けるこの学園でも、実際に魔法免許が発行されるのは三割にも満たない。それほど難しいのだ。

それなのに、魔女の後継者である私でさえ到達していないレベルの、精密かつ強力、そして高速度で魔法を行使した。修行も訓練も必要とせずに、魔法免許が獲得しても不思議ではない領域に達している。

「ああ、魔法だ」

答えるアッシュは、なぜかその顔に微かに苦渋が滲んでいた。その瞳を私は見つめる。魔法使いが魔力に目覚めた時、その瞳の色彩はなぜか、深遠の紫に変化する。Deep violet

「あんた、いったい何者なの？」

「はーっはっはっは！」

私の疑問は唐突な哄笑に遮られた。

壇上の上で仁王立ちして必要以上に存在を主張する声の主は、電撃が直撃したはずの 自称 魔導帝国総帥だった。

「甘い！ 甘いぞお！ この超天才シュバルトさまがその程度の攻撃を予想していなかったと思うのか！？」そして制服の上着の胸元を開くと「こんなこともあるのかと対魔法用プロテクターを着込んでおいたのだ！！」

「こんなこともあるのかと倉庫からくすねてきたんです」

いつの間に壇上から降りて 薄情にも 一人で避難していたピスキーが、教職員の間からマイクを手に持って説明の補足をした。

「ちよっとシュバルト！」ウェンディがさらに憤慨して「倉庫から

プロテクター持ってきたって、あなた泥棒したの?!」

「人聞きの悪いことを言うな! この学園は我輩が支配するがゆえに、ちよつと借りただけだ」

支配するとか言っている割には、控えめな言い訳だった。

そして改めてアッシュに、シュバルトは勝ち誇った表情で指を突きつける。

「さあさあどうするどうする!? 愚鈍なる一般生徒改めちよつと強敵生徒! 学園の支配者は誰かその身に思い知らせてくれよう! もしくは改心し我輩の配下となるか? さあ! どちらを選ぶ!」

「わかった」

アッシュが嘆息して答えると、途端にシュバルトは喜々とした。

「おお! そうか、我輩の配下となるか。まあ、貴様ほどの力量の持ち主なら、名誉ある帝国幹部にしてやらんこともなし」

早合点の発言を無視して、アッシュは信じられない発言で返した。  
「本気でやってやる」

「「「え?!」「」」」

講堂内全員の声が重なった瞬間、それは始まった。

「来たれ来たれ来たれ来たれ来たれ来たれ来たれ来たれ来たれ来たれ!」

衝撃波「又オ!」火炎弾「アヂイ!」椅子「オブツ!」突風「クオオオオ!」改めて電撃「オボボボ!」なんか妙な液体「なんか又ル又ルするうう!」以下省略「アンギヤラベブボー!」

凄まじい魔法の嵐が吹き荒れ、その余韻が収まったところ、壇上に残されたのはボロ雑巾に成り果てた魔導帝国総帥 自称 だった。  
「これでよし、と」アッシュの満足そうな呟き。

「いや、良しじゃないって」私は取り合えず突っ込んでから「つていうかなによ、今の連続魔法は? あんたこの学校に来る必要ないじゃない。今でも十分過ぎるほど免許習得できるわよ。なんで入学したわけ?」

秀才とか天才的であるとか、そういうレベルの問題ではない。

これは魔術師の域に達している。そんな人間がまだ学校に通って授業を受けるなど、明らかにおかしい。

「ちよつと色々事情があつて」アッシュは言い難そうに口許を押さえて視線を逸らす。

「そんなことより」ウェンディが間に入って「シュバルト大丈夫なの？　なんか全然動かないんだけど」

「大丈夫だろ、あいつプロテクター着てるんだから」

そのプロテクターは明らかにボロボロ。

「手加減した、とは言わないのね」と私。

「……いや、手加減はしたんだよ。うん」わざとらしく付け加えるアッシュ。

そして誰も救護に向かわないシュバルトに　薄情にも　一人で逃げていたピスキーが壇上に戻って側に寄ると、指先で体をつつ突いた。

全く動かない。

「……」

アッシュに視線が集中する。

「大丈夫、手加減したから」

「さっき本気でやるって言つてなかったっけ？」

「空耳だ」

ピスキーはシュバルトを背負うと、講壇から降りて出口へ向かう。私たちの側を通り過ぎる際、春の木漏れ日のような暖かく軽やかな微笑を向け、挨拶のつもりか軽く手を掲げた。

「それじゃ、ボクたちはこれで」

そして魔導帝国コンビは人々が見送る中、講堂から去って行った。

「……で、結局あれはなんだったんだ？」

アッシュの疑念の呟きに、私は疑念で答えるしかなかった。

「さあ？」

つまり、これがシュバルト・シュバイツァーとの出会いであり、  
ピスキー・フィフスとの出会いだった。  
そしてアッシュの受難の始まりでもあった。

## 二話 悪が栄えた例はなし 前篇

そしてどうなったのかというと……

入学式での騒動で、式の終了後に行われる予定だった説明会は、翌日に持ち越されることが通達され、その日は寮でこれから一緒に暮らすことになる、ウェンディを始めとした同級生たちと親睦を深める談話 無駄話ともいう をして時間を潰した。

そして次の日に、延期となった説明会が各教室で行われた。

私を含めた三十二名の生徒と、担任教師が1ノAに初めて揃う。

ちなみに、魔法使い養成学校の教室というと、一般の人が思い描くイメージは、怪しげなオブジェが飾られ、不気味な未知の生物標本が並べられ、複雑怪奇な魔方阵を中心に、尖った帽子や覆面をかぶり、白か黒の一色ローブに身を包み、呪文の書を手にして、悪魔や邪神の召喚法や、誰かを呪詛する方法、人造生命体の製造法を教える、というものらしい。

しかし実際はごく普通の教室だ。木製の机と椅子が並べられ、黒板があり、後ろには生徒それぞれの小型ロッカーが用意されている。一般の学校となにも変わる所は見られない。

古代禁書で邪神の類を呼び出すこともなければ、呪詛を撒き散らしたりもしないし、人造生物の製造もしない。そもそも国際法で、異界の知性体との意図的な接触や、生命体の製造は禁じられているし、呪いというのは基本的に迷信だ。

他にも魔法学校に対する偏見は山ほどあるが、私もちょっと期待していなかったわけでもない。ここまで普通だとなんか裏切られた気分だ。

おまけに違う方向性での裏切りもあるし。

教壇に立つ先生は黒板に名前を書くと、艶かしいステップで私た

ちのほうへ振り返り、妖艶な微笑を浮かべた。

「というわけで、私がみんなの担任になる、ソニア・カーペンター、二十七歳　ここ注目　よ。みんなよろしくねえん」

赤毛の波がかかった長髪に、ボディラインを強調するラバーワンピースを着用しており、毎朝一時間以上鏡の前にいると推測される化粧はプロの水準に達していて、総じて必要以上に色香を振り撒いている。年齢は三十二歳　ここ注目　で、学園の教師では比較的若い部類に入り、美人に分類される顔立ちだが、あからさまに誘惑している様に、みんなは逆に引いている。

しかしソニア先生は大人の色香に押されているかと勘違いしたらしく、笑みに満足そうな心情が混ざる。

「みんな、これから三年間仲良くしてねえ。でもお、仲良くって言うってもお、変な意味があるわけじゃないから、誤解しないでねえん」  
変な意味があるのは極めて明白。

「先生、質問があります」アッシュが手を上げた。

「はい、なにかしら？　ああ、待って」質問内容を予想でもしたのか、手を振って発言を遮り「スリーサイズは、ヒ・ミ・ツ。私のことを具体的に知リたかったら、特別な関係にならないとね。ああん、でもお、あなたと特別な関係になりたいってわけじゃないのよおなりたいらしい。もう、なにを言わせるのよ。この、お・ま・せ・さ・ん」

最後に唇を鳴らしてキスをするような仕草をする。

「いえ、そんなことじゃなくてですね」アッシュは色香にまったく惑わされず冷淡に、というか少し呆れた様子で即座に否定して「俺が聞きたいのは、なんでこいつがここにいいのかってことなんです」

そして指された自称魔導帝国総帥シュバルト・シュバイツァーが、ソニア先生の代わりに慥然として答える。

「ここの教室だから決まっておるからだろうが」

先日ボロ雑巾に成り果てた割には一日で全快しているのは、保健

室で魔法治療されたおかげらしい。

治癒魔法は高度な技術を要求され、習得は極めて困難だ。人体に限らず、生命体は世界法則が密集しており、その解析情報量は桁違いに多い。それに、通常の治療でもミスを犯せば悪化させる危険を伴うが、魔法による治療行為も同じで、直接人体の法則に干渉する分、その効果による恩恵に比例して危険度も増加する。

魔法医師が尊敬の対象であるにもかかわらず成り手が少ない理由の一つ。

その魔法医師が学園に常駐しているのはさすが魔法学校と賞賛すべきか。おかげで迷惑な奴が次の日には復活してしまうのが困るけど。

ちなみにピスキーは別の教室で、ここにはいない。幸いだったというべきかどうか、判断付けかねるけど。

アッシュは質問の意味を、より明確にする。

「そうじゃなくて、入学式であんな問題騒動起して、停学にもなっていないのが謎なんだよ」

「それを言ったらあんたも処分を受けるべきでしょ」と私。

「なんでだ？」

「なんでと訊く？」

「いや、あれは正当防衛だろ、どう考えたって。額とか後頭部とか脇腹とか男のタマに球を当ててくれて」

「昨日から気になってただけだ、それってギャグなの？ タマに球って」

「くだらねえこと気にしてんじゃないよ。つーか、先にそれ言ったのはおまえだろ」

「くだらないこと憶えてないですよ。まあ、どっちにしろ処分されるべきなのに、どうして二人ともお咎め無しなのか気にはなるけど」

「だから、俺は対象外だって。退校処分はこいつだけ」

「……貴様ら」シュバルトが押し殺した声で、しかし次には入学式の大声に変わり「貴様らっ！ 黙って聞いておればなにやら好き

勝手に言いおつてからに！　もしや我輩を学校から追放しようと思んでいるのではあるまいな？！　この我輩を！　魔導帝国　建国予定　総帥シュバルト・シュバイツァーさまを恐れる余りに伝統在りしオズ魔法学園から退学に追い込もうと企むとは！　貴様らいったい如何なる所存か！？」

机上で立ち上がった、激昂して変な科白になっているシュバルトに、誰かが発言する。

「企みて、初めに騒動起したの、おまえだろ」

シュバルトは無視して続けた。

「これは、つまり、アレなのか？！」

「アレって？」

私の質問に、シュバルトは急に普通の声色になる。

「イジメ？」

なんで急に弱気になるかな。

「どつちかつつーと、おまえがイジメてるほうだろ」アツシュは付け加えるように「ピスキーとか」

「なぜ我輩が我が腹心をイジメねばならんだ！？」

聞き捨てならない言葉だったのか、憤慨するシュバルトに、アツシュは冷淡に指摘する。

「どうみたってイジメだろうが。荷物持ちにさせたり、妙な遊びに無理やり付き合わせたり」

「なにが妙な遊びだ！　我輩が抱く大志は、男子たる者一度はその胸に輝かせ、然るに挫折するが野望なり！　しかしながら我輩はその夢を捨てなかった！　そう！　世界征服は男のロマン！　そして魔導帝国　建国予定　副総帥ピスキー・フィフスは、我が野望と理想と野心とその他色々なものに共感し、志しを同じくする同志である！　イジメるなど言語道断！！」

「あらあら」ソニア先生が妙に呑気に「イジメはいけないわね。みんな仲良くしないとダメよ。責任問題とかあるんだから」

なんか最後辺りにポロツと　ハッキリと　本音が出てたような。

「だからイジメてないつちゅーに」

「シュバルトくん」

唐突に、頭蓋骨のネジが二三本抜けたような能天気な呼び声と共に、教室のドアが開いた。オズ魔法学園指定の学生服ではなく、鉄工場などで採用されている作業服で現れたピスキーは、その服から顔や手に至るまで機械油で汚れており、その手にグレネードランチャーを改造したような武器を持っている。

「シュバルトくん、新兵器が完成したんだ。早速試し撃ちしようー」

「おお！ 例の物が完成したか！ 良し！ 試験射撃に行くぞ！」  
シュバルトは喜びの声で同意する。

「勿論、最初に引き金を引くのはシュバルトくんだよ。初めて製造したから、暴発するとか誘爆するとか、別にそういう危険を考えて君にやらせるわけじゃないからね」

考えているようだった。

「勿論だ、副総帥よ。試射を最初に行う名誉を総帥に譲るその心、我輩はしかと感じ取っているぞ」

全く感じ取っていないようだった。

「それじゃ、校庭にレッツゴー」

教室から去って行く二人に、説明会はどうするのか、訊く者も止める者も、誰もいなかった。

「イジメてるわけじゃなさそうだな」アッシュは誰ともなしに呟く。  
「どっちかっていうと、イジメられてるって言ったほうがいいかもしれないわね」と私。

「もしくは実験台に利用されているというか」

「あーもう！」唐突にウエンディが立ち上がった。「そんなことどうでもいいでしょ！ いいのか？ 説明会が全然進んでないじゃない。先生の名前だけよ、聞いたのは。いい加減に静かにして、先生の話を聞きましょうよ。そうでしょ」

「シュバルトどっか行っただぞ」

「後でわたしが代わりに説明しておくから。こんなんじゃない。経つても終わらないじゃない。わかったわね、みんな」ウェンディは教室一同を見渡した。反対するのは誰もいなかったのだから「というわけで、先生お願いします」

「はい、ありがとうございます、ウェンディさん」催促を受けたソニア先生はチョークを手にして「じゃあみんな、まずクラスの運営にあたって色々と役職を決めるんだけど。委員長とか、副委員長とか、風紀委員とか」言いつつ黒板に書いていく。「まあ大体のことはわかると思うから、細かい説明は省いて、さっさと決めちゃいましょう。先ず委員長から。立候補者はウェンディさんの他に誰がいるかしら？」

「ちよつと待つてください！」ウェンディが怒鳴る。

「あら、どうしたの？」少し驚いたようにソニア先生は尋ねた。

「なんでわたしがいきなり立候補してるってことになってるんですか？！」

「ええ？！」先生は信じられないといった表情で、次には怪訝に「

……立候補しないの？」

「しません！」断固として否定するウェンディ。

「どおしてえん？　今まで委員長やってたんでしょ？　学校が変わったからって自分まで急に变えることないわよ。今までどおり委員長をやるべきだと先生は思うわ。他の人だと不安だし」

甘えるような声で、最後あたりに本音が出ているソニア先生に、ウェンディは断言した。

「わたしは委員長なんかやったことありません！！」

「「えええー！？」」「」

教室一同、声を上げる。

「ってなんでみんな声を揃えるのよ！？」

皆はお互い顔を見合わせながら理由を口にする。

「だって、なあ」

「なんか委員長って感じたもんな」

「入学式の時といい、今といい」

「お節介で、黒髪三つ編みの、黒縁メガネ」

「ソバカスがチャームポイント」

「委員長のイメージにピッタリ」

「絶対委員長やるべきよねえ」

「それがいいよな」

「わたしウエンディさんを委員長に推薦しまーす」

「あ、俺も」

「私も」

「ぼくも」

やがて口々にウエンディ委員長推薦の声上がるが、ベキリ！と木材が圧し折れる音で途絶えた。皆の視線は、ウエンディが左手だけで握り潰した椅子の背凭れに集中する。後の身体測定で判明するが、ウエンディの握力は新人生の中でトップだった。細い腕をしてどこにそんな力があるんだか。

「あんたたち一度きっちり話をつけたほうが良さそうね」

静かな声の中に、本物の殺気を感じ取り、教室一同沈黙する。

「えー、ゴホン」ソニア先生が場を執り成すように咳払いをすると

「じゃあ、委員長は他の人に頼むとしましょう。ウエンディさんは影の女番長ということで」

「誰が影の女番長ですか！」

というか、言い回しが古い。

「じゃあ、表の番長は誰なんです？」

私の質問に先生は当然のように答えた。

「勿論アツシュくんよ」

「なんで俺が不良代表なんです！？」

憤慨するアツシュに私が教える。

「入学式で番長決定戦やったからでしょ」

「あれは違っただろ！」

「じゃあ、魔導帝国総帥決定戦？」先生は首を傾げる。

「そうじゃなくて」

「委員長決定戦？」  
「決定戦から離れてください」  
「あー、もう」ウェンディが叫んで「いい加減にしてください！  
全然話が進んでないじゃないですか。先生早く役員を決めましょう。  
こんなこと繰り返し返してたら日が暮れますよ」  
「それもそうね。えーと、じゃあみんな意見はないかしら？」  
再び教室一同が口々に話し始める。  
「やっぱりウェンディさんが委員長やったほうが良くないか？」  
「それ言ったらまた怒るわよ」  
「総帥にやってもらおう」  
「シュバルトか？ あいつ出て行っただぞ」  
「っていうか、誰も出て行くの止めなかったな」  
「いても邪魔になるだけじゃない」  
「さり気に酷いこと言っただろ」  
「じゃあ番長にやってもらおう？」  
「誰が番長だ」  
「キミ」  
「だから違っただろ！」  
「誰か立候補する人いないの？」  
「じゃあ、あんたがやりなさいよ」  
「嫌よ、面倒臭い」  
「あの可愛い男の子にやってもらったとか」  
「プスキーか？ あいつはクラス違うだろ」  
「それになんか気に食わないしよ」  
「男のジェラシーはキモイぞ」  
「誰がジェラシーだ」  
「推薦するしかないんじゃないか？」  
「あー、それが一番良いかもな」  
「最初の三人以外な」  
「そうね。怒るし」

「やらせても投げ出しそうだし」

やがて話が一つの方向へ纏まり、ソニア先生はみんなに質問する。  
「それじゃあ、誰か推薦する人はいるう？」

最初に私が手を上げた。

「はい、クレアさん。誰を推薦するのお？」

「推薦する前に、私たち自己紹介もしてないんですけど」

「……」

しばらくの沈黙の後、ソニア先生が誤魔化すように笑った。

「そう言えば、そうだったわね」

そうして、紆余曲折の末、1ノA三十二名の自己紹介がされたわけだけど、面倒なので具体的な紹介は省く。

ちなみにクラスの全員が私たち四人の名前を知っていたのは、入学式の一件があったからで、そしてそれだけ知っていれば何一つ支障がなかったのは、その後のクラスを中心勢力が決定した、ある種の既成事実だったのだと、今は思う。どうでもいいけど。

なお委員長は、結局私が立候補して収まった。こうしないと終りそうもなかったのだ。

「さて、これで自己紹介も終ったし、役職も全部決まったわね。これでクラス運営の基礎ができたわ」

中学生を相手にするみたいない方だと私は思った。確かに三ヶ月前まではそうだったけど。

ソニア先生は一度咳払いし、これまでとは違って急に真面目な表情に変わると、私たちに語り始めた。

「さて、みんなはこれから三年間、魔法使い免許修得に向けて勉強します。きつと辛いことや苦しいこと、色々な困難が待ち受けていると思う。でも、それをここににいるみんなと一緒に力を合わせて乗

り切って欲しいの。あなたたちの未来を遮る壁を、みんなの協力で乗り越えた時、それは楽しい思い出に変わるわ。そしてかけがえない宝物になる。友情って言う一生の宝物よ」

ソニア先生は1ノAの生徒を見渡した。

「みんなわかった？」

クラスメイトのそれぞれが、お互いの顔を見合わせる。なにやら騒動の連続で停滞していたが、学校らしくない始まりが終り、そして学校らしい本当の始まりが始まったのだと感じた。

そして一瞬だけ教室の心が一つになったような気がした。

答えたみんなの声は綺麗に揃っていたから。

「……はい……」

ドゴンツ！

返事をした瞬間、廊下側の壁が崩れ、その瓦礫に ウエンディを含む 数人が埋もれた。そして大きな穴の開いた壁から粉塵と共に現れたのは 予想はつくだろうけど 二人の人物。

「ハーツハツハツハ！ 正義を落とせと悪が呼ぶ、地獄の底の呻き声、光が消え去り闇に怯えよ、古今東西悪が栄えた例は無し！ 魔導帝国総帥シュバルト・シュバイツァー！ タイミングを見計らつて 見計らつてたのか 登場！」

グレネードランチャーを改造したような物を肩に担いで仁王立ちするシュバルト。

「ボクもいまーす」

ピスキーがその後方で、一般的にポンポンと呼ばれるチアガールが持つ毛糸で作られた大きな房を手にも、珍妙なダンスを踊っていた。念のために説明しておくが、服装は指定された男子制服で、チアガールの格好はしていなかった。していたら一部の女子 さらに一部の男子 が喜んだことだろう。

「……おまえなあ」アッシュが呻く。「今すつごく盛り上がった所なんだぞ。三流学園ドラマみたいだったけど」

シュバルトは皮肉気に口を歪ませ、不敵に笑う。

「フッフッフ、そんな盛り上がりなど魔導帝国総帥として許さん。この学園は悪が支配するのだ」

「さっきおまえ、悪が栄えた例は無しとか言わなかったか？」

「気のせいだ」

明後日の方向を見て答えるあたり、単に言い間違えただけらしい。ガラガラ……

不意に瓦礫の中から誰かが立ち上がった。

「シューバールトおお……ああんたねえええ」

ウェンディがこの世の者とは思えない怨嗟の声とともに復活した。埃と破片に塗れたその姿は「学校の怪談・成仏できぬ委員長の亡霊」という感じだった。

「誰が委員長の亡霊よ!？」

つい口に出てしまっていた。

「ぬう！ 成仏するが良い！ 怨霊めが！」

「誰が怨霊よ！ シュバルト、あんたまで言ってくれる！」

「ハンニャーハーラミータージョージョージュージュームゲムゲシヤラー」

ピスキーが例の学生袍の中から数珠を取り出すと、怪しげなそして適当な 読経を開始する。

「いい加減に止めなさい！」数珠を耑り取って止めさせてから、改めてシュバルトに「シュバルト！ あんたいきなり壁を壊していったいどういふつもりなの？ っていうかなんで入り口から入ってこないのよ?!」

「登場シーンにはそれなりの演出がないと」

「いらないわよそんなの！」

「っていうかさ」と私は「あんなにしに戻ってきたのよ？ 新兵器の試し撃ちに行っただんじやなかったの？」

「それは！」シュバルトはアッシュを指差し「我が宿敵、魔法戦士アッシュマンを倒しに舞い戻ったのだ！ 入学式のリベンジである！」付け加えて「新兵器の試し撃ちが終ったのだな」

後で知ったことだけど、校庭の花壇が滅茶苦茶に破壊されていたそうだ。

そして打倒宣言を受けたアッシュは、疑念で首を傾げてシュバルトに尋ねた。

「魔法戦士アッシュマンってのは、なんだ？」

「悪の組織に立ち向かうのはヒーローものと相場が決まっているだろう」

「わけわかんねーことを」アッシュは頭痛でもするのか額を押さえて呻く。

「ではアッシュマンよ、我が野望と新兵器の前に倒れるがよい！」そしてグレネードランチャーらしき物の引き金を絞る。

ボンッ！ という少し湿気た火薬の発火音とともに発射されたのは、ゴム十字弾。銃口から出てからコンマ単位で折り畳まれていた十字が開き、破裂音に反射的に反応して咄嗟に伏せたアッシュの頭上を通過し、教室の窓を破壊して外へ飛び出た。

教室一同、驚愕の目で割れた窓を見つめる。

「はっはっはっ！ 見たか！ 新兵器ゴム十字弾発射銃。その名も！ ゴムゴムクロスパニツシャー三号だ！」

「新兵器なのに三号なんだ。いや、そんなことより、それ軍が暴徒鎮圧に使うやつじゃない？」

ゴム十字弾は命中させた対象を一撃で行動不能状態にするほどの威力があるが、ゴム製の大きな十字が衝撃を分散させるため大怪我にはならないらしい。そのため死傷者を限りなくゼロを目標とした作戦などで使用される。

私の質問に、シュバルトは必要以上の自信を持って肯定する。

「そのとおり！ それをヒントに開発したのである！」

「っていうかそのまんまじゃない。いえ、サイズが大きくなっているあたり、むしろ悪くなってる」

「と言うわけで第二弾発射！」シュバルトは都合の悪い私の言葉を無視して引き金を絞った。が、ゴム十時弾は出なかった。「あれ？」

疑問符の付いた声のシュバルトに、ピスキーが答える。

「弾切れみたいだね。そういえば試し撃ちのあと弾を込めてなかったね」

「では早速予備弾を。昨日弾込めに失敗して酷い目にあつたような気もするが」

「今日は大丈夫だよ。だって試し撃ちで全部使っちゃって、弾はもう残ってないから」

なにが大丈夫なのか。

「そうか……」しばらく表情なく沈黙してから「では弾を取りに行くから、それまで待っていてくれ」

「来たれ！」

さりげなく撤退宣言をして逃げようとしたシュバルトに、速攻でアッシュが雷撃を放った。シュバルトは直撃を受けたが、しかし今回は倒れることはなく、仁王立ちで高笑いする。

「フハハハハ！ 同じ過ちを繰り返すとは、アッシュマン恐れるに足りず！ 対魔法プロテクターを二枚重ねで着込んでいるのだ！

これなら連続魔法も耐久可能！」

「せりや」

アッシュの跳び蹴りが、無意味に勝ち誇っているシュバルトの顔を強打する。

「オブツ！」

頭部が残像する 骨は大丈夫かとも思う ほどの速度の蹴りは、シュバルトを勢いで壁に叩きつけ、二回連続の衝撃で脳震盪を起したのか、目を回して気絶した。プロテクターには魔法耐性はあっても、直接的な攻撃には効果がない。

そして何気にシュバルトから数メートル離れていたピスキーは、倒された自称魔導帝国総帥の側によると指先で軽く突いて、完全に気を失っているのを確かめると、その体を背負った。

「よいしょつと」そしてにつこりとこちらに微笑み、手を軽く掲げる。「それじゃ、ボクたちこれで」

そうして何事もなかったかのように去って行った。

静寂が戻った教室で、ソニア先生が呟いた。

「壁を壊しちゃ駄目じゃない。修理とかあるのに……」そしてみんなに「いいですか、学校の備品や学校そのもの 壁のことを言っているらしい を壊しちゃダメよ。物や建物は大切にしないとイケないわ。修理費とか責任問題とか色々あるんだから」

また最後あたりに本音が。

「そんなことより、なんであいつを停学なり退学なり、処分しないんですか？」

アッシュがソニア先生に抗議に近い質問に、ウェンディが反論する。

「ちょっと、せつかく入学したのにいきなり退学させるようなこと言わないでよ」

別に言わなくても処分を受けそうな気がしたが、ソニア先生はにこやかに否定した。

「やーねえ、こんなことで一々処分したら、ここの学校生徒いなくなつてとつくの昔に廃校になつてゐるわよおん」

「……」

信じられないような発言を軽くしてくれて、教室一同沈黙した。

## 二話 悪が栄えた例はなし 後篇

そして次の日から本格的な授業が開始された。

念のために言っておくが、怪しげな儀式の類はしていない。ごく普通の歴史が私たちのクラスの最初の科目だった。

科目担当教師はイド・ラックマン先生。笑顔のように少し垂れた糸のように細い眼が特徴の、穏やかな雰囲気四十代の男性教師だ。イド先生は自己紹介の後、手始めにオズ魔法学園創立の話をした。「魔神ドロシーを封印したことで二十八聖紀最高の魔法使いと称されたオズの発案によって、世界初の公立魔法使い養成学校の設立が計画されました。世界魔術師連盟を始めとした数々の理解者を得て、資金が集められ……」

その時の主な出資者は世界魔術師連盟の他に、国際総合企業デ・ヴァイス財団と国際複合企業アトミール商会。そしてこの国、アスベルト帝国だった。

だが、世界で三本指に入る宗教、教会登録者数五億人は下らないと言われ、領土のない宗教国家とさえ呼ばれている神約教会では、魔法使いは信仰的に敵意の対象になっている。

魔法使いの誕生は、神の定めた掟に逆らったがゆえに誕生した巨人を発端としており、そして魔法は神の定めた法に逆らう行為と同義。長じて魔法使い・巨人の末裔は、神の反逆者と見做されている。政治的宗教的な問題を抱えるのを承知しているはずなのに、巨人の末裔たちの育成にアスベルト帝国という国家が絡んだ理由は、単純な軍事目的であるというのは周知の事実だった。他の二つの民間企業も似たような理由らしい。勿論アスベルト帝国政府や皇室が正式にそう発表したわけではないのだが、いわゆる公認の秘密というやつだ。

正式に魔術師連盟から資格認定された魔法使いは、無装備状態で

完全装備の戦闘工兵と同等の能力を持つ。先天的特殊工作員ともいえる私たち魔法使いは、あらゆる組織が喉から手が出るほど欲しい貴重な人材なのだろう。

そういう理由で学園の卒業生は大抵の場合、前記の三つに関係するところへ就職するのがほとんどだそうだ。

まあ、そういった殺伐とした理由で設立されたオズ魔法学園だけど、今の私たちにはその辺の事情は基本的にどうでも良い些末なことだ。

ちなみに一応建前としては「こうして二十八聖紀最高の魔法使いオズはこの学園を創立しました。明日の魔術師<sup>エリート</sup>、真なる巨人を育成するために」である。

信じている生徒がいるのか怪しいけれど、誰も気に留めていないのが実情だろう。

一段落が着き、イド先生は教室一同を見渡す。

「えー、ここまででなにか質問はありますか？」

「はーっはっはっはっは！」

返答代わりに高笑いが響き、外の窓を開けてシュバルトとピスキーが登場。

「昨日は器物破損で散々絞られたので、今日は規則正しく登場だ」

「だったら普通に入り口から入って来いよ」アッシュは呆れた様子。

「というか、ここ三階だぞ。どうやって入ってきたんだ？」

「はっはっはっ、屋上から降りてきたのだ。窓のすぐ側で登場時期を見計らうのはちょっと怖かったので、二度とやらん」

窓から顔を出して見ると、縄梯子が屋上から吊るされていた。そこで登場するタイミングを計っていたらしい。随分危険な真似を。

「授業もちゃんと受けなさいよ」ウェンディが「こんなこと繰り返ししてたら日数が足らなくなって留年するわよ」

「ふははははは！ 総帥とも在ろう者が愚民と同じ授業を受けるなど言語道断！ ちゃんと届出を出せばレポート提出で単位習得可能なのだ」

また弱気というか、律儀というか。

「勉強についていけなくなるでしょう」

「ふっふっふっ、じつは遅れを取らぬように密かに勉強しているのだ。総帥たる者、高学歴当然！」

「わー、意外と真面目なんだねー」ピスキーが拍手する。

「真面目じゃねーだろ」アッシュは嘆息する。「真面目なら素直に授業を受けろよ。っていうか昨日の今日でなにやらかす気だ」

「余裕のあるふりをしても無駄だ。今回はしつかりチェック済み、ゴム十字弾発射銃ゴムゴムクロスパニツシャー三号は弾数バッチリ完全装填！」

手にするグレネードランチャーは回転式の稼動装置が付けられており最大六発まで装填可能のようだ。そして肩と腰に予備弾が詰められた弾薬ベルトをかけている。

「それで？」私は冷淡に尋ねる。

「それだけが」ちよつと弱気な口調になるシュバルト。

「つまり、それで俺をボコにしてやろうと？」とアッシュ。

「その通りである！」

すぐに元の調子に戻ったが、アッシュは嬉しくもなんともないらしく、苛立ったように叫ぶ。

「なんで俺を目の敵にするんだ？！」

「貴様が我が野望を阻むからである！」

「してねーよ！ おまえが勝手に俺に絡んでくるだけだろ！ このさいハッキリ言っておくけど、俺はおまえと関わりたくないんだよ！ おまえがどんな問題起そうが知ったことじゃないが、俺が問題を起したってことになるのは、シャレじゃ済まないほどやばいんだ！」

「なんで？」私は深く考えずに訊いた。

「魔術師連盟の監視対象リストに名前が載ってんだよ。問題起したら審問に連行するぞ、あいつら」

「……は？」私はその意味の重大性を一瞬理解できなかった。

「監視対象リストって、あんた危険人物に指定されてるってこと？」  
世界魔術師連盟。その名が示すとおり、世界中の魔法使いを総括し相互支援ならびに協力体制を維持する組織であり、神約教会と双壁をなす、もう一つの領土のない国家と称される巨大組織。当然といふべきか、一応オズ魔法学園も魔術師連盟の管理下にある。

そして、世界魔術師連盟において監視対象リストに掲載される意味は大別して二種類。政治経済において魔術師連盟やその関係に多大な影響を与える重要人物に対する常時警戒のためか、なんらかの危険性を孕んだ魔法使いであると目されているかのどちらかだ。

アッシュは、話からして後者と推測された。

考えてみれば入学式で見せた、高レベルでの魔法行使はその危険性の片鱗なのだろう。もしアッシュが実質的な被害をもたらす行為などの問題を起せば、注意、警告が行われ、場合によっては、拘束、強制連行も行われる。そして魔術師連盟による審問裁判などが行われ、結果次第では魔法使い資格取得が不可能になるばかりではなく、高い確率で魔導士 魔法使いの犯罪者の総称 の烙印を押され、専門的な施設に収容されることになる。

「あんた、なんでまたそんなことになってるのよ？」

「色々あるんだよ。と言うより、一つしかないんだが」

その色々が一つかを知るのは後になってからだった。

「そうか、貴様は魔術師連盟の者なのか」シュバルトが納得したように頷く。

「……なんか違う」

「やはり我輩が見抜いたとおり、世界征服を阻む正義の味方っぽい奴なのだな！」

「全然違う！ っていうか、ぼいってなんだ？ ぼいってのは？」

「問答無用！ 我が野望の前に倒れるがいい！ 魔法騎士レイアーシュよ！」

「だからそういうことは止めなさいって言ってるでしょ！」

ウェンディの抗議は無視して、シュバルトは引き金を絞る。

発射されるゴム十字弾は銃口から発射された途端、秒コンマ単位で顎を開きアツシユへと襲う。

だがアツシユは引き金が引かれる直前に椅子を投げつけていた。抱擁に四本腕を広げたゴム十字弾は椅子に命中して、威力が相殺された二つの物体は破損して床に落下する。

「来たれ！」

併せて魔法を放ち、衝撃波がシュバルトに命中した。しかしプロテクターの恩恵で平気な顔をして立ち続け、そして直接素手で攻撃してくることを警戒してか、銃口はしっかりアツシユに向けて牽制していた。

「ふははははは！ またまた同じ過ちを繰り返すとはレイアーツシユ愚かなり！」

勝ち誇るシュバルトが持つ、グレネードランチャーの回転式弾倉部が不意に落下した。ゴトリと重い金属音を立てて床に転がった弾倉が不自然に変形していることから、衝撃波はシュバルト本人ではなく、この部分に命中していたらしい。

「ああ、これを狙ってたのかぁ」

ピスキーが手をポンツと叩いて朗らかに納得する。

「……」シュバルトはしばらく無言で落下した弾倉を見つめ、不意にグレネードランチャーを背後に投げると 勿論それはピスキーがキャッチして 拳を構える。「よし、男らしく素手で勝負してやる」

アツシユは椅子を投げつけた。

「ぬお！」驚愕したシュバルトは、両手と腰と左足を右方向に無理やり捻った、妙な動作で避けた。「危ないではないか！ こんな物が当たったら怪我をするだろ！」

「テメエが言うな！」叫び返して二つ目を投げる。

「オブ！」回避失敗して顔面に命中。「貴様！ 魔導帝国総帥たる我輩に椅子を当てよったな！」

「ついでにパーンチ」

左ストレートでシュバルト、ノックアウト。

ピスキーはシュバルトが完全に気絶しているのを確認する。

そして背負うと私たちに軽く手を掲げた。

「それじゃ、ボクたちはこれで」

そして去って行った。

教室に平穏が戻ると、ウェンデイが心配そうにイド先生に尋ねる。

「あの、これって暴力事件になるんでしょうか？ アッシユくんはどうなってもいいんですけど、シュバルトを退校処分にするのはちよつと待つて欲しいんですけど」

「俺はいいのかよ」

アッシユの抗議に、イド先生は微笑んで答えた。

「大丈夫ですよ、この程度なら二人ともお咎め無しで済みます。だいたいこんなこと一々気に留めていたら、とつくの昔に廃校になってますよ」

「なんで問題校ってことをあつさり暴露するんです！ っていうかここエリート校じゃなかったんですか？！」

イド先生は先日ソニア先生と同じように、妙に朗らかな笑顔で答えた。

「はっはっはっ、これまた異なことを。エリート校に決まっているじゃないですか。だから、見逃されるのですよ」

「人生的な教訓ですね」

なんだか私は納得した。

そしてどうなったのかというと、次の日。

「だからそういうことは止めなさいって！」

ウェンデイの制止の声を無視して、シュバルトは声高に叫ぶ。

「今度は倉庫からくすねてきました魔法結晶素材で作ってみましたスペシャルウェポントキメキ電撃放電放射装置ビビットガン！」息継ぎして「貴様に対抗して雷攻撃である！ こいつの威力は凄いぞ

！」

アツシユは無造作にシュバルトの剥き出しの頭を掴むと一言。

「来たれ」

プロテクターに守られていない露出部分に、直接電撃を送られてシュバルトは気絶した。

そしてピスキーが様態を確認してから背負うと、片手を掲げていつもの挨拶をして去って行く。

「それじゃ、ボクたちはこれで」

そしてどうなったのかというと、次の日。

「だーからー！」

ウエンディの叫び声は無視されて、シュバルトは叫ぶ。

「アツシユレンジャー！ 今度は犯罪取り締まりスペシャルホルド捕縛くん！ これで貴様の動きを封じてくれる！ 動けない者を葬るなど造作もないこと！」

「いきなりドロップキック」

気絶したシュバルトを背負ってピスキーは、片手を掲げて挨拶をして去って行く。

「それじゃ、ボクたちはこれで」

そしてどうなったのかというと、次の日。

「もー、やめてよー」

ウエンディの懇願は無視して、シュバルトはアツシユに指を突きつける。

「さあ、マスクアツシユ！ このハイパーウェポンにて永久に眠るが……」

「喧しい！」

科白の途中で力任せに殴り倒した。

そして気絶したシュバルトをピスキーは背負って、片手を掲げて挨拶して去って行く。

「それじゃ、ボクたちはこれで」

そしてどうなったのかというと、次の日。

「いい加減にしない！」

「あがががが！」

椅子の背凭れを片手で握り潰すウェンディの握力によってくりだされたアイアンクローにて、科白を言う間もなくシュバルト撃沈。

ピスキーが背負って、片手を掲げて挨拶して去って行く。

「それじゃ、ボクたちはこれで」

そしてどうなったのかというと、その日の放課後。

機械技術実習室にてシュバルトは新兵器開発に勤しんでいた。私には全くわからない複雑な設計図を基に装置を組み立て、溶接する様子を私はなにはなしに眺めていた。

溶接の火花が綺麗だが、直接視認すると網膜や視神経を傷めるから着用すると、特殊ゴーグルをシュバルトから渡された。シュバルトの体で電気火花が隠れる位置に立っていたので外していたが。それにしてもわざわざ作業場内での規律を守るよう指示するとは、律儀というか、傲慢不遜のようでは何気に委員長の影響がある。

いや、クラスの正式な委員長は私なんだけど。

「ふっふっふっ。待っているろ、アッシュ。我が野望の前に立ちはだかったことを後悔させてやろう」

私はその様子を眺めながら、どうしてシュバルトが世界征服をどうも本気で考えているのかふと疑問に思った。まあ、なにか根本的な所で間違えているけど。

「それはボクが教えてあげるね」

唐突に真横から声をかけられた。

「ピスキー、あんたいつの間にかいたの？」

技術実習室に直前までいなかったピスキーが、入室も接近してきたことも、全く感知できなかった私は少し驚いた。

「今だよ」

端的な答えに、いつもの無邪気で微塵の悪意も感じられない微笑み。

「あ、そう」私は追及する気をなくしたが、しかしふと気が付き「教えるって、なにを？」

「シュバルトくんが魔導帝国を建設しようとする理由に決まってるじゃないか」

「なんで私の考えてることがわかったの？」

私は無言で思考していたのだ。

しかし最も重大な疑問を完全に無視して、ピスキーはいつもの学生靴の中から、分厚く大きな本を取り出すと サイズが靴より大きいのは言うまでもなし 牛乳瓶の底のような眼鏡をかけて、語り始めた。

「それは悲しい出来事でした。幼少のシュバルト・シュバイツァーは両親と姉に囲まれ幸せに暮らしていました」  
「なんか口調が変わっている。」

「しかしある日、父が謎の失踪を遂げたのです。いくら探しても父の姿は発見できず、やがて警察も捜索から手を引いてしまいました。しかし残された家族は諦めませんでした。きっと父は見つかる。いつか必ず帰って来る。それまで諦めてはいけなないと。しかし母は二人の子供を養うために働き、いつしか過労で倒れ、病を患いこの世を去ってしまいました。うう、うううう」

ピスキーはハンカチを眼に当てて泣き始めた。涙が全く出ていないのが気になったけど。

しばらくして鼻をかむと、語りを再開する。

「……失礼しました。残された姉とシュバルトは約束しました。二

人で助け合って生きていこうねと。しかしその姉までもが流行り病に罹り床に臥せってしまったのです。シュバルトは決心しました。自分の魔法の才能を使って姉を助けようと。オズ魔法学園に入学し、最高の魔術師となり、そしてたった一人残された肉親に献身の全てを捧げようと。ああ、なんと健気なのでしょう」

「……」なんだか意外な話を訊かされて、私は意表を突かれた気分だった。しかし「で、世界征服とどう繋がるわけ」

「つまりね」口調を戻して「世界征服してしまえば、世界中の医者や自由に使えるし、お父さんを探すのも簡単だなんてことなんだよ」

「……」  
どう返答するべきか、私は悩んだ。もっと違う方法があると思う、  
というか普通はそんな結論には至らない。

「ふっふっふっ」それまで新兵器製造に勤しんでいたシュバルトがその手を止めて笑い始めた。「はーっはっはっは！ 完成だ！ ついに完成したぞ！ 見ているアツシュ！ この新兵器で貴様を打ち倒してくれる！ そう我が野望は誰に求められぬ！ 世界は我輩のもの！ それは誰のためでもない己のためだけの野望なり！ ハッハッハッハッハッハッ！」

「……姉さんのためじゃなかったの？」

ピスキーに訊ねたが、その時にはすでにシュバルトの側と一緒に喜んでいた。

「わーい、新兵器完成バンザイ。これの設計図を売ればいくらになるかなー？」

後で知ったのだが、ピスキーは新兵器の設計図を帝国軍兵器開発部に売っているそうだ。結構金になるらしいけど、素人が設計した物を買う開発者というのはいったい。

それにシュバルトの生い立ちなどに関しても、どこまで真実なのか虚言なのか。

結局、この時ピスキーの話したことがどこまで本当だったのか、現在でもわからない。

そしてどうなったのかというと、次の日、教室にてシュバルトが規則正しく扉を開ければ、物凄い形相のウェンディが待ち構えていた。

「止めてって言っているのがわからないの!？」

その怒鳴り声を、ちよつと冷や汗を垂らしながら　ちよつと怖いらしい　聞き流して、シュバルトはアツシュに宣言する。

「魔法戦隊アツシュパワードよ！　貴様の命運はもはやこれまでと知れい！　この新兵器時空歪曲制御装置ブラックグレイブトンホールにて貴様を時空の彼方へと飛ばしてくれるわ！　つまり！　たぶん人類史上初タイムスリップ経験ができるぞ！　時の旅人だ！　羨ましいぞアツシュ！」

「じゃあ、おまえがやれ」

冷淡に言い放つアツシュに、シュバルトは明後日の方向を向く。

「いや、時空の狭間の揺らぎが上手く計算できなくて、推測で百年単位での誤差が生じるだろうから、まあ初チャレンジはおまえに任せる」

「あつそ」興味なさそうな声のアツシュ。

「うむ！　では行くぞ！　時空警察アツシュバン！」

以下省略。

ピスキーは気絶しているシュバルトを背負うと、手を軽く掲げて挨拶して去って行く。

「それじゃ、ボクたちはこれで」

「先生！　停学でもなんでもいいですから、あいつをなんとかしてください！」

悲痛に訴えるアツシュに、ソニア先生は誘うような仕草をしてみせる。

「まあ、いいじゃないの。喧嘩するほど仲が良いつてね。仲良きこととは良きことかな。私もアツシュくんと仲良く、な・り・た・い・

わぁん」

「なんとかする気、全くありませんね」アッシュはソニア先生の誘いを無視して呻いた。「ああ、なんでこんなことになったんだよ」

当然、入学式の一件が全ての始まりだ。それは誰もが承知していることであり、彼自身理解しているのだろうが、それでも言わずにはいられなかったのだろう。

私は励ましてやろうとアッシュの肩を軽く叩いた。

「大変ね。ま、頑張つてあいつの相手をしてあげなさい」

全然励ましになっていなかったのか　どうしてだろう？　、アッシュは泣きそうな顔で呟いた。

「うう、誰か助けてくれ」

とまあ、こういうことになったのである。

でも、アッシュが本当に助けを求めるのは、これからなのだけど。

### 三話 骨は拾ってやる 前篇

「ふつつふ、運搬学生アッシーよ、今日こそ正義が悪か、どちらが勝るか決着を付けようではないか！」

「付けようではないか」

一階科学室の前の廊下で、いつものように妙な武器を持って登場したシュバルトは、宣戦布告しながらアッシュに指を突きつけ、その背後でピスキーが同じポーズを取っていた。

「喧しい」

言いつつアッシュは、木箱から取り出した空瓶をシュバルトに投げつけた。

「オブ！」空瓶は的確に顔面に命中。「な、なにをする！？ 瓶などという原始的な武器で 武器か？ 我輩を葬ろうとは、貴様いったい如何なる所存か？！ 四百字以内で申してみよ！」

「今取り込み中だ、後にしろ」

「なんだその簡略な返答は！？ そのような短い文章で提出すると後で呼び出されてやる気がないのかと教師に叱られたりするのだぞ！ 簡潔に記したというのにどういうことだ？！ 無駄な文章ばかりで長ければ良いと言うのか！？」

シュバルトの言いたいことはわからないが 体験自体は理解できるのだが、アッシュは要求だけでも伝えることにしたようだ。

「なあ、見て判らないか」

アッシュは床に置かれた木箱を指差した。その中には埃が完全に附着して、変色している空き瓶が詰め込まれていた。ラベルには化学薬品の名称と取り扱いに関する注意と説明が記されている。

入学してから一ヶ月が経過した頃、私たちは科学部顧問のリプタ―先生から、昼休みに科学室の古い薬品の処理の手伝いをしないか

と頼まれ、アッシュとウェンディ、そして私の三人が借り出された。本来なら科学部の部員だけであるべきことなのだが、部員が一人しかないという廃部寸前状態の科学部では、人手が明らかに足りない。

アッシュは色々騒動を起している。本人は巻き込まただけだと言いつけているけど、学園の教職員や、魔術師連盟の心象を良くしようと、点数稼ぎのつもりで積極的に参加したようだ。ウェンディは性格的に言わずもがな。そして私は、なぜか二人に無理やり連れてこられた。

しかし十分ほど経過すると、いつものようにシュバルトが登場、点数稼ぎのボランティア活動は早くも暗雲が立ち込め始めた。

「今、廃棄物の運搬作業の最中なんだよ、遊びは後にしろ」アッシュはふと気が付いたように「おまえ、今さりげなくアッシーとか言わなかったか？」

アッシー。荷物持ちや、移動のさい送り迎えをする男性を指す。

死語になって何十年経つだろう？

「言った」なぜか胸を張って答えるシュバルト。

「言ったね」なぜか腕を組んで頷くピスキー。

アッシュは再び空瓶を投げた。

「オブツ！」

「人の気になっていることを言う奴はどういうことになるかわかってんだろうな！？ このチビ！」

「あんたも言ってる」

私は指摘したが、アッシュは無視した。

「だいたい毎度毎度同じこと繰り返して、いい加減おとなしくしたらどうなんだ、おまえは！」

「貴様を倒すまで我が野望が成就することはないのだ！」

「ないのだ」ピスキーが語尾を呑気に繰り返す。

「だーかーらー！ 世界征服なんてアホなことおまえらだけで好きにやればいいだろ！ なんて俺が妨害者の正義の味方になってんだ

よ?!」

「そのような底の浅い虚言で我輩を惑わそうとは片腹痛いわ! さあ、女の荷物持ちにされたり足代わりにされるアッシーよ! チビ呼ばわりしたことを後悔させてやろう!」

しつかり聞こえてはいたんだ。

「おお、やつたるわい! アッシー呼ばわりしたこと後悔させてやるぞ! このチビ!」

この時点でアッシユは点数稼ぎを遥か彼方へ投げ捨てたようだった。

喧嘩が始まると、その余波を受けて、窓ガラスが割れ、壁にヒビが入り、廊下に張り出してある連絡用紙が破れて舞った。

廊下が滅茶苦茶に破壊されていく様を、私たちは安全な距離を取って見物した。念入りに倉庫から 勝手に 拝借した簡易式魔法結界装置を使用して。

ピスキーもその中に入り、応援団の扮装をして ガ克蘭に鉢巻。似合わないといふかなんというか シュバルトに声援を送る。

「フレえええ! フレえええ! シュウバルウト! ガンバレガンバレシュバルト! 負けるな負けるなシュバルト! イエー! ピュリリリリ!」笛まで吹いている。「ファイトだ総帥! ガッツだ総帥! 魔導帝国の未来は総帥の双肩にかかっている!」

「あんたは戦わないの?」

「ボクは副総帥だから」

私の質問に春の木漏れ日のような笑顔で答えたが、まったく説明になっていない。

しかし追求するのは面倒なので止め、質問を変えた。

「そういえば、前から気になってたんだけど、あんたなんで副総帥になったわけ?」

「宿舍がシュバルトちゃんと相部屋なんだ!。それで誘われたの!」

そして意味もなくブイサインを向けた。

「あ、そう」

無駄話を止め、私は背後の曲がり角の影からこちらを 正確にはピスキーを 見ている三人に目を向けた。PFC三人衆である。

先輩たちが 学校非公認で 行った新入生対象の投票で なんの投票かは押して知るべし ピスキーは大差で一位を獲得し、同時にPFCが 本人未承諾、学園未公認で 結成され、特にピスキーの可愛らしさに心酔している学年代表三人がピスキーの周囲を二十四時間徘徊するようになった。

彼らが睡眠食事などの生活行動をいつ行っているかは完全に謎。勿論、授業に出ているかどうかも怪しく、それどころか一歩間違えばストーカー確定なのだが、対象者が全く気にしていないようなので問題に発展してはいない。それに直接手を出してはいけないという暗黙の了解が成立されているらしく、影から覗いていること以外はなにもしない。手を出さなくても問題だという気がしないでもないけど。

「やーん、応援団のコスプレも可愛いー」一年代表の細身で背の高い女生徒が囁いた。

「ほんと、家に持ち帰りたくなっちゃう」二年代表のふくよかな女生徒がやっぱり囁いて答えた。

「それで色々悪戯したいよね」三年代表の大柄で筋肉質な男子生徒が続けて囁いた。

内容に関するコメントは避けるとして、囁き声で会話をしているのに、なぜあの距離でここまで聞こえてくるのか、少し考えると信じられないような発声技術だ。というか、そもそもなんでそんな技術を使う必要があるのだろうか。

「もう、なに言ってるのよ。ピスキーちゃんはキレイなままだいいの」

「純真無垢でなんにも知らない男の子のママがいいの」

「うんうん。無垢無邪気な可愛い男の子、はあはあ、ああん、可愛

いいーん」

なにやら涎を垂らして身悶えしている。危ない男だ。そのうち我慢できずに一線越えようとするんじゃないだろうか。

その反対側、私たちからアッシュとシュバルトが喧嘩をしている位置を挟んで、向こう側の角では、唯一の科学部員サイリックが隠れている。一学年上の先輩で、用事でこの場にいないリプター先生の代わりに監督しなければならないのだが、突然の出来事に狼狽して対応しきれないようだ。

「あの一、二人とも止めてください。危ないですから」

小声で注意を促しても、勿論二人に聞こえるはずがない。なお彼は黒髪の長髪に長身、眉目秀丽と、絵に描いたような美男子で、ピスキーには及ばないまでもファンは多いらしい。しかし頼りない男なので私は不合格の烙印を押す。なんの合否か訊かないように。

「はあー」私の隣で頭を抱えていたウエンディが溜息をついた。

「どうしたの？ 委員長」

「わたしは委員長じゃないってば！」彼女は瞬間で反論した。

「ごめん、ついっつかり」ウエンディは益々険悪な表情になったけど無視した。「それでどうしたの？ なんか疲れてるみたいだけど、大丈夫？」

「まあ、疲れてるんだけど、今更説明する必要ある？」

「ないわね」

「まったく、せっかく魔力検定に合格して入学できたのに、シュバルト全然変わらないし 前からこんなことやってたのか。オマケにピスキーやらアッシュまで騒動の種が増えちゃって。みんなこのままだと本当に処分受けるかもしれないって、わかってるのかしら？」ウエンディはしばらく考えて自分で結論を出した。「わかってるわけないか」

「そういえば、今まで聞かなかったけど、あんた、シュバルトと幼馴染なのよね？」

「そうよ、実家が隣なの。子供の頃からずっと一緒だった。腐れ縁

って言うのかな」

雨の民と呼ばれる民族は、高確率で魔法使いを輩出すること有名な民族だ。シュバルトはその民族の出身だが、ウェンディは違うらしい。少なくとも、判明している限りでは、親類に雨の民はいない。ただ偶然住んでいる町が一緒だったそうだ。そして偶然二人とも魔力保有者だった。

シュバルトが魔法使い　　というか、魔導帝国総帥　　を目指すのは、雨の民の一般的な傾向として、魔法使いを志すことに関係しているのだろうが、ウェンディはたぶん、シュバルトを一人にするとなにを仕出かすかわからないから、という理由なのではないだろうかと思う。

効果があるかどうかは別として。

ガシャン！　窓ガラスが一枚派手に割れた。

「いい加減に止めなさい！」

ウェンディは叫んだが、勿論二人は訊いていなかった。

ピスキーが肩を叩いて慰める。

「大変だね。でも頑張つて。どんなに報われなくても、一生懸命やり通さないと、立派な委員長になれないよ」

「委員長じゃないって言ってるでしょ！」

「それにあんたも当事者の一人でしょ」私は補足した。

ピスキーはしばらく考えてから、掌に拳をポンと叩いた。

「わかったよ」

「どっちを？」

ウェンディが訊くと、ピスキーは一つ咳払いして、大きく息を吸い込んだ。

「フリーフレ、ガンバレ、どっちもこっちもガンバレ。ピュリリリリ」

「両方応援しろって言ったんじゃないんだけど」ウェンディは再び溜息をついて「せめて委員長じゃないってことだけは理解してよ」  
そっちのほうが重要なのか。

今回のシュバルトの兵器は意外と強力らしく、アッシュは苦戦を強いられていた。

「フハハハハ！ どうしたアッシュよ？ この新型兵器ボーン・ザ・ロックダンスには力が及ばないか？ 案ずるな、今までは貴様の運が良かっただけのこと。元々我輩に敵うはずがなかったのだ、安心して敗北を受け入れるがいい！」

叫びつつ新兵器の引き金を引く。三十センチメートル四方の黒い箱の下部に、銃器類と同じ握部と引き金を取り付けられた、いつもと違ってコンパクトな武器だ。

引き金が絞られると、箱の前方の蓋が開き、中からなにかが飛び出てくる。

十数匹の魚だった。正確には魚の骨だった。標本として合格しそうな綺麗な形に組み立てられた魚の骨が、どういう原理なのか水中のように空中を漂い泳いで、アッシュに体当たり攻撃する。

「イテッ、イテッ！」

骨の先端が皮膚に刺さって痛いらしく、骨の魚が接触するたびに、アッシュは情けない声を上げる。

「さあ、続けて行ってみようか！」

今度は鶏が現れた。勿論骨の鶏だ。どう原理なのかやはりわからなかったが、羽毛がないのに翼に該当する部分の骨を羽ばたかせて跳び、アッシュを嘴で攻撃する。

「あ、コラ、挟むな！」

腕を嘴に啄まれてアッシュは慌てて振り解こうとするが、結構挟む力は強いらしく鶏の骨は離れない。

他にも、骨の鼠や、骨の犬、猫、猿など、様々な動物の骨が出現する。小さい箱の中にあれだけの量の骨が入っているのはどう考えても不自然で、魔法で内部の空間を広げているのか、もしくは別の空間と繋がっているのか。

「くそ！ ゴーレムかよ！」

ある種の魔法を付加した物体は、術者の意思に応じた動きを取る。大抵は人や動物などの形状を模した石材や木材などを利用するが、悪趣味な者は死体や人骨ゾンビ スケルトンなどを使用する。

アツシユは骨の動物を払い除けるが、無数の動物の骨は攻撃を加え続け、シュバルトは勝ち誇って笑う。

「フハハハ！ どうだ、忌まわしいだろう、不気味だろう、怖いだろう、夜中に一人でトイレに行けなくなりそうだろう！ 骨！ それは人間の根源的な恐怖を刺激する存在！ 怯えて体が竦みあがった貴様を葬るなど造作もないこと！ さあ、そのまま骨に埋もれて冥途へ旅立つがいい！ 後で骨は拾ってやる」

「下らねえこと言ってんじゃねーよ」

アツシユは木箱を手にとると、骨の動物を力任せに叩き潰し始めた。犬や猫、鼠は床に潰され、鶏や魚も虫のように叩かれて壁や床に当たり砕けた。乾燥した骨は脆弱だ。

「簡単じゃねえか」アツシユはちよつと拍子抜けしたようだった。

「今日は少し力入ってたけど、まあこんなもんだろ」

「うーむ、先輩の知恵を拝借と思い、サイリックに手伝って貰ったのだが、耐久性が今一つだったな」

「あんたが作ったのか！ 妙に出来がいいと思ったら！」

その怒声にサイリックは怯えて下がる。先輩の威厳、一片の欠片もなし。

「だって、言われたとおり作らないと、部屋に骨を送りつけてやって脅されたから……」

「やっぱりおまえ、イジメツ子だろ。脅迫してんじゃねーよ」

「ぬう、無礼な。世界征服にささやかにも貢献させてやろうとしただけだというのに」

「あー、もういい。黙れ。とにかくアホなことは早く終らせる。ちよつと手加減無しで撃ち込んでやるから」

入学式の悪夢の再来を予告したが、しかしシュバルトは意外と落

ち着いていた。

「仕方がない……最終手段！ 箱より復活せよ古の獣！」

引き金を引けば、箱の蓋が開き、全長二メートル以上ある四足歩行の獣の骨が現れる。

「なあ、その動物の骨」アッシュは少し慄いて「図鑑かなにかで見た覚えがあるんだけどよ、もしかして……」

「その通り！ 虎である！」自信を持って正体を肯定するシュバルト。

「なんでそんな物があるんだ？！ っていうか材料をどうやって手に入れた！？」

「うむ」シュバルトは大仰に頷いて「魚や鶏は食品製造工場から貰った。犬、猫は保健所にて哀れな末路を辿った者たち。そして鼠と猿は研究所の動物実験で尊い犠牲となったものである。でもってこの虎は！」指を突きつけて「博物館から失敬したものだ！」

「威張るな！」

「あんた他の所でも泥棒してたの！？」

ウエンディの声をシュバルトは無視。

「さすがにそれ一体を運ぶのが精一杯だった。重たかったし、夜の博物館は不気味で怖かったし、怪盗S & Pと予告上を送ったのに博物館は全く相手にしてくれなかった。あたりまえのがちよつと寂しかったし。しかしそれに見合ったものが手に入った！ 材料限定それ一体！ 勿体無くて使用は躊躇った天下の一品である！」

「一品じゃねーよ」言いつつアッシュは木箱をそれに投げつけた。

頭蓋骨部分に命中したが、砕けたのは木箱のほうだった。「ゲッ！」

「おお！ さすが虎だけあった頑丈だ！」シュバルトは嬉しそうに「さあ虎よ！ タイガーよ！ 我が宿敵足代わりのアッシー しつこいね を叩きのめすがいい！」

「GUOOOO！」

骨の虎は、どういう原理で声をだしているのかわからないけど、一声咆哮して威嚇すると、アッシュへ飛び掛った。

アツシユは木箱を前面にかざして楯にしたが、虎の骨が牙を突き立てると、次の瞬間には引き千切り、ばらばらに食い千切り、一瞬で残骸と化した。どうやら骨のゴーレムたちの攻撃力や筋力、筋肉はもうないけど、は基本的に生前とほぼ同じようだ。

ちなみに虎は訓練されたドーベルマン三頭を同時に相手にして勝てるそうだ。十秒もかけずに三頭を引き裂いて惨殺した話を以前聞いたことがある。

「冗談じゃねえぞ！ シャレになんないだろこれ！」アツシユはさすがに恐怖する。

「素晴らしい！ 予想以上の攻撃力！ 我輩もちよつと不安」

「だったら引つ込ませろ！」

「すまん、一度出すと止められないのだ。諦めてくれ」

「なにを！？」

「後で骨は拾ってやる」

「二回も言うな！」

虎の骨が再び跳躍してアツシユに襲い掛かるが、アツシユは咄嗟に横へ跳躍して、同時に科学室のドアを蹴破り、中へ逃げ込む。虎は反転して科学室へ突入した。

私たちの視界から外れてしまったが、科学室内で、骨の虎と戦っている騒音が聞こえる。木材の砕ける音、硝子の割れる音、なにかの激突音などが響く。

シユバルトがその様子を他人事のように廊下から眺め、腕を組むと唸る。

「うーむ、やはり死亡させるのはまずいだろうか」

「良くないに決まってるでしょ！」ウェンディが叫んだ。「本当に止める方法ないの？！」

「無い！」

「断言しないでよ！」

「まあ仕方がない。ここは一つ魔導帝国建国の人柱になってもらおうとして。恐怖政治も良いかもしれん」

良君を目指してたのか？

「良くねえー！」アツシユの怒鳴り声と同時に、科学室からゴミを縛る予定だったロープが飛んで来てシュバルトの体に巻きついた。

「デメエも道連れだ！」

「ぬおおおお！！」シュバルトは科学室へ引き込まれた。

科学室の乱闘はさらに激化する。

### 三話 骨は拾ってやる 中篇

私はふと疑問に思い、首を傾げた。

「アッシュってさ、格闘技とか魔法とか、今みたいな特殊技能とか、ああいうの、どこで覚えたんだと思う？」

ロープを投げて対象に巻きつけるのは、相当の高等技術が必要で、専門訓練を受けた者でなければ一度で成功させるのは難しい。格闘技も明らかに正式に習ったことのある動きだ。

「そうだよー」ピスキーが応援を止めて「それにさー、アッシュくんあれだけ魔法が使えるなら入学する必要なんて全然ないよねー。早く試験を受けて資格取ればいいのに、どうして来たのかな？ 魔法資格取得に年齢制限ってあったかな？」

「ないわよ。子供の頃から習ってても、資格認定されるの二十歳過ぎてからがほとんどだから、実質的な意味がないってことで」

「じゃあ、なんでだろ？」

「……あんたたち」ウェンディが剣呑な声で「冷静にそういう話をしている場合なの？」

「えっと……」私は頬を掻いて「たぶん止めるって言いたいんだろうけど」

科学室を指差す。私たちの位置からは中の様子は見えなかったが、声と音は届いていた。

「危ないから止めてください！」サイリックがさすがに危険だと判断したのか、隅っこから出てきて制止する。「科学室は薬品があつて危険なんですよ！ ああ！ それ硫酸です！！」

しかしアッシュもシュバルトもそれで止まるわけがなかった。

「こうなれば、やれ！ ボーントイガーよ！」

「やれじゃねえだろ！ おまえは盾代わりだ！」

「ぬお！ 止める！ 危ない！」

「だったらこの骨をなんとかしろ！ オラオラ！ 早くしないと食  
い殺されるぞ！」

「止める方法は無いのである！」

「だから断言するなー！」

私はウエンディに質問した。

「あの状況を止められると思う？」

「私に任せてばかりで全然止めようとしなのが気になるのよ。  
あなた委員長でしょ」

言われて私は思い出した。

「そういえば、そうだったわね」

「忘れてたの？」

「いや、だって、ほら」委員長らしい人が目の前にいるもんだから。

「来たれ！」

G I H Y I I I I I I I I ! !

突然、いつものアッシュの呪文と同時に、耳障りな音が劈く。

超振動でも発生したのか、周辺のまだ無事だった窓ガラスが連続  
的に全て粉々に割れた。そして余韻のように音が引き、静寂が訪れ  
る。

いつもの雷や爆発音、衝撃波とは全く違う、数十人もの甲高い悲  
鳴が重なったような、生理的に鳥肌が粟立つ音に、私たちは思わず  
耳を塞いでいた。

科学室の騒動は収まったのか、沈黙しかなく、壊れたドアから中  
を覗いていたサイリックは、惚けた様子でその場に立ち尽くしてい  
た。

「なによ今の？」ウエンディは耳を押さえたまま呟く。「アッシュ、  
一体なにをしたのよ？」

私たちはなにが起きたのか全くわからず、次の行動を決断しかね

ていたが、不意にピスキーが、簡易式結界装置の領域から出て、科学室へ向かった。

「あ、ちよつと。まだ危ないんじゃない？」

ウエンディが止めると、ピスキーはいつもの春の木漏れ日のような微笑を向けた。ウエンディは少し頬を赤くし、後方ではPFCが「「「はぁーん」「」」」となんととも言えない至福の溜息を吐いた。

「大丈夫だよ。終わったから静かになったんだと思うよ」

確かに他に理由は考えられないので、私も科学室へと向かった。

全て割れた窓ガラスが散乱し、机や椅子は床に転がり、あるいは粉碎されていたり、科学室の惨状は筆舌に尽くし難く、よくここまでやれるものだ、と、むしろ感心した。

しかしそれも次の瞬間には霧散する。

「……シュバルト」

ウエンディが消え入りそうな声で名前を呼んだが、彼は反応を示さない。白目を剥き、頭から血を流し、大の字になって床に転がっている。その姿の隣には粉々に砕けた虎の骨。

そしてアッシュは困惑気味に周囲を見渡していた。まるで取り返しつかないなにかをしたかのように。

「あ、いや、これはだな、なんていうか、その、あれだ、そんな感じの」

私たちに気付くとアッシュはなにかを喋り始めたが、それは犯罪現場を押さえられた実行犯が言い訳をしようとして意味のない言葉を羅列する、まさにそれだった。

「とうとう殺っちゃったのね」

科白を遮って私は真実を指摘すると、アッシュは反論する。

「死んでない！　ちよつと手加減の仕方を間違えたただけだ！　血は出てるけど中身は大丈夫……」少し間を置いてから「の、ハズだ！」

「なによ、今の間は？」

ウェンディはよろめいて壁に体を預ける。

「ああ、いつかこうなるんじゃないかって思ってたのよ。そうよ、わかってたの。なのにわたしっいたら止めもしないで……」少し考えから、言い直す。「止めようとはしてたけど、ついに、ついにこんなことに！ ああ！ なんてことなの！ シュバルトのお姉さんになんて言えがいいのよ？！」

「だから死んでないって！ 気絶しているだけなんだよ！ ほら、胸が動いているだろ。呼吸してるだろ」

よく観察すれば胸が上下運動しているのが確認できたが、しかし私はアッシュの肩に手を置いた。

「わかってるわ、アッシュ。ちょっと勢いで殺っちゃったのよね。

大丈夫、殺人罪にはならないわよ。過失致死で済むと思うから。運が良ければ正当防衛よ」

「だから死んでないって！」

私たちがシュバルトを放って置いている間に、ピスキーは私たちの横を通り過ぎてシュバルトの側へ行こうとしていた。

さて、ここが運命の分岐点。

いつものように保健室にでも連れて行くのだろうと それは正解だったのだろうけど 私たちは特に気に留めなかったし、サイリックは科学室の惨状に気を取られていた。

つまり誰もピスキーに注意を払っていなかった。

「わっ」

そのピスキーが不意に転んだ。それはたぶん床に散らばっている椅子や机、もしくは木箱などに躓いたかなにかしたのだろう。

問題だったのは、すぐ側の机だった。

科学部顧問のリプター先生から、薬品がまだ入っているから触れてはいけないと、注意された薬瓶が入っている箱が置かれていた机で、乱闘の騒ぎで箱が倒れたらしく、薬瓶が机の上に数本転がっていた。そして散乱している内の一本が机の縁にあり、それは半ばは

み出している極めて不安定な状態だった。しかもそれは転んだピスキーの真上に位置し、そして もう予想は付くだろうが 転んだ拍子にピスキー目掛けて落下した。

「あー！」

私はピスキーが転倒した音で目を向け、その瞬間を偶然目撃し思わず声を上げたが、しかし注意さえ促していない声と同時に、ガラス瓶の割れる音が鳴った。

全員がピスキーに目を向ける。

薬液を頭からかぶったピスキーは立ち上がったが、しかし体は安定を失っており、虚ろな目で呟く。

「……あれ？ なんだか、とても、眠い……」

そして床に崩れ落ちた。

「……」

一呼吸の静寂の後、アツシュが叫ぶ。

「おい！ やばいぞ！」

私たちはいつせいに動き出す。

「駄目ですよ！ 薬品に直接接触しないで！」

「ゴム手袋はどこにあるの？！」

「そのフアンクラブ！ 見てないで手伝え！」

「保健室に連絡して先生を呼んできてください！」

「タオルは？！ なにか拭くもの！ 薬品を拭き取らないと！」

「マスクかけて！ 気化した薬品を吸い込まないで！」

「なんの薬かぶったんだ？ 毒じゃないだろうな？！」

「そんなもの学校にあるわけないでしょ！」

「この学校だとなにがあっても不思議じゃないだろう！」

「不吉なことをわないで！」

「担架が来たわよ！」

慌しくピスキーは保健室に運ばれた。

そして、シュバルトがほったらかしだったのに気が付くのは、それから一時間が経過してからだった。

保健室に運ばれピスキーは保険医のレネー先生に手当てを受ける。  
「まったく、科学室で乱闘騒ぎを起すなんて、あんたたちは危険つてものを考えないのかい。信じられないよ、本当に」

オズ魔法学園専属魔法医師レネー・キリー。清潔な白衣を着こなした、恰幅のいい体格の、壮年を過ぎつつある女性で、魔法医術という高度な技術の修得者として尊敬を集めているだけではなく、学園の母性的存在として生徒から教職員まで親しまれている。

その彼女から怒られるのは、母親に叱られている気分になり、私たちは力なく萎縮する。

「幸い命に別状はなかったから良かったようなものを、もしこれが劇薬だったらどんなことになっていたか。リプターにも注意しておかないと。危険物の取り扱いを生徒だけに任せるなんて、職務怠慢もいいところだわ」

サイリックはそのリプター先生を捜しに行き、ここにはいない。ウェンディはピスキーの寝ているベッドの脇で看病し、私とアッシュは見舞い客用の椅子に座っていた。

昼休みは当に過ぎ、午後の最初の授業も終わる頃だが、魔導帝国コンビのために、私たちは保健室のベッドに寝かされていた。

特に問題なのは、当然のことながらピスキーだ。あどけなく頬を摘みたくなる衝動に駆られる。安らかなピスキーの寝顔からは、薬物の作用に苦痛がないことが見て取れる。命に別状はないとレネー先生が断言したのだから、その点に関しては安心していい。しかし昏睡状態から一時間以上も脱しないところを見ると、薬物がピスキーの体に影響を与えているのは確実だ。

廊下からPFCの三人が保健室の中を窺っている。

「ああん、もう。ピスキーちゃんの寝顔をあんなに近くで見られるなんて」

「なんて羨ましいの、私が代わりたいわ」

「寝ているピスキーくんを目の前にして冷静でいられるなんて、僕には信じられない」

だったら保健室に入って来なさいって。

「だいたいあの女によ、ピスキーの近くにいて」

「本当に。馴れ馴れしい」

「僕が代わりに看病してあげたいよ」

ウェンディになにやら嫉妬の視線を降り注がせている。だから保健室に入ってくればいいだけの話なのに。

「って、代わって何するつもりなの」

「変なこと考えてるわね」

「なにを言うんだい、失敬だな。僕は唇を奪いたいとか、キスしたいとか、口付けをしたいとか、あまつさえ舌を入れたいなどと、そんなことを考えているわけがないじゃないか」

考えているらしい。

私の隣でアッシュはピスキーが被った薬品のビンの欠片を手にしていた。説明ラベルが貼られている部分で、治療の役にたつだろうと持ってきたのだが。

「それで、アッシュくん、ピスキーくんの被った薬はなんだったの？」

レネー先生の質問にアッシュが答えようとすると、シュバルトの呻き声が遮る。

「ぬおおお……やめろお、止めろおお」

頭に包帯を巻かれたシュバルトが、ピスキーの隣のベッドでうなされている。先の乱闘の悪夢を見ているらしく、運ばれてからずっとこの調子だ。

「やめろお、アッシュ……貴様あ、正義の味方が、悪魔を呼んでいいと思っているのかあ」

私たちはアッシュの視線を向けた。

「アッシュ、悪魔を召喚したって、どういうこと？」

異界知性体との意図的接触は国際法で禁じられており、重犯罪に

分類されるのだが、アッシュはこともなげに答えた。

「思い付きで妖しげなもので対抗しようと思って」

「思い付きでそんなことしないでよ！」ウェンディが叫ぶ。「詳しいこと知らないけど、あなた魔術師連盟の監視対象リストに載ってるんでしょ？！ 悪魔召喚が知られたら審問に連れて行かれるわよ！ そうなつたらどうするの！？」

「ごまかす！」

必要以上に力強く断言するアッシュに、私は嘆息した。だんだんシュバルトの性格が感染してきている。いや、元々こういう性格か。それにどちらかというと、重犯罪云々よりも、三秒もかけずに悪魔を召喚したアッシュの能力が問題だと思う。異界の生命体をこちら側に引き呼ぶには、通常一週間以上の儀式を必要とするが、それを数秒でやってのけたことに、誰も怪訝に思っていないようだった。「ぬおおお、やめろお」シュバルトはまだ呻いていた。「あああ、黒板を引つ掻くのは止めるおお……」

黒板を引つ掻く？

「アッシュ、あんたどういう悪魔を呼んだの？」

「ノーコメント」

「あ、そう」深く考えるのは止めておいた。

レネー先生が呆れたように頭を過振る。

「まったく、この学校は問題児ばかりだよ、本当に。それで、薬の説明はどうなったんだい？」

話題を戻されて、アッシュは端的に答えた。

「媚薬です」

「……」

しばらくの沈黙の後、ウェンディが叫んだ。

「媚薬！？」

「そ、媚薬。惚れ薬って言ったほうがわかりやすいか。使用方法は体に直接降り掛けるなり、食物に混入させて服用させるなり、色々応用可能。で、対象者はその直後に一定時間昏睡状態に陥り、まあ

想像つくだろうが、意識回復から最初に目にした異性に恋をする、と」

「うつわー。なんか一騒動起きそうな感じねー」

私がおどけると、ウエンディが抗議する。

「そんな呑気にしている場合じゃないでしょ。どうすればいいのよ？　ピスキー、そのうち目を覚ますんでしょ」

「とりあえずリプター先生が来るまで待つしかないんじゃない？　科学室の管理、あの人だし。解毒剤のことも知っているでしょ」

「その前に目が覚めたら？」

「安全な人に恋してもらって、状態を確保するしかないわね」

「安全？」

ウエンディの疑念の声に、私はPFCの三人を指差した。

「キヤー、ホレ薬よ、惚れ薬」

「あたし、断然立候補しちゃう」

「よし、ここはひとつ僕がピスキーくんのために」

女性生徒二人を押しつけて三年代表が前に出ようとするが、後ろから二人が引つ張って止めた。

「ダメー、私が先よ」

「っていうか異性じゃないと効果ないんでしょ」

「ああ、どうして僕は女の子に生まれなかったんだ」

ウエンディは三人に目を向けたまま、なんとも言えない表情で沈黙。

「……」

そして私は断言した。

「ああいうのは、論外」

「なるほど」

ウエンディは納得して頷いたが、アッシュは先程からなにか思案している様子だった。

「どうしたの？」

「いや、学校一のゴリラ女の　名誉人権プライバシーのため名前は

削除 に任せたらどうなるかなとか、人外魔境の 名誉人権プライバシーのため名前は削除 とはどうかとか、顔面凶器の しつこいだが名誉人権プライバシーのため名前は削除 とくつつけたら面白いかなとか、そういうことを考えたり思ったり企んだりするわけじゃないぞ」

「考えたり思ったり企んだりするわけね、ようするに」

「そうやってなんか酷いこと考えてないで、解決方法を考えてよ。ただでさえ私たちの教室問題が多いのに、これ以上問題が増えたら手に負えないでしょ」

ウェンディの抗議に、間違いがあるのをアツシユは指摘する。

「ピスキー、教室違うだろ」

「そんなの意味ないじゃない、どうせ毎日私たちのところに来てるんだから」

「そりやそうだけど、来ている理由って全部シュバルトが原因で、でもって俺を血祭りに上げようってことで来ているわけで……」アツシユはいつしか沈黙して考え始め、少ししてから「やっぱ一番面白そうな奴にくつつけよう。仕返してことで」

「あんた結構性格悪くない」と私。

「なんでだ？ 俺は被害者だぞ、こういうチャンスの時に軽く仕返しさせてくれたっていいだろ。面白そうだし」

「一番の理由が面白そうだからで、仕返しは二の次って感じじゃない。だいたいシュバルトを毎回返り討ちにしておいて、仕返しもなにもないでしょ」

「だからここで改めてピスキーにも静粛に肅清して……えーと……とにかく、面白そうだから、いいジャン」

「いや、ジャンって言われても」

「もー」ウェンディが「ふざけてるのか本気なのか たぶんかなり本気 わかんないけど、そうやって酷いことばかり考えるの止めて、少しは真剣に対応策に頭を使ってよ。いい加減にしないと、本当に審問に連れて行かれるわよ」

レネー先生が不意にウエンディの頭を撫でる。

「よしよし。あんたがいてくれれば、この馬鹿どももとんでもない間違いは起さないだろうね。しっかり委員長を務めといてくれよ」

「わたしは委員長じゃありません！」

「ええ？ 違うのかい？」

ウエンディが憤慨して手を払い除けると、レネー先生は信じられないといった顔で聞き返した。ここの教師は誰もが同じ勘違いをし、誰もが同じ疑問を持つ。

「委員長はこつちです！」とウエンディは私を指す。

私は二人に手を振って見せた。深い意味はなかったけど。

レネー先生は思案して呟いた。

「人選ミスじゃないかねえ。適任者がいるってのに。後でソニアにも注意しておくか」

「どういう意味ですか！」

ウエンディが叫んだが、レネー先生の発言がどういう意味なのか、明確に知ることはなかった。

ピスキーが目を覚ましてしまったので。

### 三話 骨は拾ってやる 後篇

「……あ……」

気がついた私たちは同時に声を上げた。

いつの間にピスキーは目を覚ましていたのだろうか、上体を起して、寝惚けているのか薬物の影響なのか、虚ろな目を向けるその様子は、どこか妖艶だった。

「…………………」

薬の最大の特徴は、最初に目にした異性に恋をする。

最初に視認したのは誰なのか、目を覚ましたところを誰も見ていなかったため判断が付かず、沈黙する私たちへ、ピスキーはベッドから降りて、静かに緩慢に足を進め始めた。

「ちょ、ちよっと、クレアどうしよう？」

縋るようにウェンディが私に尋ねるが、解決策など思いつくはすがない。

「いや、どうしようって言われても」

ピスキーは一番近くにいたそのウェンディの前で足を止めた。

「あ、わたし？ わたしなの？ えっと、ちよっと待って、心の準備が」

戸惑いうろたえるウェンディに、廊下のPFCが非難の囁き声。

「そんなのやだー」

「あんな女のところへ行っちゃダメー」

「僕のところへおいでー」

ウェンディは深呼吸して心の準備を整えると、満面の笑みで両手を広げて、受け入れ態勢万全の構えで待ち受ける。

「いいわ。はい、どうぞ」

しかしピスキーは 予想はつくだろうけど 再び足を進めてウェ

ンデイの横を通過した。

「あれ？」ちよつと残念そうなウェンデイ。

そして今度はレネー先生の前で止まる。

「おや、あたしかい？」

満更でもないような、どこか面白がっている顔で、レネー先生はピスキーの次の行動を待つ。しかし彼女なら変な考えは起さないだろうし、意外と、というか結構危険要素を孕んでいそうなウェンデイより、状態確保に適任だったかもしれない。

「イヤー、年の差を考えてー」

「熟女のツバメになんかなっちゃダメー」

「僕の愛人になってー」

しかしピスキーは 予想は付くだろうけど レネー先生の横を素通りした。

「おや、違ったのかい」

そして次は私の前で止まった。

「……」

私はどうすればいいのかわからずに沈黙した。椅子に座ったまま腕組する姿は、傍からは傲岸不遜でふてくしく見えたかもしれない。

「なによあの女。余裕のある振りして、ム力つくー」

「なんか生意気ー。もつと慌てなさいよー」

「ピスキーくんの心を捕まえられるのにー」

実際そう見えたようだった。

だがピスキーは 予想は付くだろうけど やっぱり私の前を通り過ぎたのだった。

「……あれ？」

私を除いた全員が疑念の声を呟いた。

「……まさか」

嫌な予感に呟いたアツシュの前で立ち止まり、その手を握るとピスキーは まあ、予想は付くだろうけど 瞳を潤ませ頬を朱に染め

て、その思いの丈を告げたのだった。

「好き」

「……」

面白くなってきそうだった。

「アッシュくん」

「ピスキー」

二人は愛情を充溢させた瞳で、熱い言葉を交わしあう。

「ボクはこの気持ちをどうすればいいんだろう？」

「なにも考えなくてもいいんだ。心の流れに身を任せてしまえばいい」

「それができたらどんなに素的だろう」

「そうとも、恋の運命を委ねるのはとても素晴らしいことなんだ。

さあ、迷うことはない」

「でも禁じられた恋が結ばれることはない。それが物語の結末だよ」

「かまうものか。全てが俺たちを引き離そうとしても、俺は決してその手を放したりしない」

「悲恋の終りになつたとしても？」

「そうだ、たとえ悲劇が訪れようとも、おまえの手も心もきつと手放したりしないさ」

「ああ、信じていいんだよね」

「勿論だ。さあ、二人で世界の果てへ行こう。そして愛は成就される」

「アッシュくん」

「ピスキー」

感極まったように二人はお互いを抱き締め合う。

そしてアッシュは最後の言葉を告げた。

「止める」

言いつつ怪しいお芝居を熱演していたPFCの女子二人を蹴り倒

す。

床に転倒した二人に、アッシュは舐めるような、しかしギラギラと危険な光が宿った目で睨み付け、教室一同、何事かと注目している中、重低音の効いた声で尋問する。

「テメエら、本人目の前にして随分不愉快な真似してくれるじゃねえか。どういふつもりなのかちよつと話を聞かせてもらおうか。ああん！」

午後の最初の授業が終了し休憩時間に入ってもリプター先生が見つからないので、仕方なくレネー先生は一旦教室に戻れと指示した。そして魔導帝国コンビを保健室に残して教室に戻ってみれば、別の世界の光景を情感たつぷりに熱演するPFCがいたのだった。

当然癪に障ったアッシュは、自分の感情を抑制するなどという努力をまったくせず、曲がった性格でも歪んだ心でもない彼は、とても率直で素直でわかりやすく感情を表現した。

つまり、上っ面の無駄な優等生の振りを止めて、暴力的素行不良学生と化した。元からだけど。

「アッシュ、堅気に手を出しちゃ駄目でしょ」

ウェンディが窘めると、アッシュは心外極まりないといった顔で抗議する。

「なんだその堅気つてのは！？ 最近おまえら俺をヤクザかなにかだと思つてないか？！」

「思つてるわよ。つていうかそれ以外なにがあるの？」

「俺は真面目な優等生だ！ シュバルトが絡んでこなけりや問題児扱いもされないで済むし、入学最初の学年テストで密かに十番台に入つてたりするんだぞ！」

学力に関しては一応本当だけど、インテリヤクザという言葉を知らないのだろうか。

「アッシュくん！」 唐突にPFC一年代表が起き上がり「あなたはそのままでもいいの！」

「なにが！」

「つまりい」PFC二年代表も起き上がり「ちよつと不良入ってる  
拗ねた感じの男の子と、元気いっぱい可愛い男の子の恋愛が、超  
萌え萌えなのぉ！」

ピスキーがアッシュに取られたことに憤慨して、PFCは妨害工  
作でも行うかと思っていたが、どうやら彼女たちの精神的腐敗の方  
向性は、私の予想の斜め上を行っていたらしい。

当然アッシュは、理解不能といった様子で、否定する。

「ちよつと待て！俺はピスキーとそんな関係になるつもりはビタ  
イチないぞ！」

「なに言ってるのよ？！可愛い男の子を恋人にできる素的なチャ  
ンスを見逃すっていうの？！」

「そうよ！みんながハンカチ嚙んで悔しがるくらいのビクチャ  
ンス！ほら、あれを見なさい！」

指差した教室の隅では、PFC三年代表男子生徒がハンカチを嚙  
みながら泣いて悔しがっていた。

「うう、どうして僕はピスキーくんの前に行かなかったんだ。ああ、  
僕のバカ。ボクのバカバカ」

自分で自分の頭を叩いたりしている。

改めて一年代表は「どう？このチャンス逃しちゃダメってこ  
とがわかった？」

「わからん」アッシュは即座に否定する。

「じゃあ、もう一回説明するわね」と二年代表が「つまりこれがあ  
んな感じのPFC三年代表を指差して、ブツ細工な男だったらゲ  
エだけどヒドピスキーは超美少年だし」

「アッシュくんも、まあ、とりあえず合格ラインぎりぎりOKだか  
ら、私たちが応援するってこと」

「するな！」アッシュは拒絶して「俺は男を恋人にする趣味はない  
って言ってるんだよ！つか合格ラインぎりぎりOKってところが  
すげえムカツクし！」

「アッシュくん？」唐突にピスキーが教室の戸を開けて現れた。

「アツシュくん？ そんなこと言わないでボクのこと好きになつてよー？」

相変わらず能天気な調子だが、本質的なところで劇的な変化があるの是一目瞭然。わざわざ魔法で周囲の空間にハートマークを投影して余すところなく感情表現している。

媚薬の効果は確実にピスキーの精神を侵食し、アツシュが近くにいるだけで相当深刻な症状が発現されてしまう。つまり人目をまったく気にせず最後までやろうとする。ので、保健室から出ないように指示されていたはずだが、しかし薬の誘惑には勝てなかったらしい。

レネー先生の間を見て脱走してきたようだ。

「うわあああ！」

そして保健室で散々洗礼を受けたアツシュは、ピスキーの姿を見た途端、条件反射的に恐怖で壁際に全力で後退する。アツシュの頬や首筋、胸に至るまで、体中にピスキーの唇がつけた無数の聖痕があるが、肝心の部分は死守した。ここまでされたのだから、無意味な貞操だという気もしないでもないが、本人的には絶対に譲れない一線なのだろう。

「待て！ ストップ！ 近づくな！ 止まれ！」 接近を掌で制して、冷静を促す。「ピスキー、落ち着け。自分がなにをしようとしているのか、ちゃんと考えるんだ」

拒絶されたピスキーは悲しそうな、捨てられた子犬が縋るような潤んだ瞳をアツシュに向ける。

「考えるって、なにを？」 祈りを捧げる時のように胸元で両手を組み合わせ、少しずつ足を進めながら「ちゃんとわかってるつもりだよ。ボクはね、アツシュくんと一緒にいたくて、触りたくて、抱きしめて欲しくて、それでね、なんだか、ボク……ボク……」

幸福に満たされたような顔は、もはや蕩けきっている。

「おまえがどんな気持ちでいるのか、よくわかる。うん」アツシュは科白を遮って同意してから、しかし否定する。「でもな、それ

は薬の効果なんだ。わかるか、薬物効果だ」

「……クスリ」ピスキーは足を止めて、その単語を繰り返す。

「そうだ、薬のせいなんだ。おまえは薬物の影響で変な感情が湧いて出てるだけなんだ。ほら、それ以前に男同士がヤバゲだったのは冷静に考えればわかるだろ」

「う、うん」ピスキーは説得に押されたように頷く。

「解毒剤を投与すればすぐに治るから、それまで耐えろ。いいか、もし薬の誘惑に負けてみる。正常な精神状態を取り戻してから、自分がなにをしたのか振り返れば、後悔で身悶えることになるぞ。忘却の彼方へ葬りたいだろうが、嫌な記憶ってのは後々まで残るものだ。わかるか？」

「うん、わかるよ」

「なら、耐えるんだ。冷静を保って常識を常に念頭に置けば、薬物症状にも耐えられる。な」

「うん、わかった。一生懸命我慢する」

冷静を完全に取り戻したのか、ピスキーは強靱な精神力を宿した瞳で頷いた。

「よし、頑張れ」アッシュは激励の言葉を送り、一つ安堵の息を吐く。「ふう」

しかし次にはピスキーの顔は恍惚に弛緩して、アッシュの胸に抱きついた。

「やっぱりダメー？ アッシュくん好きー？」

「だあああ！ 少しは耐えろおお！」

こうしてアッシュの受難は本格的に始まった。

#### 四話 放課後ダンジョン倶楽部 前篇

放課後、私たちは一応片付けられた科学室に集合した。

科学部唯一の部員、サイリックも呼ばれ、化学実験器具一式となにかの薬品らしい黒茶色の粉末を、テーブルの上に準備している。

ちなみにシュバルトは保健室でうなされたままだ。

そしてリプター先生がレネー先生に連れられて入室する。

レネー先生と同じく白衣を着用した、私より頭一つ分低いウェンデイより、さらに頭一つ分低い小柄な体格の女の人で、ブラウンの長い髪をポニーテールにしている。

一つ一つの要素を見れば可愛らしいような気もするけど、全体として見ると可愛らしさの欠片もなく、気だるそうなのに尖った目は、なんとなく不良教師という言葉を連想させる。実際現場監督を放棄しているのだから間違っていないだろう。なお、年齢不詳。特に童顔というわけでもないのだが、具体的に何歳なのか特定しようと観察しても、まだ十代にも見えるし、四十歳を過ぎているようにも見える。

「それじゃリプター、あたしはシュバルトの手当てがあるから、後は頼んだよ」

この二人の組み合わせは、飛び級制で博士号を修得した子供と、古株の教授という雰囲気がある。あるいは、祖母に叱られてすねている子供。

「時間外労働になるんですけど」

「あんたが生徒だけに薬物処理を任せたりするから、こんなことになったんじゃないのかい。職員会議の議題にかけてあげようか？」

ささやかな主張は完全否定されて、渋々リプター先生は仕事を受け入れる。

「わかりました、懇切丁寧に指導します」

「よし」皮肉混じりの返事に、レネー先生は満足そうに頷くと、私たちに「それじゃ、頑張るんだよ」

「はい」

ピスキー一人だけが元気に返事をした。

そしてレネー先生が去って言った後、リプター先生はあからさまにやる気のない表情で、黒板の前に立つ。

「えーと。じゃあ、これから薬物取り扱いに関する課外授業、別名媚薬解毒剤調合教室を始めるわね」

最後あたりに混じる皮肉は、やる気のなさを主張しすぎだ。こんなだから危険物取り扱いを生徒だけに任せるのだろうけど、なんでこんな教師が採用されているんだろ。

「イエー」

クラッカーを鳴らしラッパを吹いて囃し立てるピスキーは、頭にパーティー用のカラフルな三角帽子をかぶり、なぜか鼻髭眼鏡までかけている。

アッシュは険のある半眼で問う。

「おまえのために集まったんだぞ。ちゃんとわかってるのか？」

「勿論わかってるよ。恋はいつか消えてしまっただよ。だから二人は一瞬の思いに全てをかけて、永遠の愛に変えるんだ。だから、アッシュくん、ボクたちもアツィイ恋愛を一生懸命しようね？」

「……」

アッシュはピスキーがいつも持っている学生鞆の中を勝手に探ると、一把の縄を取り出した。

「やだ？ アッシュくん？ いきなりそんなプレイから始めるなんてダメだよ？」

言葉とは裏腹、嬉しそうなピスキーを縛り上げて、さらにアッシュは口も聞けないようにタオルを轡にして噛ませた。

「わかってない奴は黙らせましたので、続きをお願いします」

「ありがと」リプター先生は特に興味もなさそうにピスキーを見て、

まったく感謝していないように感謝の言葉を述べると「じゃあ、サイリック、アルコールランプに火をつけて、ビーカーに水を500？入れて」

「はい」

助手として手馴れているサイリックは、手早く指示通りに動く。

それを横目でリプター先生は見ながら、説明を始めた。

「さて、ピスキーがかぶった媚薬だけど、問題はなぜ同性に効果が現れたのかよ。あ、サイリック、それ沸騰させないで、九十五度で止めて」細かい指示を出してから、続けて「まあ、別に原因を考える必要性はないんだけどね。あの惚れ薬、廃棄処分決定していたんだから。ようするに、製造日が百年以上前なのよ」

「つまり、古くて薬の成分が変質してしまっていたんですね」

ウエンディの答えに、端的に一言。

「正解。だから、通常の解毒剤じゃ効果ないわ」

「ええ！」アッシュが悲鳴に近い叫び。「じゃあ、こいつ永久にこのままなんですか？！」

「やっぱりボクたち結ばれる運命なんだよ？ 諦めて結婚しよ？」

いつの間にか轡を口から外したピスキーに、アッシュは改めて轡を噛ませた。

それをどうでもよさそうに見届けてからリプター先生は「大丈夫よ、精神に働きかける魔法薬は基本的に浄化されることを前提に作られてあつて、変質してもそれだけは変わらないから、時間が経てば効果は消えるわよ」

アッシュとウエンディは安堵の息をついたが、私は重要箇所を聞き逃さなかった。

「時間が経てばつて、どれくらいの時間で消えるんです？」

リプター先生は軽く答えた。

「まあ、二、三年かな」

「そんなに待てるか！」アッシュは叫んで、体を机に乗り出しリプター先生に迫る。「なにか方法はないんですか？！ 今すぐ現状か

ら脱却する方法は！」

「一つだけ。薬の成分を調べ直して、それに合った解毒剤を調合すれば、薬物の効果は解除される」付け加えて「たぶんね」

「もう少し確信を持って言ってください！」

「大丈夫よ」甚だ説得力に欠ける軽い口調で請け負って「じゃあ、早速成分調べましょうか。薬品拭き取った布はそこにあるわね。指示するから各自器具の準備をしなさい」そしてサイリックに「温度は？」

「大丈夫です」

リプター先生は耐熱手袋をはめてビーカーを持つと、テーブルに用意してあった、計測器で正確に分量を測った粉末状の物体を湯の中に入れ、ガラス棒で掻き混ぜる。珈琲の香りが科学室に漂い、リプター先生は一口啜ると、顔を顰めた。

「サイリック、温度は95度って言ったでしょ。熱すぎるわよ」

「すみません」うなだれて素直に謝るサイリック。

「……」

沈黙のアッシュとウェンディに代わって、私は質問した。

「それ、成分調査のために用意したんじゃないんですか？」

リプター先生は質問の意図が理解できないといったふうに答えた。「珈琲を作るために決まってるじゃない。それ以外になにがあるのよ？」

あるだろ。っていうかビーカーで珈琲飲むな。

そして私たちはリプター先生の指示の元で成分調査を開始した。しかし口で指図するだけで、自わからなにもしないあたり、教師という職業に情熱をまったく傾けていないのが如実に表されている。これは教師生活に倦怠感を持っているのではなく、最初からこんな態度だったに違いないという確信が私にはあった。確信しても、別に抗議しようという気はなかったけど。

「くっそー、早く解毒剤作らないと、学校中に変な噂が広がる」

アツシュは親の敵でも取るような表情で作業していたが、実のところ教室で見せつけたピスキーの求愛行動の成果で、一時間も経過しないうちに噂は広がっていた。

そして科学室内の様子を、PFCの三人が廊下から伺っていた。

なぜか草や木の枝を体中に貼り付けた迷彩処置を施して。

「このままじゃ、ピスキーちゃんの幸せが終っちゃうわ」

「なんとかして止めないと」

「僕は早く元に戻って欲しいんだけどな」

三年生が比較的まとまなことを発言すると、残り二人が睨みつける。

「なに言ってるのよ。ピスキーはアツシュの恋人になるの」

「あんたは見た目からして不合格 ヒド なんだから」

「うっ、ひどい。でも僕は挫けないんだ。ピスキーくんが他の男のところへ行っても僕はピスキーくんを思い続けるんだ」

しくしく泣きながら、永遠の愛を誓うが、はつきり言って気持ち悪い。

「とにかく私たちの、元気いっぱい甘えん坊と拗ねた不良くんの恋愛成就大作戦が、このままじゃスタート開始から躓くわ」

「どんな手段を使っても解毒剤の完成を阻止しないとね」

私は尋ねる。

「いつの間にそんな計画立てたのよ？」

「「ピスキーがアツシュに恋をした瞬間からよ」「当然のように答える女生徒の二人。」

薬物効果なんだけど、それは些細なこととして気にしないらしい。

「あ、そう」

不意に三人は驚愕の表情を私に向けた。

「どうして私たちに気が付いたの？」

「こんなに完璧に隠れてたのに」

「もしや特殊訓練を受けたスパイ？」

私は真剣に疑問に思い尋ねた。

「隠れてるつもりだったの？」

建物の中で森林迷彩を施せば、逆に目立つ。訓練を受けなくても、自分の身を見ればわかるだろうに。

私の質問に三人は悔しそうな表情になった。

「クツ、ここは一先ず退却よ！」

一年代表が叫ぶと、脱兎の如く走り去るPFC三人衆。

そしてウェンディが科学室から顔を出した。

「なんだったの？」

「さあ？」

私は肩を竦めて見せた。

成分調査が完了し、リプター先生は複雑な化学式やテープで貼り付けたグラフの前でタバコに火をつけた。勿論化学式などを書いたのはリプター先生ではなく、全てサイリックの手によるものだ。少しは働け。

「じゃあ、説明を始めるわね。元々の媚薬の成分は、アプラチーノ、スニクトフィーズ、ラルポトキルノが90%を占めて、残りはウイキーボナリス、ミオーナクサート、アマノカリノドが10%入ってるわ。だけど変質した媚薬にはアプラチーノ、スニクトフィーズ、ミオーナクサートの量が減少し、アマノカリノドは完全消失している。基本的に薬物は化学変化を起さないもので合成されるのが基本なんだけど、アプラチーノとアマノカリノドは結合するの。強引にやれば二百 近くの高温が必要だけど、長時間に亘る温度の上下変化が繰り返されて同じ効果が起きたんでしょね。このアプラチーノとアマノカリノドが結合された化学物質をヨセイフスコフって言うて、こいつはスニクトフィーズと結合し、そのさい含まれるクリアクリスを分離して、クリアクリスはミオーナクサートと結合する。結果一部の減少と、消失が起きた。そして新たに発生した成分だけ

ど、スファイリキッドとスジャビマキートが形成されている。スファイリキッドはそれ単体じゃなんの作用もないけど、こいつはストクフィーズと一緒に体内に投与すると、神経薬のヒクルサルトと同じ効果が得られるの。ヒクルサルトは脳の前頭葉部分に刺激を与え、ある特定の脳波、ウィシャースパターンを発生させる。ウィシャースパターンは理知的な感情が発生した……」

「先生」

説明を遮ってウエンデイが手を上げた。

「どうしたの？」

「もう少しわかりやすく説明してください」

その通り。やる気がなくせに、専門的説明を軽々とこなしてくれるさまに、なぜか腹立たしいものを感じた。

そしてリプター先生は心外そうに答えた。

「わかりやすく説明したつもりだったんだけど」

「……どこが……」

私たちは同時に反論した。

「えーと……」

困ったように頭をかき始めたリプター先生に、サイリックが助け舟を出す。

「結論から先に説明してみたらどうですか」

「そうね」リプター先生は同意して「結論から言うと、変質した成分のせいで、同性異性問わず、最初に目にした人間に対して効果が出るようになってしまったわけ」

「それで、解毒剤は？」身を乗り出してアッシュは聞いた。

「アイノンビクル40%、ゼイドラド30%、ヒルトキーリ15%、アクアウェイタ4%、ビージー10%。そしてデビルティア1%の合成薬を投与すればピスキーは治るわ」

「成分説明はどうでもいいですから、それ作れるんですか？」

「無理」

「断言しないでください！」

蓑虫のように縄を巻かれ窓の棧にテルテル坊主よろしく吊り下げられていたピスキーが、轡を口から外して求愛活動開始。

「アッシュくん、やっぱりボクたちは結ばれる運命なんだよ？ 結婚式はいつ挙げよっか？」

アッシュは轡を噛ませた。そして改めてリプター先生へと机に身を乗り出す。

「本当に無理なんですか？」

「入手不可能の薬品があるのよ。アイノビクルとゼイドラドは製薬会社に注文すれば二時間ほどで配達して来るし、ヒルトキーリは薬品庫にあるわ。アクアウエイタも校長が保有しているからなんとかなる。でもデビルティアは、ちよつと、ね」

「ちよつと、ってなんです。もつとはつきり説明してください」

「デビルティアは地獄の知性体、いわゆる悪魔の中で、特に強大な力を有する魔神と称される者の体液の一種。つまりその名の通り魔<sup>デ</sup>ビルティア神の涙

のことなのよ。魔神の涙を入手するのにどれだけの危険と困難が伴うのか、具体的に説明しなくても簡単にわかるでしょ」

アッシュは途方にくれた顔をしたが、しかし次の瞬間には強固な決意を秘めた瞳で訊ねた。

「どこにありますか？」

「は？」理解できずに聞き返すリプター先生。

「どこにあるんです？ 入手に危険と困難が伴うって言いましたよね。つまり場所はわかってるってことでしょう。教えてください、俺が自分で直接取りに行きます」

「あんだ、自分がなに言ってるのかわかってるの？」

「わかっています。でも俺は取りに行きます。止めても無駄ですよ。俺はどんなことがあっても絶対に手に入れて見せます。どんな場所でも、どんな遠くでも、どんな危険でも、どんな罠があっても！どんな敵が待っていても！！どんな手段を使っても！！」興奮してきたのか、次第に声が大きくなり、ピスキーを指差して「学校生

活全部こいつに言い寄られ続けられるなんて冗談じゃない！俺は平穩な学園生活を送りたいんです！だから先生、場所を教えてください！」

凄まじい剣幕のアッシュに、ちよつと怯えた表情で体を引いているリプター先生は告げた。

「運動部の十三番用具室の奥だけど」

「無茶苦茶近くじゃないですか！どこが入手困難なんです！？」

リプター先生は、物を知らない人間に解りきっていることを一から説明しなければならぬ時、説明する前から疲労を感じてしまう現象特有の嘆息をする。

「十三番用具室を甘く見ないで貰いたいわね。それはけして開けてはいけない禁断の扉。一度入れば二度と出ること叶わぬ死の入り口。デビルティアを手に入れるには、命を失う覚悟が必要よ」

「用具室で？」

私は訊いたが返答はなかった。

野球部が練習しているグラウンドから少し離れた場所にある、運動部専用用具室は全部で二十八室あり、十三と数字が書かれたプレートが貼り付けられた鉄製の扉の前に、私たちは集まった。

案内したサイリックが、隣の十二番用具室の鍵を開け、そこから装備品を幾つか持ってきて、地図と一緒に私たちに渡した。

サイリックが問題の十三番用具室にかけられた十三個の鍵を一つ一つ外しているうちに、私たちは装備する。

「場所は地下十三階層、つまり最下層です。ダンジョンクラブが既に調査してありますので、地図に従って進めば問題ありません。ああ、ヘルメットのベルトはちゃんと締めてください」

今一つ意味が理解できないことを説明しながら、鍵を全部外し終えたサイリックは、言いつつ私の顎に手を伸ばしてベルトをしつかりと締める。

私は自転車用のヘルメット かつこ悪い の他に、釘バット 木製バットの上部に無数の釘を長さ半分ほど打ち付けた武器。単純ながら殺傷力は侮れない にラグビーのプロテクターを装着している。

ウエンディは剣道の防具に、なぜかフェンシング。

アツシユは帝都警察採用防護服に、武器はモーニングスター 鉄球に棘々が付いた、鎖による遠心力を利用する武器 だ。

ピスキーは大学の野外研究チームが良く着る探索スーツ 防具じゃないよね に、ヌンチャク。

「わーい、コスプレだねー？」嬉しそうにアツシユに抱きつくピスキー。

「違うだろ。っていうか離れろ」押し返して距離をとるアツシユ。

「っていうか、なんで用具室に入るのにこんな装備がいるの？」とウエンディ。「だいたい用具室なのに、なんで地下十三階もあるのよ」

そして私は隣の十二番用具室を指差して「それに、この放課後ダンジョンクラブって、なに？」

サイリックは涙を堪えるように表情を歪める。

「みんな、短い付き合いだったけれど、というか半日しか付き合いがなかったけど、みんなと過ごした時間は本当に楽しかった……いえ、あんまり楽しくなかったけど、ぼくは絶対に君たちのことを忘れない」いつしか溢れる涙を拭って「でも、できることなら無事に帰ってきて欲しい」

「だから、なんで用具室に入るのにそんな大袈裟な別れ方になるわけ。この先になにかあるのよ？ っていうか、本当に用具室なのこれ？」

私は重ねて訊いたが、ピスキーの抱擁から一秒でも離れたいアツシユが遮って、中へ入るのを促した。

「そんなこと戻ってから聞けばいいだろ。早く魔神の涙を探しにくぞ。男に抱き付かれるなんざすっげえ嫌な気分だ」

頑丈な鉄製の扉と厳重な鍵について、疑問に思う余裕もなかったか、アッシュは軽率な行動を採ろうとしていることに気が付かないでいた。

「そんなこと言わないでボクのをたくさん受け止めてよー？」

「薬物使用だろうが。離れろ！ はーなーれーろー！」

そうして私たちは十三番用具室の扉をくぐった。

野球部のバッティングの音が一際大きく聞こえたような気がした。

#### 四話 放課後ダンジョン倶楽部 中篇

用具室の奥には下へ向かう長い階段があり、私たちは頭に装着した懐中電灯を頼りに下り始めた。壁は頑丈な石材で構築され、さらに魔法を付加させて強度が高められているらしく、年季を感じさせる色合いの割には破損度が低い。そして十三段を降りたところで階段は終わった。

十三階段。死刑執行と同じ数。十三番の用具室に、十三個の鍵。十三階層。十三という数字がまつわる用具室だ。

降りたところでは、幅のある長い通路が左右に続いている。懐中電灯で照らしても、闇に遮られ明確に視認判別はできなかったが、十字路や扉が無数あるようだ。

「なにこれ？ 随分広いわね」ウェンディが呟く。

歩きながら私は地図を広げて、目標地点の印を探そうとした。地図は一枚ではなく、二十枚以上重ねられているちよつとした冊子だった。私たちは物品が厳密に管理整頓されている結果こんな枚数になったのだろうと考えていたのだけど、アッシュとウェンディは私の手元を覗き込み、沈黙した。

地図の尺度から推測して、この地下用具室は学園の敷地内全体に亘っており、十三階層に分けられてある。その最深部の中央に印が付けられ、入り口からそこへ到る経路が赤いペンで描かれている。注意しなければならないのは、階層が十三あるのであって、十三階だという意味ではない。一つの階層は三十メートル前後に亘り、通路が複雑に、まさに縦横無尽に入り組んでおり、次の階層へ降りる箇所は一つだけ。

それは宛ら巨大立体迷路だ。

「随分大きな地下用具室だねー」

ピスキーの能天気な声に、アッシュは反論する。

「ここまできたら地下用具室じゃねえだろ。地下迷宮って言うんだ  
よこういうのは。なんなんだここ？」

アッシュの声が石壁に反響し、不気味な呻き声が返答のように届いた。

GURURURU……

私たちはピスキーを除いて 背筋に戦慄が走った。

「なに？ 今の声……」

ウェンディの疑念の囁きに答えるように、声の正体が姿を現した。  
通路を完全に塞ぐほどの巨大なイカが、軟体の体軀からは想像も  
できない速度で接近して来る。勿論通常のイカがこんな場所に生息  
しているわけがなく、ましてや声を発するなどということ自体でき  
るわけが無い。

イカの形状に似た、魔物だ。

そして魔物は人間を襲う。

「来たれ！」

アッシュは即座に魔法を放ち、真空の刃と衝撃波の二重攻撃で、  
魔物の体は半分ほど弾け飛んだが、しかし急速に再生する。

私たちは逃走しようと階段へ戻ろうとしたが、しかし背後からも、  
トンボに似た翅を有したトカゲの形状をした犬ほどの大きさの魔物  
が二匹、いつの間にか音もなく接近していた。

私たちはピスキーを除く 各々の武器を構えて臨戦態勢を取る。  
「なんでこんなところに魔物がいるんだ！」アッシュは理不尽な災  
難に対して絶叫に近い抗議をした。

「アッシュくん、ボクコワイ？」ピスキーはアッシュにわざとら  
しく抱きつく。

「キャー！ こっちこないでー！」フェンシングを滅茶苦茶に振り  
回して、ウェンディはトカゲトンボを近寄らせない。

「あー、こういうことだったのね」そして私は、なぜだか冷淡に納  
得してしまった。

サイリツクの言葉の端々から、それ以前にリプター先生がその危険性を明言していたのだ。いくら急かされたからといって、確認を取らなかったのがまずかった。とは言うものの、いくら魔法学園だからといって、地下に魔物が生息しているなど、想像の範疇を逸脱している。

魔物とは、古代の魔法使いたち、巨人族が生命の創造に挑戦し、そして結局失敗した、人工生命体の野生化したものらしい。

失敗と見做された最大の理由は、繁殖能力を有していなかったことにある。生殖機能が正常に働かないというのではなく、根本的に欠落しているのだ。その存在形態はどちらかといえば有機機械と呼んだほうが正確なのかも知れない。

それらは全て廃棄処分されたはずだが、一部が生存した。処分から逃れ生き延びて野生化した魔物は、急激に成長、進化し、やがて知性を獲得し、そして別の方法で同種を増殖させる方法を編み出した。それはある素材を使用して、自分の体をモデルとした複製体を製造する方法だ。つまり有機的な機械である魔物は、同じように有機部品を生成し、それを結合し組み立て、自分と同じ構造を有した存在を作り上げ、それを繁殖能力の代用とした。

そしてその素材とは、人間。

「生きて帰れない魔の用具室とはよく言ったもんねー。っていうか、用具室じゃないわね、これ」

逃げようにも階段への通路は魔物が塞いでいる。それにここまで接近されているとなると、隙をついてすり抜けることを考えるより、魔物を完全に破壊してからのほうが、かえって一番安全だろう。

「クレアア！ 呑気に納得してないでなんとかしてー！」

背後から伸びたイカ型の魔物の触手に足を捕縛され、ウェンディは逆様に宙吊りにされた。暴れて逃れようとするが、表面を粘液で覆われた光沢ある触手は、その程度で解けるはずがなく、むしろ絡み付いてくる。

「あ！ やだ！ どこ触ってるのよ！？ あっ、やんっ！ やめて、

あんっ」

「いい声よ、ウェンディ。その声で言い寄れば百発百中男をゲット」  
三つ編みメガネツ子の委員長が、粘液に濡れた触手に弄ばれる光景は、男が興奮すること請け合い。特に変な趣味のおじさん。

「訳のわからないこと言っでないで早く助けてー！」

これ以上ふざけるのは本当に危険だと判断して、私は戦闘に集中した。

私は自己基底意識を移行させると、同時に視覚の色彩が反転する。白が黒に、赤が青に、黄が紫に、緑が茶色に、光が闇へと。そして膨大な文字が眼前に擬似投影された。宇宙を構築する厳然たる法則が脳で処理され、言語情報に変換され文字として認識する。

そして自らの望んだ現象を引き起こすために、世界法則を消去し移行し変換させ、都合の良い法則へと強引に変更する。

それが魔法。神の定めた宇宙の法則を捻じ曲げる行為。

「我は……」

同時に私の喉から言葉が紡がれる。魔法使いは魔法を行使するさい、自らの意思を無視して、自らの声とは異質な声がなぜか発声される。

これを抑えようとしても成功した者は一人もおらず、偉大な魔術師と呼ばれた者たちも克服できなかった、魔法の最大の特徴であり、欠陥だ。

この奇妙な現象がなぜ起きるのか、現在も解明されていない。

ただ、その唄うような声を、呪文と呼んでいる。

二つの声が聞こえる。

「我は求める古の盟約」「我を求めよ古の契約」

一つは私の声。

「我は奉る、偉大なる御霊」「我は封じる、偉大なる怨霊」  
一つは誰の声？

「我が声に応えよ、闇の庇護者」「我が声に応じよ、光の守護者」  
それは微かに違え。

「今、彼方に」「今、此方に」

そして重なる。

「我は求めよと訴えたり！」

存在発生確率を急速に低減させ、イカ型の魔物は存在を維持できずに、光の粒子となつて消滅した。

触手に捉えられていたウエンディは、当然床へ落下。

「イツたーい」痛打した腰を掌で摩つて呻く。

「ほら、大丈夫？」

差し伸べた私の手を握つてウエンディは立ち上がった。

「凄いいじゃない、あなたも魔法が使えるのね」

「まあ、子供の頃から英才教育受けてるんだから、箒で飛ぶだけじゃないってことで」

「和んでる場合か！」

アッシュが叫んで、トカゲトンボの頭部にモーニングスターの鉄球を叩きつけた。遠心力が合わさった棘々の鉄球は、一匹の頭部を完全粉碎する。そして二匹目も、ピスキーからヌンチャクを奪つて右横面を殴打した。モーニングスターほどの威力がなかったのか、怯んで少し後退しただけで、体勢を立て直すトカゲトンボに、アッシュは続けざま回し蹴りを左横面に食らわせた。そして脳震盪を起して転倒したところを、モーニングスターを真上から叩きつけて止めを刺す。しかし騒音を聞きつけたのか、通路の奥からさらに数匹のトカゲトンボが接近してきた。

「くそ！ メンドクセエ！」アッシュはそれにモーニングスターを持ち手ごと投擲して牽制すると、大きく空気を肺に吸引し、そして

「来たれ来たれ来たれ来たれ！ 来・た・れ！！」

衝撃波が魔物を打ち据え、雷撃に感電し、真空の刃が体を引き裂き、空間の断裂が肉を抉り取り、複数の魔法の相乗効果で、魔物は一瞬にして肉片に変え、その肉片も蒸発するように灰燼<sup>Ash</sup>と化して消滅した。

「ふう……」アッシュは額の汗を拭い、なにかを期待した目をこちらに向ける。

私はウエンディと顔を合わせ、今後の方針を話し合う。

「一旦引き返したほうが良いかな？」

「そうね、こんな危険だとは思わなかったし」

「サイリックの奴、もつとはつきり説明してくれば良かったのに」「まったくよね。シュバルトの重火器、取ってくるとか色々準備できたのに」

「そういえばあいつ、どこでそんな物の製造知識を仕入れたの？」

「コラコラコラ、ちょっと待て」アッシュは遮って「なんで俺には称賛の言葉がないんだよ」

アッシュの切実な要求に私は「あんたが魔法を使うのはもう見飽きたから」

「有り難味つてもものがないのよね」ウエンディも同意する。

「そういうこというか、おまえら。命の恩人だろ」

「わかったよ、アッシュくん」ピスキーが肩の肌を出して「ボクが体でお礼をしてあげるね？」

「いらねえよ」アッシュは端的に拒否すると、モーニングスターを回収して奥へ進み始めた。「それじゃ、早く行くぞ」

私たちはその言葉に少なからず驚いた。

「あんた、先に進むつもりなの？」

「当たり前だろ」

「だって、今の見たでしょ。魔物がいるのよ」

「別に来なくていいぞ。俺一人だけでも行くから」

決別の選択を告げるアッシュに、ピスキーが抱きついた。

「そんなことするわけないじゃないかー？　ボクはずっとアッシュくんと一緒にいるよー？」

言いつつアッシュにしがみ付いて、首筋にキスをする。子犬がじやれ付いているようにしか見えなかったが、アッシュは嫌悪感でピスキーを引き剥がそうとする。

「離れる！　離れろって！」

「やだー、やだー」

しかし盲目的な愛情に突き動かされているピスキーは、ドーピングしたスポーツ選手宛ら、引くことを知らずにしがみ付く。

「わかっただろ！？　こいつを一秒でもなんとかしたいんだよ！

俺は！」

そして結局私たちはそのまま先へ進むことにした。私はともかく、魔法をまだ使えないウエンディは引き返すべきだと思ったが、委員長としての義務感からか、同行したのだった。

いや、正式な委員長は私なんだけど。

十三階層の　用具室改め　地下迷宮の壁や床は、特殊な材質で構築され、それは魔力を吸収する性質を備えている。また地下迷宮の構造は巨大な印や魔方陣を象っており、つまり巨大な立体複合魔方陣であるそれは、なにかを封印するための魔術儀式を基軸として建設されたことが推測できる。地上部分の巨大魔方陣は、この巨大魔法建造物の一端に過ぎない。

しかし巨大建造物はオズ魔法学園創設の遙か以前に建設された、古代遺跡の一種で、学園創始者であるオズやその他の関係者には直接的関わりがなく、建設に関わる記述や記録の類が一切残っていないため、本来の目的、なにを封印しようとしたのかは不明。最奥部にある封印施設には、オズの魔法使いたちが調査に入った時にはなにもなかったとされる。

ただ地下迷宮の構造と作用に関してはある程度解明されており、

その応用として魔法学園創始者である偉大なる魔法使いオズは、一聖紀半前この世界に来訪した異界知性体、魔神ドロシーと三柱の眷属を地下迷宮の最深部に封じ込めるのに利用した。

魔神ドロシー。地獄から来訪した少女。その目的は不明だが、その存在は世界中に破壊と混沌を撒き散らしたという。疫病、天変地異、天候の急激な変化。街一つを、人間を含めたあらゆる生命ごと、エメラルドの結晶に変えたというのは、有名な話だ。

その魔神を封じている地下迷宮の材質は、その中心軸から半径数十キロメートルに亘って存在する者の魔力を常に吸収し続けているが、極めて微弱であるため生活や生命活動にまったく影響はない。吸収されているという事実を知ってもいても自覚、認識は不可能なほど困難だ。

それでも数万人から数十万人、あるいは数百万人もの人間から吸収すれば膨大な量になり、そしてこの遺跡は蓄積される魔力が指向性を持って放出されるよう設計建築されている。

そのため魔神の持つ強大な能力は、膨大な魔力圧を相殺することに回され、抵抗し続けているのが精一杯の状態で脱出の余力がなく、百五十年以上この地下迷宮の最深部に呪縛され続けている。

なぜ都市部の地下に魔神が封じられているのか。封印がなんらかの理由で解除された時のことを考えれば危険ではないかと思うかもしれない。

だが、それは逆で、魔神ドロシーの弱体化に成功した時、迅速に封印処置を行わなければならなかった。少しでも時間が経過すれば、力を取り戻すかもしれない。そのために、都市部の地下に封印することになってしまった。

そして、オズ魔法学園が建設された。

魔神が封印されていることを隠蔽するために。当初は学園といっても名ばかりの建前のようなものだったが、経営担当の手腕が良かったらしく、今では世界最大の魔法使い養成学校になった。

つまりオズ魔法学園は、魔法使い養成学校であると同時に、魔神

を隠蔽する施設であり、そして魔神とその眷属を封じる魔力を提供する人材を確保する封印施設でもある。魔法使いの素養を持つ魔力保有者が集う、魔法使い養成学校が地上部分に設置されているのは、魔神封印に理想的な状態だ。

問題なのは、なぜ学校のクラブが国家機密情報を持っていて、しかも当然のように入部案内に記載しているのかなのだけれど、まあ私たちが知りたかったことはわかったので、良しとする。

「ようするに、解毒剤精製に必要なデビルティアは、魔神ドロシーから直接を手に入れろってことかよ。くそ！ ドロシーからどうやって涙を採ればいいんだよ？ 一聖紀半前に世界中を恐慌に陥れた魔神なんだろうが」

私が地図の裏に書いてあった説明を読むと、先頭を進むアッシュは呻いた。

「どんな危険があっても絶対に手に入れてみせるって言ったの、誰だったっけ？」

「覚えてるよ。ちゃんと考えてから発言しないと後悔するってのがわかった」

「いったん引き返して対策を練る？」

ウエンディが訊ねるが、しかしアッシュは首を振った。

「いや、ドロシーがどういう状態で封印されているのか、それだけでも確認しておきたい。でないと考えることもできないだろ。それに」アッシュは、抱きついて離れないピスキーを指差して「上手くいけばこいつをドロシーの生贄にして問題が一気に解決できるかも」「ちよつとちよつと、さりげなく危険な考えを暴露しないでよ」

「冗談だ 本当か？ 。それよりクレア、その地図に解説、誰が作ったんだ？」

「放課後ダンジョンクラブ。入り口の隣に部室があったでしょ。そこでクラブ活動の宣伝の一環で発行してるみたい。えーと……君た

ちの眠る力を目覚めさせよう。極限状況で潜在能力覚醒を促進。生存能力の飛躍的向上。誰もが憧れる冒険を今こそ実現。我ら放課後ダンジョンクラブ。パーティー編成、クラスチェンジ、自由。体験入部も可能。ぜひ見学に。だって」

「なんだそりゃ？」

「ようするに、ここで冒険ゴツコをやってるってことだと思っけど」「ゴツコっていう範疇を超えてるだろ。本物の魔物が出るんだぞ、ここは。なんでだか知らないけど」

「えー、魔物が出る理由は……魔術師連盟がオズ魔法学園と帝国の協定に基づいて、世界中から捕獲したものをここに集めて放してるって。万が一魔神ドロシーが呪縛を解いた場合、少しでも足止める戦力と、不用意に魔神を解放する人間を妨害させるためについて書いてある。それで、魔物にはある種の精神設定がされて、ある特定の紋章を身につけていれば襲ってこないようにしてある。でも、その紋章に関しては魔術師連盟と帝国の最重要機密事項に分類されている、と。ああ、だから教えてくれなかったのか」

「なに考えてんだよ魔術師連盟の連中？ 魔物が役に立つと本気で思ってるのか？」

その非難に、ふと私はアッシュが監視対象リストに掲載されていることを思い出した。

#### 四話 放課後ダンジョン倶楽部 後篇

私たちはその後も地下迷宮を進み続け、やがて六階層にまで降りた。その階層に下るさい、階段の壁に古代語で居住区と表記されていた。事実、この階層は人の住居があり、室内などではコンロやストーブ、照明器具などの機器が現在でも稼動可能だった。建築材に吸収蓄積された魔力が制御変換されている、現在では失われた魔法技術によるものだ。

地図の説明には書いていないが、ここは封印施設というより、緊急地下避難施設シェルターを兼ねた研究施設ではないだろうかと思う。建設者は最初の魔法使いたち、巨人族。

巨人族と称されても、体が大きいという意味ではなく、巨大な異能力を保有する人、という意味で、外見は人間となんら変わりはない。もつとも異形であつたのなら、私たちが常人に混じっているわけがないのだけだ。

その巨人族がなんの目的でこのシェルターを建設したのか、その理由まではわからない。専門的な研究者でも解明できなかったことだ、一介の学生である私が真実を見出せるわけもない。だが、緊急避難所の建設の理由は大別して二つしかないともいえる。

災害か、戦争か。

古代の魔法使いたちが戦ったなにかを研究調査するために建設された。この仮説はそれほど奇異ではないだろう。研究するものがないかはわからないが。

この階層に到着するまでも時折魔物と遭遇し戦闘になったが、ほとんどアッシュが速攻で撃退し、そのたびにピスキーが抱きついてくる、怪我をすることなく私たちは先へと進めた。

その凄まじい魔法の威力に、シュバルトの騒動の時は、あれでも相当手加減されていることが実感としてわかった。しかも十数回もの戦闘を繰り返していたが、アッシュは魔法行使による疲労の色はまったく見られない。通常の魔法使いなら、一日に十回程度使うのが精一杯なのだが、アッシュは百回を超えても顔色一つ変えない。信じられないほどの魔力保有量だ。

「アッシュ、ちょっと訊きたいんだけど」私は声をかける。

「なんだ？」アッシュは足を進めながら、質問を許可した。

「あんた、魔法が使えるわよね」

「何回も見てるだろ。なにを今更」

「そうじゃなくてさ、あんたそんなに魔法が使えるのに、なんで学園に入ったの？ 必要性が全然ないじゃない。今のあんたでも……いえ」私は言い方を間違えた。「あんたなら絶対に試験に合格して資格が認定されるはずよ。それに、ここは魔法使い養成学校。つまり魔法が使えない人間を対象に門戸を開いているわけでしょ。勿論、適性検査で一定量の魔力を保有している者に限定されてはいるし、私みたいに少しは使えるのも混じってるけど、あんたのはそんなレベルじゃない。今までの様子見ててわかったけど、まだまだ余力がある。もしかすると、一日千回近くは使えるんじゃない？ そんな魔法使い、世界最高クラスに属するわ。そんな人間がどうして魔法学園に入学する必要があるの？ いえ、そもそも、その年齢でどうしてそこまで魔法が使えるの？ 天才だから？ それだけじゃどう考えても説明不足よね。例えば、私は魔女の後継者よ。魔女の血脈に連なる力を先天的に有している。あんたは、どういう理由でその力を持っているの？」

アッシュは私の長い質問に、いつしか足を止めて振り返っていた。いつになく真剣で深刻な表情は、それは最初に出会った雨宿りの時と同じように見えた。

ウェンディは少し不安そうな顔で沈黙していた。彼女自身疑念を抱いていたのか、あるいはこの時の私の質問で、疑問に思うべきこ

とを自覚したのか。

答えるべきかどうかアッシュはしばらく逡巡していたが、やがて言葉を紡ぐ。

「その理由がないから魔術師連盟の監視対象リストに載って、ここに入るように指示されたんだよ。まあ、別に嫌だったわけじゃないんだが」

「どういう意味よ？」

彼は肝心の部分を省略して話していた。話したくないからなのだろうが、しかし明確に拒否しない限りは、私は追及するつもりだった。正直に言えばアッシュに対して危機感や警戒感を持っていたのだろう。今もだが。

アッシュは促されて続ける。

「魔術師連盟は、たぶん……」

「そんなの簡単にわかることだよお」

それまで沈黙していたピスキーが、唐突にアッシュの科白を遮った。

「簡単にわかるって、なにが？」

「ボクが好きな人なんだから、すごいのは当然だよお。ねー、アッシュくん？」

言いつつ心の底から嬉しそうな表情でアッシュに抱きつこうとした。

「アッシュパーンチ」

「ゲフウ」

アッシュは即座に殴り、ピスキーは変な声を出して わざと出したように聞こえた 倒れた。

「話は後だ。こいつを元に戻さないと、真面目な話もできやしねえ」  
ウェンディがピスキーを抱き起こしながら非難の声を上げる。

「ちよっと、こんなことしちゃダメでしょ。ピスキーは薬のせいでこうなってるんだから、治るまで優しくしてあげなさいよ」

「嫌だ」即座に拒否するアッシュ。

「どうしてよ？　こんな可愛い子に懷かれて嬉しくないの？」

「そいつ男だろ」

アッシュにとって最も重要な指摘を、ウェンディは一蹴する。

「そんな細かいことどうでもいいじゃない、こんなに可愛いんだから。わたしならここぞとばかりに思う存分イタズラするのに」

「……おまえ、今問題発言しなかったか」

「おやおや、君たちは随分チームワークが乱れてるね」

不意に通路の曲がり角の影から誰かが現れた。軽装の防護服に腰に剣と拳銃を佩いた、男子生徒だった。

さらにその後方から三人が順番に登場する。

神官服を纏い、儀礼用の装飾棍を手にした女生徒。

辺境民族の毛皮に金属板を貼り付けた防具に、巨大な鎚を手にした巨体の男子生徒。

そして背が低く枝のように細い痩せた体に、お伽噺に出てくる魔法使いのようなローブを羽織った男子生徒。

全員律儀に胸元にオズ魔法学園の学生章をつけている。これがなかったら学生だと私は判断できなかった。まあ、偽造したんじゃないだろうか、という疑いが頭から離れなかったけど。

「あんたたちは？」

アッシュの問いかけに、最初に声を発した人物は、瞳を不敵に輝かせて、腰に佩いた剣を抜いて掲げた。

「僕は魔法剣士！　セブリック・キーファー！　パーティーのリーダーを勤めている！」

次に右横の女生徒が装飾棍を掲げて名乗る。

「あたしはボニー・シブルス！　僧侶よ！」

そして左横の巨漢がハンマーを構える。

「俺はジェイコブス・イーサン！　戦士だ！」

さらに左後方の小柄で痩身の男子生徒が杖を掲げた。

「私は精霊使いのディブル・クレンザー！」

最後に彼らは、まるで事前に練習していたかのように　というか練習していたのだらうけど　呼吸を合わせて、それぞれのポーズを取って声を揃えた。

「……我ら放課後ダンジョンクラブ！！」「……」

「あ、魔物」

私の言葉と同時に、真っ先に放課後ダンジョンクラブが襲われる。

「……どおおおおお！！」「……」

三分後、魔物をアッシュの魔法で撃退したのち、改めて自己紹介に入った。

「先も言ったが、僕たちは放課後ダンジョンクラブの部員だ。その地図を持つているからには知っていると思うが、放課後ダンジョンクラブは、自身の潜在能力覚醒を目的としたクラブで、常に実践を重ねる。つまり、偉大なる魔法使いオズが残してくれた試練の地下迷宮　そんな名目はないし、そんなことのために残したわけではない　を探索することで、僕たちは常に己を鍛え続け、自分の限界に挑戦しているのさ」

「へー」

あからさまに興味がなさそうにアッシュは相槌を打つ。

しかし彼らは誤解したらしく、リーダーを名乗るセブリックが手を振った。

「ああ、わかっていても。君たちのパーティーに口出ししようなどと考えているわけじゃないんだ。だが、敢えて先輩として言わせて貰うが、チームワークは戦闘において大変重要だ。仲違いは人間関係において避けられないことだとしても、しかしダンジョンに入ったからにはそういった雑念は忘れて、探索と戦闘に集中するべきだと思う。まあ、新入部員への選別の言葉だと思って受け取ってくれないか」

でも魔物を撃退したのはアッシュだが。

得意気に語るセブリックに、そのアッシュは訂正した。

「いや、俺たちは別に新入部員じゃないんだが」

「ああ、体験入部だね」

「違う」

端的に否定する言葉を、しかし再び誤解をしてセブリックは手を振った。

「いいんだよ、そんなごまかさなくて。君たちも、僕たちの崇高な理念思想に共鳴したのだろう。そう、屁理屈同然の理論や形骸化した時代遅れの教科書に頼る連中などより、常に実践を重んじる僕たちのクラブは、正しく挑戦心を刺激する。その燃える心を隠す必要などない！ 教科書を丸暗記してテストでちよつといい点取っただけで大きな顔をする連中など物の数ではないのだ！ 生と死の境界線を渡る僕たちの理念を冒険ゴツゴなどと嘲笑うなど 私信いまして 言語道断！ そう！ 生徒会からなんと言われようとも！ 多少の死者が出て！ 我々はクラブ活動を断念することはないのだ！ 我らに輝く意思がある限り！！」

だんだん興奮してきたのか、最後には魔物の存在を忘れて大声になっっているセブリックに、ウェンディは一つ重要な箇所に気付いて、慄いて訪ねた。

「死亡者がいるの？」

「うん、先程も三名入部志望者がいた。これを機にさらに増えることだろう」

死亡者と志望者の意味には断絶に等しい違いがある。

「まあ、これから精進を続けてくれたまえ。いやあ、新入部員が今日一日だけで七人も入ってくれて喜ばしい限りだ。じゃあ、僕たちはこれで失礼するよ。ああ、後もう一つ忠告を。始めのうちは無理をしないようにね。ここ十数年間は死者は出ていないが、初心者には深く進まないことだ。階層が深ければ深いほど、魔物は強力になっっていくからね。ここから先は今までより段違いに危険になるから、

そろそろ撤退したほうが懸命だと思うよ。それじゃ、僕たちは先に」  
そして放課後ダンジョンクラブは一列に闊歩して去って行った。

「なんなの、あれ？」

ウエンディの疑念の呟きに、私はわかりやすく答えた。

「放課後ダンジョンクラブ、でしょ」

「いえ、それはわかるけど、戦士とか魔法剣士とかって、なに？」

「ゲームのタイプ選択とかであるじゃない」

「わたし、ゲームとかやらないから」

「おまえら、入部する気あるか？」

アッシュの問いかけに、肯定するものは誰もいないと思ったのだが、一人だけいた。

「アッシュくん、ボクたち一緒に入ろう？ 薄暗い地下の中で二人つきりー？」

「さー、先進むぞ」

アッシュはそれ以上の科白を聞き入れず、進み始めた。

## 五話 トライアングルフォーメーション 前篇

GINYAAAAA……

猿に似た顔を二つ持つ魔物が接近する。二メートルの巨体だが、下半身がなく、当然足もなく、異様に長い手を足のように使って移動し、そのため一つ一つの動作がひどく大きく、それゆえ不気味で恐怖を掻き立てた。

「来たれ！」

アッシュの魔法によって、猿に似た二つの頭部を持つ足のない魔物が、爆散した。

魔物が消滅すると、その背後に巨大な金属製の扉が姿を表す。

放課後ダンジョンクラブから別れてから、三十回以上の戦闘をこなし、遭遇した百体以上の魔物を殲滅し、そして二時間ほど経過した頃、私たちはようやく最深部に到達した。

アッシュの強大な魔法と魔力がなければ不可能だっただろう。

十三階層の最下層中心部。魔神ドロシーが封印されている地点の少し手前で、私達は立ち止まり、地図を確認する。

地図上では、扉の先は大きく空間が取られており、二重構造の封印の間となっている。まず一つ目の部屋に通じる扉は巨大な鋼鉄製のこの先には封印を解除する侵入者を撃退するための、強力な魔物が配置されている。

私達は扉を眼前に控え、これから遭遇することになる戦いと、異界の少女を思う。

「重そうな扉だな。普通に押して開くか？」

アッシュは誰ともなく呟くと、呼応するように扉が音もなく手前に開いた。

「ああ、引くんだ」

ウェンディの納得した言葉に、私は注意を喚起させる。

「この場合、誰が開けたのか気にするべきなんじゃない」

誰も扉に手を触れていないのに気付くと、二人は扉から飛び退いた。

扉の向こうには、無数の蠟燭が灯された広大な部屋があり、しかし装飾品や紋様の類は一切無い。無駄な物を省いているのは、戦う者には必要がないからか。

しかし部屋の中には、予想していた異形の魔物の姿はなく、代わりに三人の人物が仁王立ちで待ち受けていた。

「アッシュ、ピスキーの恋を消すなんて許さないんだからね」

「そうよ、こんな可愛い恋人ができるチャンスなのに」

「できれば僕が代わりたいくらいなんだ。それなのに君は。くっ」  
手にそれぞれの武器を手にしたPFC三人衆。

そういえば放課後ダンジョンクラブが、新入部員が七人入ったと言っていたことを思い出す。その時は気にも留めなかったが、私たちを除いた三人は彼女たちのことのような。

しかし、夥しい数の魔物が跋扈する地下迷宮の中を、死に物狂いで辿り着いたのだらう、装備品はぼろぼろになっている。あるいはこの部屋の本来の主と戦った結果か、それとも両方か。魔物の残骸はないが、魔物は基本的に死と同時に消滅するため、断定はできない。

「わー、みんなどうしたのー？」

ピスキーが脳天気 to 訊ねると、二年代表が答えた。

「ピスキーちゃん。あなたの恋は私たちが絶対に叶えて見せるわね。というわけでアッシュくん！ピスキーちゃんと付き合って上げなさい」

「なんでだ？」うんざりした面持ちのアッシュ。

「なぜだ to ！？」君にはわからないのか？！」三年代表男子生徒が激昂して「ピスキーくんがどんな思いで君に告白したのか。周囲の好奇の視線に晒され、これから起こる迫害を覚悟して、そうして告

げた真剣な思いを君は拒むのか！？　なら僕と代わってくれ」

最後の科白で二年の女生徒に頭を叩かれた。

「真剣つて、薬物効果だろ」

アッシュの指摘する問題に、一年代表が憤慨する。

「それがどうしたのよ！　一体なにが不満なの！？　いい、恋が芽生えるのに理由なんて必要ないわ。そして一度芽生えた恋はあらゆる障害に立ち向かうの。年齢も、身分も、人種も、国境も、性別も！　それでも文句があるの？」

「あるに決まってるだろ！　特に最後！」

「どうしても承諾しないのね」

「するか！」アッシュは断固として拒否の構えを崩さない。

「仕方がないわ。こうなったらあたしたちが力尽くでも」

「ピスキーちゃんの恋を成就させるんだから」

「覚悟したまえ」

「どうやって？」

アッシュの質問の答えは、私は予想が付いた。

「見える」一年代表が後方の扉を指した。「あれが魔神ドロシーのいる、封印の間への扉よ」

封印空間につながる扉は、この部屋に入ってきた物とは変わって、普通の人間が使う物と同じ、木製の小さな普通の扉だ。

「でもここは通さない」三年代表が一步前に入る。「魔神の涙が欲しかったら、僕たちを倒してからにするんだ！」

「そうよ」二年代表が剣を突きつけた。「魔神の涙を手に入れて、ピスキーちゃんに涙を流させるなんて、私たちが絶対に許さないんだから」

予想通りだった。

「わかった」

嘆息してアッシュが同意する。

どうやら魔神の前に倒さなければならぬ魔物の代わりに、三人を倒す必要があるらしい。魔物と、魔物を倒した魔法使い。どちら

が強敵と見るべきか。

でも、戦うのはアッシュだけで、私たちは後ろで待機。念入りに簡易式魔法結界装置を使用して。

そして、PFCの三人は掛け声を上げて三方向に散った。

「『トライアングルフォーメーション！』」

三人は口々になにかを唱え始める。始めはそれが呪文だと思ったが、違った。

「真実の恋は美少年の恋」

「美少年は恋を求めて流離う」

「できれば僕が食べちゃいたい」

女学生二人が両側から三年代表男子生徒に飛び蹴り。

「余計な邪念を持つちゃダメ！ あんたは不合格だってさっき話しかつたでしょ！」

「初物はアッシュくんにするんだからね！ 変なこと言ったからフォーメーションが崩れちゃったじゃない！」

「うう、ゴメン」痛そうに蹴られた脇腹を押さえる三年代表。

アッシュは面倒くさそうに声をかける。

「おい、もういいかー」

三人は陣形を整え直した。

「じゃあ、改めていくわよ！」

「『トライアングルフォーメーション！ アタアック！』」

そしてアッシュの魔法一発でPFCは倒されてしまった。

簡単にKOされたのは、フォーメーションが崩れたのが原因かどうかはわからない。

たぶん関係ないと思う。

「さて。変な連中はさっさと忘れて、行くぞ」

倒されたPFCの世話をピスキーに任せて 三人は感涙して喜んだ 私たちは最後の扉を開けた。

眩い光が溢れた。

それは一瞬の錯覚。

白壁の部屋だった。

純白のレースが天井から吊るされ、絵画や剥製、銅像などの装飾品がふんだんにあり、それは王宮の一室を思わせる豪華な部屋だった。

だが、それらがただの飾りでないことは、魔法使いの端くれなら見抜ける。それらの全てが封印の媒体素材だった。

その中心のベッドに、一人の少女が眠っていた。田舎の女性が着用する質素な衣服にエプロンをかけた、素朴で可愛らしい少女が、寝言のように小声で謡っている。

『偉大なる魔法使いオズ、私たちは約束の物を貰いにやってきました。案山子は言いました、わたしは頭の中見の約束です。ブリキの樵は言いました、俺は心臓の約束です。ライオンは言いました、僕は勇気の約束です。そして私は言いました、故郷へ帰してくれる約束です……』

天蓋付のベッドに横たわり、お伽噺のような詩を詠い、涙を流している少女こそが、一聖紀半前にこの世界に来訪し、災厄をもたらした魔神ドロシー。

「ねえ、あの子が、ドロシーなの？」

「待って」

ウェンディが疑念を呟きながら部屋の中へ入ろうとするのを、私は肩を掴んで制した。

私はポケットから硬貨を一枚取り出すと、ドロシーへ向かって指で弾いた。放物線を描いたそれは、室内に入る直前、ウェンディの眼前で強烈に発光して消滅した。

「な、なに？ 今の？」ウェンディは慄いて後退る。

「念の為に言っておくけど、ドロシーは攻撃したわけじゃないわよ。」

強力な力を放出して、地下迷宮の構造によって加えられる魔力の圧力を相殺しているだけ。コインが消えた場所が、その一線。その内部じゃ物凄い力の奔流が発生しているから、そこを越えれば、同じ目に遭うわよ」

だがドロシーの力は私たちの持つ魔力とは全く違う異質な力のようで、正体や本質を上手く解析できなかった。もっとも異界の存在であるのだから当然なのかもしれないが。

一つだけわかったのは、あの詩は厳密には詩ではなく、私たちと同じ、呪文だ。

「これで、どうやって涙を手に入れるのよ？」

魔神の力と地下迷宮の魔力圧の複合による、絶対不可侵領域。接触しただけで存在が消滅する障害。魔神の涙は正しく目の前にあるというのに、絶望的な壁が立ちはだかっていた。

しかしアッシュは、制服の腕を巻くって進み始めた。

「俺が直接行く。涙を流させる方法が思いつかなかったけど、始めから泣いているんだったら話は早い」

「ちょ、ちよっと、行くってそんな簡単に。今の見てなかったの？」

ウェンディがアッシュの発言も行動も、まったく理解できないように戸惑った。しかしアッシュは自信を持って断言した。

「大丈夫だ、俺なら突破できる」

アッシュは前方の空間に手を伸ばした。ウェンディは思わず目を背けたが、私はこれから起こる出来事のある程度予想できたので、しっかりと見届けた。

硬貨が消失した相殺線に、アッシュが伸ばした指先が接触し、膨大な光量が放出され、しかし彼の体は消滅しなかった。少しずつ内部に進入し、やがて体全体が奔流する力場に入った。地下迷宮による魔力と、魔神の力が激突する領域において、通常の物体は一瞬でも存在できない内部に、確かにアッシュは消滅せずにいた。

「ウソ？　なんで？」

ウェンディは信じられないといった表情で呟いた。

「アッシュもドロシーと同じことをしているのよ。加えられる魔神の力と魔力圧の奔流を、自分の魔力で相殺している。とんでもない量の魔力が必要で、私たちには絶対に不可能だけどね」

それに必要な魔力がどれだけのものになるのか、この時の私は正確には理解していなかったのかもしれない。

アッシュがどれだけ危険な存在なのかも。

後日の話になるが、私は実家の調査員に依頼してアッシュのことを調査してもらった。

街の一角にあるカフェテラスで、渡された調査結果報告書と、魔術師連盟から秘密裏に入手したアッシュの詳細情報を眼にした時、私は思わず疑念の声を呟っていた。

「なにこれ？」

調査員はそういう反応を予想していたのか、すぐに念を入れる。「先に言っておきますが、記入ミスなどの間違いではありません。私自身信じられず、何度も確認しましたから。しかし事実です」

世界魔術師連盟重要機密書類。

アッシュ・スカーデイン。性別・男。生年月日・聖暦2886年7月7日。出身地・十都市連合アフロディーネ市。

2899年7月12日、第一級魔導災害発現。人家人命等の被害無し。

2899年7月13日、魔力保有値検査開始……

「本当に記入ミスじゃないの？ これ桁を間違えてない？」

私はアッシュの魔力保有値の欄を示して重ねて尋ねた。しかし調査員の男は、その重大性を理解しているのだろうか、奇妙に淡々と再度否定する。

「いいえ」

通常の魔法使いの免許発行者の魔力保有値は、平均500？/p。魔術師の認定を受けた魔法使いは、平均1000？/p。

過去最高記録、8000? / p。

だがアッシュの魔力保有値は……

「百七十万?」

1700000? / p。

「最低でも」

「過去最高の二百倍以上はあるんだけど?」

「その通りです」

アッシュ・スカーディノ。詳細報告書。

アフロディーネ市在住、元世界魔術師連盟会長レンドム・クレリックの元にて、九歳時から魔法の指導を受ける。正式に生徒、弟子として連盟に登録されていないが、指導の結果、飛躍的向上が見られ、二年後には基本的な魔法が行使可能となる。

2899年7月12日。同市付近にて魔物の大量出現発生確認。

同市連盟支部は対応に当たるも、事態収拾は極めて困難。付近住民の避難を行うに留まる。

同市外地三キロメートル地点にて、対象人物を含めた四人の未成年者が魔物と接触。戦闘になったと推測されるが、全員生存するも証言は多岐に渡る。対象人物を含めた全員が、戦闘時における過度の興奮で記憶が曖昧になっており、明記するほど根拠のある情報はないと判断。結果のみを記す。

対象人物を中心とした半径五メートルから三百メートルまで最小単位での物質崩壊発生。

半径五メートル以内は、影響なし。このため対象人物と他三人は無事だった模様。

魔物、殲滅。

レンドム・クレリックはアッシュ・スカーディノを同日同市連盟支部に連行。即刻、魔力保有値測定を行う。

魔力計測器が上限を遥かに超える魔力にてオーバーヒートを起こし、三台が故障。

支部の機材では計測不能と判断。十都市連合魔術師連盟本部へ移

送。現存する計測器では最高値の機器を使用して、計測再開。

計測開始から二分後、上限を超える過剰魔力で非常停止装置が作動。至急中断。一時間後、修理ならびにいくつかの改造を施して、再度計測開始。

二分後、やはり非常停止装置が作動し緊急停止。対象人物の正確な魔力測定はこの時点で断念。

緊急停止直前の数値は二度とも1700000? / pを超えていた。

同日、アッシュ・スカーディノ、第一級魔導士指定決定。分類。

第一級魔導災害発現可能能力保持者。危険度詳細、特定不能、測定不能、予測不能、推測不能。

2901年。世界魔術師連盟によりオズ魔法学園へ推薦入学。同連盟による奨学金支援中。

第二級監視体制にあり。対策法・現在不明。

「……監視対象になるわけだ。冗談抜きで世界を滅ぼすことだってできるじゃない」

私は頭を抱えた。アッシュの魔力保有量なら一夜にしてこの都市を壊滅させ、三日で大陸を海に沈め、七日で世界を焦土と化すことが可能だろう。

アッシュはただ存在しているだけで、天変地異を引き起こしかねない人物なのだ。

「それで、なにが原因でこんな巨大な力を保有することになったの？」

「原因はありません」

調査員はやはり淡々と答えたが、私は納得できなかった。

「そんなわけないでしょ」書類を捲り、アッシュの力の源泉が記してある項目を探す。「こんな大きな力、維持するだけでも物凄い不自然な状態じゃない。なにか原因があるはずよ」

悪魔と契約したのか、邪神の生まれ変わりなのか、始原の巨人の複製体なのか。

「いいえ、本当に原因がありません。魔術師連盟が徹底的に調べ議論し尽くした後の、結論です。いいですか、アッシュ・スカーデイノが脅威である最大の理由はそこなんです。彼は一切の原因、起因するものがなく、世界を滅ぼしうる力を持っている」

断言する彼は、報告書の中ほどを開いて見せ、私はそれを一読する。

魔術師連盟会長命令で連盟内に調査チームが編成。アッシュ・スカーデイノの力の源泉の調査が実行された。

過去の系譜の魔法使い。人造人間。複製体。神に叛旗を翻した七人の元大天使長。世界各地に存在する、人格を有したエネルギー生命体、通称邪神。地獄に封印されている悪魔や魔神たち。そして地獄と人界の連結部を管理する四人の魔王。果ては、暗黒の宇宙の彼方から来訪する地球外生命体まで。

あらゆる可能性を念頭において徹底的な調査が行われたが、結果はその全てが関与していないという結論だった。

最初の調査団は、全てにおいて完全無関与という結論に達した時点で、現魔術師連盟会長命令で解散された。調査能力に疑問あり、というのが理由だが、それは半ば願望によるものだったのかもしれない。

新たな人材による調査チームが編成され、調査が再開された。どのような些細なことでも構わない、なにかしらアッシュが人間には有り得ない魔力を持つ原因、機会があつたはずだ。

だが結論は同じだった。アッシュの力を説明できるなにかは、発見できなかった。

「そう、発見できなかった。これがどういう意味かわかりますか？いえ、あなたならわかるはずです。あなたはすでにアッシュ・スカーデイノと並ぶ強大な存在と対峙している」

「西塔に存在する地獄の連結部。その地獄側の管理者である、魔王」  
「ですが、あなたは魔王の力がどれだけ強大であっても、恐怖に屈することはないはずです。なぜなら……」

「……魔王の弱点を知っている」

魔王、邪神、魔神、その他多数の、世界に猛威を振るった神話や伝説的な存在の全ては、現在においてはそれほど脅威とされていない。的確で効果的な対応策が確立されているからだ。むしろ地震や台風といった自然災害のほうが甚大な被害をもたらすかもしれない。例えば、吸血鬼ならば銀に対して極度の毒性反応を示し、日光は業火のように肌を焼く。

闇の王は、三人の竜王の牙によって、闇の力を失い消滅した。

大峡谷に出現した、世界を滅亡させる名の無い魔獣は、真の名を与えられたことによって滅びの力を失った。

時の狭間に潜む邪神竜は、一人の少年の一振りの剣によって、絶対的な権限を断ち切られた。

オズ魔法学園地下に封じられた魔神ドロシーは、サーカスの気球を奪われ力の源泉を失った。

強大なる存在は、同時にその力が及ばない、あるいは無効化されてしまう、決定的で致命的な弱点がある。

アッシュの力が、悪魔と契約したとか、吸血鬼化した、邪神の依代であるなどといった、そういったなんらかの外的因子によってもたらされたものならば、その方面から調査すれば、それに沿った弱点もすぐに発見され、対応策が確立されたはずだろう。

しかし、そういった力の源がないのであれば、その力を無効化する方法や、確実に死に到らしめる弱点が、基本的に存在しないことになる。

「普通の人間なら、普通にやれば……いえ、駄目ね」

私は自分の考えを否定した。

普通の攻撃はどうなのか。外的因子によって与えられた力ではないなら、普通の人間と同じ方法ならば殺傷可能なのではないか。

魔術師連盟もそういった方面での考察がされたようだが、確実にいえる方法は発案採用されなかった。

多少の傷は生存本能の働きと強大な魔力の複合効果で、即死でな

い限り無意識に治癒してしまうだろう。

狙撃で脳を一撃で破壊するのが最も効果的だろうが、魔物との接触による潜在能力覚醒までに、アッシュの脳は世界情報解析に特化したものに変異している。どんなに微小であっても、殺意、殺気を絶対に感知する。アッシュに、攻撃を察知された状態で即死させる確立は極めて低い。

睡眠中を襲撃する方法も当然検討されたようだが、実験的にアッシュの睡眠中に攻撃態勢を行ったところ、なんらかの反応を示した。おそらく、明確な殺意を持っていた場合、目を覚ますことは予想に難くない。

食品に即効性の猛毒を混入させる方法も、アッシュなら一目で解析されてしまいすぐに判明する。ナイフなどに仕込んでも、狙撃と同じ理由で不可能に近い。そもそも、現在のアッシュの細胞は強靱に変異しており、人間の範疇からは逸脱していないものの、あらゆる耐性が強い。生半可な量では解毒されてしまうだろう。

徹底的に呪法を施して魔力を封じても、アッシュの魔力保有量なら、単純な力押しで破ることができる。

寿命を待つのも時間がかかりすぎる。魔法使いは総じて長命の傾向があり、二百歳に手が届くものもある。アッシュならどれだけ寿命が長くなるか。

「……止める方法がない？」

世界各地の強大なる存在は、現在では対応策が確立されているため、それほど脅威ではなくなっている。彼らが活動を再開しても、弱点を知っている人類は、的確に処理することが可能だ。

だがアッシュは違う。もしアッシュが気紛れで天変地異を引き起こし、大災害をもたらしたとしても、それを止めることは誰にもできない。

言い換えれば、新たな脅威の誕生。かつて世界人類は数々の脅威と立ち向かい克服してきた。そして現在、かつての脅威がそうであったように、世界人類はアッシュという脅威に直面している。そし

て対抗する手段は、まだ発見されていない。

「魔術師連盟は監視下に置くためにオズ魔法学園に入学させました。なんのためか、理由はわかりませんね」

「あいつの人格や思想を調べるため。力の保有者が、危険な人物かどうかを見極めるために学園に入学させた。力の使い道、使用方法など、こういった傾向があるか。つまりは、アッシュは世界を敵に回すような人間なのかどうか。世界に混乱をもたらすのか、最悪滅ぼすか。それとも、なにもしないのか」

「彼自身には説明されていないでしょうが、薄々は気づいているでしょう。誰でも少し想像力を働かせればわかるはずですから」

つまり世界魔術師連盟は、アッシュという未知の脅威に対して、いわば様子見という消極的な方法を取った。しかし積極的な方法といえ、一つしかない。

「そして、もし彼が危険な人間だと結論を出せば、総力を挙げて抹殺に取り掛かるでしょう」

それが脅威を消す最も単純で、確実な方法だ。だが同時に最も困難であり、危険でもある。

最初の段階で仕損じれば、抵抗される。その時、どれだけ被害が引き起こされるのか、誰にも予想できない。まして周囲の方から攻撃を仕掛けたとなれば、脅威となる人物は、それこそ世界を滅ぼすような行動に出る可能性もある。

全力で抹殺するか、傍観するか。両極端な二つの選択肢しかない。「仕方がないと言えば、仕方がないのかもしれませんが。例えば、目の前で拳銃や爆弾を持っている人がいれば、それを使う気がなくても、恐怖を感じずにはいられない。自分を簡単に殺すことができる力というものは、ただ存在するだけで恐ろしいものです」

問題の一つにはアッシュが自分の能力にどれだけ自覚的なのか、そして自分の力をどのように捉えているかということがある。

強大な力を持った者は、概ね二つの傾向を示す。力に酔いしれ傲慢になるか、力を恐れて萎縮するか。

「魔術師連盟に従ったのは、殺されるのを避けるためよね。でも、アッシュなら簡単に抵抗できるじゃない？　なんで素直に従ったの？」

「本人はおそらくそこまで増長していないでしょう。魔力が強いといっても、自分はまだ子供。魔術師連盟が総力を挙げて抹殺しにかかってくれば、さすがに勝てるとは思えない。少なくとも現在はそう考えている。だから魔術師連盟の指示に従った。ですが、もしその時が来たとしても、殺されるつもりでもないでしょう」

私もそれには同意した。アッシュはどちらでもない。絶対的な存在であるのだと傲慢になることも、力のために周囲に圧殺される可能性に怯えることもない。

意識的にしろ無意識にしろ、まだ二つの方向性を決めかねているのだ。

「そう、これから彼はどうなるのでしょうか？　彼は自分の力をどのように捉えるのか。特権が授与か。素晴らしき祝福か、忌まわしき呪詛か。そして、それを決めた時、彼はどんな行動を選択するのでしょうか？」

## 五話 トライアングルフォーメーション 後篇

アッシュはドロシーのベッドの隣に到着した。

少女の姿を隠す、天蓋から垂れる白いレースをまくり、彼は少女の姿をした魔神の頬に触れる。

『案山子は言いました、わたしは貴婦人だと思っていました。ブリキの樵は言いました、俺は恐ろしい獣だと思っていた。ライオンは言いました、僕は火の玉だと思っていた。そして私は言いました、私は大きな首だと思っていたわ。オズの魔法使いは言いました。いや、私は腹話術師なのだよ。ほら雀の声だ、猫の声だ。どうだね、私は全ての鳥の声と獣の声を真似できる。私は言いました。いいえ、あなたはペテン師だわ。大嘘吐きの詐欺師のオズ、サーカスの気球はどこにあるの……』

ドロシーの右目から流れる涙に、さながら眠り姫を迎えに来た王子のように、アッシュが触れると、その涙が宙に浮遊し小さな球体を形成する。そして涙の球を防護する物質をアッシュは構築させ、少女の涙は水晶のような物質に完全密閉された。

アッシュの手に魔神の涙が収まった。

採取が終わるとアッシュは、向かった時と同じように慎重にこちらに戻ってきた。

そして、封印空間の領域外に出ると、安堵の息をつく。

「ふう……成功」

頬から一筋の冷や汗を垂らしているウェンディは、そんなアッシュに畏怖の念を抱いた目を向けていた。

たぶん私も似たような目をしていたのだろう。

アッシュ・スカーディノ。

魔術師連盟で監視対象リストに名が掲載されている危険人物。

第一級魔導災害発現可能能力保持者。

彼はいつでも世界を滅ぼすことができる。

その後、地下迷宮を引き返し、地上へ出た私たちは、真夜中の空を見上げる。雲一つ無い空は無数の星が瞬いていた。

「みなさん無事だったんですね！」サイリックが感極まった表情で出迎えた。「ぼくは信じていましたよ、みんなが帰って来ることを。ああ、本当に良かった」

「なら、俺たちの名前が書いてあるその位牌はなんだ？」

アッシュが尋ねると、サイリックは背後のゴミ箱へ投げ捨てた。

「なんでもありません。じゃあ、ぼくは先生を呼んできます。たぶん戻ってこないだろうからって ヒド 先生帰っちゃったんで ヒッドー。みんなは科学室で待っていてくださいね」

サイリックが走っていくのを見届けた後、ウェンディは十三番用具室の扉を振り返った。

「あの三人、放っておいていいのかしら」

PFCの三人は、アッシュの主張により、最下層に放置したままだ。

「いいんだよ」

良くないだろ。

そして私たちは深夜を徹して薬剤調合に取り掛かり、丑三つ時になつてようやく完成し、ピスキーに投与した。

保健室で眠っているピスキーを眺めながら、私たちは目を覚ますのを待つ。

薬剤による睡眠は、身体の疲労とはまったく関係なく、一定時間経過した後、必ず目が覚める。

アッシュは解毒剤の効果を確かめてから出ないと安眠できないの

か、目をこすりながら、その時を待っていた。

私は正直言つて、ピスキーが目を覚ます前に、安眠したくなっていた。

サイリックはリプター先生と一緒に科学室で機材の後始末をし、レネー先生がその監督をしている。レネー先生はリプター先生が先に帰ったことに大変立腹して、一時間ばかり説教していた。リプター先生の教師としての信用は失われ、元々あつたのかは別として、私たち同様生徒のように扱われてしまっていたが、まあ、自業自得だ。

ウェンデイがふと呟く。

「これで元に戻らなかつたら、教室益々騒がしくなるわね」

「おまえさあ」アッシュが呻いた。「なんとなくわかつてたけど、平穏な授業のために動いていて、別に俺たちのために手伝ってくれたわけじゃないんだな」

「当たり前でしょ」今更なに言い出すのか理解できないふうに答えた。

「当たり前と言う」アッシュは嘆息した。

そして私は二人に重要な事柄を告げた。

「ピスキー、起きたみたいよ」

この言葉に即座に反応して、二人はピスキーに視線を向けた。期待とかすかな不安を混ぜた瞳を。

ピスキーは上体を起して、私たちに虚ろな目を向けていた。

「……」

耳が痛くなるような静寂の後、ピスキーは大きく欠伸をすると、意識が明晰になったのか、ばつの悪そうな、照れ臭そうな、そんな笑みを浮かべた。

「あははは。ごめんねえ、なんか色々やってみたいで」

私たちは同時に、安堵の息を肺から搾り出した。

「……はあ……」

こうしてピスキーは媚薬の呪縛から解けたのだった。  
本当に長い一日だったように思う。

次の日、珍しく平穏な教室で、アッシュは上機嫌にみんなと話をしていた。

「いやー、昨日はまいったぜ」

「大変だったって？」

「ピスキーに変なことしなかった？」

「するわけないだろ」

「そういや、シュバルトどうしたんだ？」

「アッシュがちょっと手加減の仕方間違えて、入院」

「うっわー。おまえやっぱり不良くんだろ」

「断固として違う」

「そうよ、チンピラよ」

「ますます違う」

「ヤクザなのね」

「絶対に違う」

「ギャング？」

「マフィア？」

「国際犯罪組織構成員オズ魔法学園潜入工員？」

「なんでそんな具体的なんだよ？ 全部違うし」

それぞれに話をしている中、不意に戸が開きピスキーが入ってきた。

「よう、ピスキー」アッシュは軽く手を振って「昨日はお互い災難だったな。これに懲りたらもうシュバルトと付き合うなよ。委員長も怒るし」

「念のために聞いておくけど、委員長って誰のこと？」

「誰のことだろうなあ？」

眉目を危険な角度に吊り上げたウェンディに、異様に上機嫌に答えるアツシュ。禁断の世界から逃げ切ったことがよほど嬉しかったようだ。

「そうだね。シュバルトくんと一緒に遊ぶのは、もう止めるよ」

アツシュへと足を進めながら答えるピスキーの微笑は妙に妖艶だったが、しかしアツシュは気付かずに偉そうに腕組して頷いたりしていた。

「うんうん、それが良いだろう」

「今日からはアツシュくんと一緒にいるから」

「……」意味が少しの間理解できなかったのか、しばらくしてからアツシュは疑問符の付いた声。「え？」

その手を握り、瞳を潤ませたピスキーは頬を染めて、その思いの丈を告げた。

「好き？」

「……」

静寂到来。

「……」

「……」

「……」

「えーと？」

私の疑念の声は、なにを疑問に思ってたのことだったのか、自分自身わかっていなかったが、しかし状況の引き金にはなった。

「ちよつと待てえええ!!」アツシュは叫んでピスキーの手を振り

解くと、一気に後退して壁際に背を張り付かせる。「おま、おま、

おま、おまえ! げ、解毒剤、効いたんじゃないかったのか?!」

「勿論効いたよ」

変わらず思慕が溢れる微笑で、ピスキーは当然のこのように答えた。

「じゃ、じゃあなんで?! え? ええ!?!」

動揺しきっているアツシュに、ピスキーは自分の心がとても大切

な宝物であることを表現するかのように胸元で手を組むと、諭すように説明する。

「ボクはね、自分の本当の気持ちに気付いたんだ。確かに昨日のことは薬のせいだったよ。でも薬の効果がなくなって、それでも君の事を思うと、胸の中がとても温かくなるんだ。君の肌の感触や香りを思い出すと、なんだか幸せな気持ちで一杯になって、君とたくさん話をしたくて、たくさん触れたくて……だからね、ボクは、ボクは……」

やがてピスキーは恍惚の表情を浮かべ、愛しい人の胸へ飛び込む。「アツシユくん、だーい好き？」

「でりゃ！」

愛しい人に蹴り倒された。

「クレア！ 惚れ薬の残りを探すぞ！ 惚れ薬の残りだ！ もう一回こいつにぶっかけて他の奴に回せ！ そうすりゃ俺は安全だ！」

「全部処分しなくなったわよ」

手段を選ばなくなってきたアツシユに、私は絶望的な事実を告げるが、彼は不屈の精神でさらなる挑戦への宣言をする。

「なら作る！ 製造法はリプター先生が知ってるはずだ！」

そこへ抗議の声が届いた。

「「そんなのダメよ！！」」

PFC三人衆が、教室の戸を勢いよく開けて現れた。なにやらぼろぼろな姿になっているあたり、死に物狂いで地下迷宮を脱出したと思われる。

「これは薬の力なんかじゃないのよ！」と一年代表。

「薬物使用はスポーツマンシップに反するわ」と二年代表。

「ああ、奇跡が起きてしまった」となにやら嘆いている三年代表。

「そう！ これこそが真実の恋！」

「まさに奇跡は起きたわ！」

「うっ、僕の最後のチャンスが」

三年代表男子生徒の嘆きを、女生徒二人が脇腹を蹴り込んで黙ら

せる。

「というわけで、薬物使用じゃないからOKよね」と一年代表の確認。

「OKなわけないだろ！ 重要な問題点をなんで無視する！？」アッシュは叫ぶ。

「どこに問題があるのよ？！」と二年代表の疑問。

「こいつは男だろ！」

「そんなの些細なことじゃない！」と一年代表の主張。

「致命的だろ！」

そこに教室の戸が再度開かれ、放課後ダンジョンクラブ部長セブリック・キーファーが現れた。なにやら顔中から恐怖に近い感情と冷や汗を放出して、不自然に礼儀正しく話し始めた。

「やあ、アッシュくん。君の入部の話なんだけど、なかったことにしてくれないか。いや、だって、ほら、あれだろ。入部はなるべく健全な精神を持っている人間に限定したいというか、なんとか僕たちが卒業した後、新入部員を君の趣味で選定して変なことをするんじゃないかと、みんなで話し合ってそういう結論に達してね。

僕らのクラブをそういう方向にするのは、ちよつと、まあ、つまり、そういうことだから。それじゃ、僕はこれで失礼するよ。ピスキークンといつまでも仲良くね。でも、できればもう部室には近寄らないように。あはははは」

「ちよつと待て！ あんたなんか誤解してるだろ！」

乾いた笑いをあげながら去って行くセブリックをアッシュは捕まえようとしたが、入れ替わりに教室に入ってきた人物に遮られて失敗した。

「アッシュくん！」

戸が手加減なしで勢いよく開けられた結果、完全に破壊された。そしてアッシュの進路に立ちはだかったのは、ソニア・カーペンター教師。次の瞬間にはアッシュの顔前数センチに迫る。

「アッシュくん、話は聞いたわ。あなたイケナイ道に走ったんです

って?!」

「走ってません!」

断固として否定するアツシュの言葉は、彼女の耳に届いていなかった。

「ダメよ! 男の子同士でそんなイケナイ関係になっちゃ! 求めるのは私みたいなナイスバディな女にするの! わかった!？」

「だからそんな関係になってないって言ってるだろうが!」

蹴り倒されたピスキーが立ち上がると、ソニア先生からアツシュを引き剥がしてしがみ付く。

「先生アツシュくんに触っちゃダメー。アツシュくんはボクのものなのー」

「ああ、やっぱりそういう関係になってるじゃない! わかったわ、私が女の魅力を教えてあげる」

なにをわかったのか、言いつつシャツのボタンを外し始めるが、PFC女生徒二人に取り押さえられる。

「先生! 邪魔しないでください! ピスキーとアツシュはちゃんと恋人になったばかりなんです!」

「妨害者は私たちが排除します。だから先生は引っ込んでください!」

「おまえらも俺の主張を無視するな!」アツシュがピスキーを押しつける「俺はそういう趣味は無いって言ってるだろうが!」

「じゃあ早く目覚めて!」

アツシュは学園中に響くほどの大音量で叫んだ。

「絶対嫌だー!」

こうしてアツシュの受難は終わらないのだった。

そして……



## エピソード

……そして、現在に至る。

「こいつは男だろうが！」

アッシュの魂の叫びに、ウェンディは必要以上の自信を持って断言する。

「可愛いんだから男の子でもいいじゃない」

「ダメだろ！」

「あー、もう！ わからないの？ 君がピスキーと素直にくっつければ教室が少しは静かになるんじゃないかってことなのよ！ ピスキーはあなたの言うことなんなんでも聞くだろうし、少なくともソニア先生は諦めておとなしくなるわ！」

「おまえ本音を出しやがったな！」

「最初っから隠してないわよ！」

「アッシュくん？」

言い争っているところへ、随分酷い仕打ちを受けたにも拘らず、あっさりと復活したピスキーが かすり傷一つないのが謎だ、まったく変化のない笑顔に、科白の語尾にハートマークでもついていそうな声で あいかわらず魔法で周囲にハートマークを投影している、じゃれ付いてくる子犬のようにアッシュに後ろから抱きついた。さらに愛しげに頬に頬ずりまでする。

アッシュは悪寒が全身を駆け巡ったみたいだけど。

「そんなに怒らないでよ？ ね？」

「ね、じゃねえ！ 離れろ！」

ピスキーを引き剥がそうと努力しているが、背中に張り付いているので上手くいかず苦戦している。

「ふははははは！」

唐突に笑い声が響き、それは急速に近づき、そして街路に沿うよ

う何者かが、細長い楕円形のボード サーフボードかなにか に乗って、飛来してきた。カフェテラスの上を勢い余って通過し、大きくUターンして、カフェテラス二階の高さに合わせて停止する。

「これはなんだ!? 鳥だ! 飛行機だ! いや! 魔導帝国総帥だ!」どこかで聞いたような科白を自分で言って「見るがいい!」

新発明! 飛翔板スカイボード! 通称空飛ぶクンだ!」

変な名前の、奇妙な機械装置を装着した空を飛ぶサーフボードに乗り、肩に新兵器らしいバズーカを担いで現れたのが誰なのかは、説明不要。

「なにやら聞いた話によると、我輩が病院のベッドでうなされている間に、我が腹心を改心させたそうだが、しかし! ここで誰が真の支配者であるか教えてくれよう! そして! 一度魔導に足を踏み入れた者は二度と抜け出せないと思い知るがいい! さあ、悪魔召喚士アッシュ! 新発明その二! パラスパリスパレスパロスウェーブビームライフル もっと言い易い名前をつける にて! いざ! 尋常に勝負!!」

「「きゃー」」

指を突きつけると同時に、PFCから歓喜の奇声が上がった。

「恋人を取り戻しに来たわー」

「違うわ、アッシュが欲しいのよ」

「両方とも手に入れたいのかもしれないね」

「「イヤーン、それもステキー」」

シュバルトはよくわからないことを口走っているPFCを無言で目を向けた。

「……」

次にアッシュと、その首に腕を回して抱きついているピスキーを、交互に見つめ、やがてなにかを考えるように空中に視線を泳がせた。そして、改めて二人に目を戻すと、頬から一筋の汗が流れた。やがて突きつけたままの人差し指が震え出し、瞳に怯えの色が混じり、呼吸は乱れ、歯は全く噛み合わずにリズムの良い音を小刻みに鳴ら

し、顔中から汗が滝のように流れ出す。

しばらくしてシュバルトは視線を逸らし、突きつけていた手で震えながら額の汗を拭う。

そして再度アッシュとピスキーに戻した目は平常を取り戻し、ピスキーがいつもそうするように手を軽く掲げると、妙に朗らかに告げた。

「では、我輩はこれにて失礼」  
「待て」

空飛ぶくんを回れ右させて怪しい世界から迅速に逃げようとしたシュバルトを、アッシュが即座に襟首を掴んで捕らえる。

「こいつはおまえのだろ、早く持ち帰ってくれ」

途端うろたえるシュバルト。

「い、いや、違うぞ。我輩はそんな趣味はないのである。であるからして、それは貴様の好きなようにしてくれて結構だ。和平交渉における人質というか贈品というか、そういうことで受け取ってくれ。というか、たった今いらなくなったので、我輩は」

「俺もいらねえよ！」

「離せ！ 世界征服を果たした暁には一割くらいの領土を与えてやるから、そこで二人の国を作るということで見逃せ！」

「誰が見逃すか！ そもそもおまえが科学室で乱闘おこさなかったらこんなことにならなかったんだ！ちゃんと責任とってこいつの面倒見る！ 副総帥なんだろ！」

「なにを馬鹿げたことを申すか！ このような者を我が魔導帝国に迎え入れた覚えは無い！」

「今更なかったことにするつもりか！？ おまえ！」

逃亡しようとするシュバルトと、逃すまいとするアッシュが組み合うところに、話題の人物が乱入する。

「あー、二人ともなんか仲良し！。そんなのダメー。アッシュくんはボクのなのー」

ピスキーが背後からアッシュに抱きついた拍子に、シュバルトが

ら手が離れた。その好機を逃さずに、シュバルトは空飛ぶクンを発進させた。

「緊急撤退のため最大出力！」

「あ！ シュバルト！ 待て！ おい！ 逃げるな！ こいつを連れて行け！」

アッシュの要求に耳を貸さず、高速でカフェテラスで広げられる怪しい世界から逃亡する。

「うお！ バランスが！」

だが、機械装置の故障でも起きたのか、突然変な色の煙が噴出し、ボードは安定を失い、螺旋を描くように急速上昇を始めた。

「ああああああ……」

そして十階建ての最上階の開いている窓に、シュバルトはスカイボードと一緒に突入した。ここからどうなったのかは見えないが、落下せずに建物の中に入ったので、たぶん死ぬことはないだろう。中にいる人たちには迷惑だろうけど。

「あら、シュバルトが逃げた。意外な効果ね」

騒動の種が一つ減って安心したようなウエンディに、私は告げる。

「以外でもなんでもないって」

普通の男は逃げる、というか引く。それにシュバルトの心配をしてあげなさい。

「だあああ！ ピスキー！ 離れろ！」

そして逃げたいけれど、いつまでたっても逃げられないアッシュが叫ぶ。

「大丈夫。愛があればどんな壁も乗り越えられるよ？」

なにが大丈夫なんだろうか。

「乗り越えんでいい！」

アッシュは叫びつつ、腰を一旦低くすると、次には跳ね上げて背負い投げの要領でピスキーを前方空中に放り投げ、そしてまだ滞空状態のピスキーにドロップキックを蹴り込んだ。助走なしのその場蹴りの割にはたいした威力で、ピスキーは向かいのテーブルにまで

吹き飛ばされ、衝撃で砕けた椅子などに 巻き込まれたアベック客も一緒に 埋もれて動かなくなる。

弁償代、さらに追加、か。

「あー！ あー！ またそんなことして！」 ウエンディが非難する。「だから可愛い恋人に酷い事しちゃだめでしょ！」

「恋人じゃねえ！ どっちかつーと変人だ！ ヘ・ン・ジ・ン！」

「そんなにでなくていいってばー？」 ピスキーは何事もなかったかのように復活してアッシュの傍に。なんで平気なんだろう。

「てれてない！ おまえは喋るな！」

アッシュの顔は怒気で真っ赤になっている。

PFCでは相変わらずこちらに聞こえるように小声で囁きあうという、いまだにやり方がわからない発声法で会話している。

「やーん、顔を真っ赤にさせててるー」

「やっぱりアッシュくんも好きなのよー」

「うう、実は二人が一緒に一晩過ごしたって話聞いたことあるんだ」三年代表が泣きながら、非常に気になる発言。当然残り二人が話に食いつく。

「えー、ほんとー？ ピスキーちゃん、もうアッシュくんに大人にされちゃったんだー」

「ううん、実はアッシュくんのほうが受けなのよー。イヤーン、それも素的ー」

「うううう……ピスキーくんの純潔が……」

アッシュはコップを投げつける。ホイップして三年代表の額に命中。ゴン、という音が痛い感じ。

「おまえらも黙ってる！」

「あんたいつの間にピスキー食べちゃってたのよ。いえ、食べられた？」 私は少しからかってみる。

「違う！ あいつらの大ぼら真に受けるな！」

ウエンディが憤慨して「あなた、手を出しておいて後はいらないから使い捨てみたいに捨てるわけ！？ 最っ低！」

「おまえも信じるな！」アツシユは泣きそうな顔になり始めて「大体どつからそんな話が出てきたんだよ！」

PFC三年代表男子生徒は、痛そうに額を押さえながら、無言でピスキーを指差した。

即座にアツシユは獰猛な肉食野生動物の形相で、ピスキーの胸倉を掴む。

「デメエかコラ。どういつつもりだ？」

どういつつもりもなにも、既成事実を作り上げようという魂胆以外に、なにがあるというのか。

ピスキーはきょとんとして「スキー教室の時のことを言ったただけだ」

「スキー教室の時にいつそんなことをした！でたらめばら撒くんなら覚悟はできてるんだろうな！」

アツシユが怒鳴るとピスキーは不意に涙を流し始めた。それはいつもの演技にしか見えないわざとらしさはなく、感情の吐露による純粋なものに見えた。

「お、おい？」

態度の急変にアツシユは心に疚しい事でもあるかのように戸惑う。「そんな、あの夜こと忘れちゃったの。ボクにはとても大切な思い出だったのに、君には忘れちゃうどうでもいいことだったなんて」「いや、それ以前に、思い出になるようなことなんかあったか？」「ひどい。ひどいよぉー」

泣き始めたピスキーはまるで幼い子供のように、アツシユはさすがに怒鳴りつけるような行為ができなくなったようだった。

誰もが沈黙し、静寂の中に子供の囁き泣きだけ。

本来なら場の主役になっているはずのパレードに見物人客たちは目を向けず、そのパレードのほうでも数人こちらに目を向けている。主役の座を奪われた建国の女王役の美女は、誰も注目してくれなくておろおろと完全に困惑していた。

私はなんとなく訊いてみた。

「具体的にどういうことがあったの？」

「先月、ボクたちはフレデリック山のペンションに泊まったんだ」  
学校行事とかで、この地方特有の長い冬がようやく終わる気配を見せた頃、わざわざ万年氷雪のある標高のスキー場に行つて、スキー教室をする羽目になった。でも、確か媚薬事件の少し前だったよ  
うな。

「冬が終わる前に、最後に雪と戯れるのが、風情というもののなのよ  
おん」

などとソニア先生はほざいていたが、私は断固としてその意見には賛同できない。寒いのは嫌いだ。

ピスキーは続けて「眩しい陽光の中、ボクたちは雪と一緒に楽しく遊んだ。アツシユくんが手を握つて引いてくれて、ボクは天使の祝福を受けたように幸せだった」

アツシユはだんだん思い出してきたのか、説明を始める。

「……確かシュバルトがスキーで勝負だなんて言い出して、適当に相手してたら、そのうち勝負に勝つには手段は選ばないとかい出して、おまえが妨害というか散々邪魔した挙句、終いには後ろから衝突してきて坂を転がって雪ダルマにして、とどめに木にぶつかつて枝の雪を頭からかぶらせてくれたんで、いい加減に黙らせようと、電撃たつぷり与えて二人とも雪の中に埋めたんだったよな。三分後には出てきたけど」

凍死させるつもりだったのか。

「楽しい太陽の時間は過ぎ、運命の夜を迎える。食事を終え休息をとるボクの瞳には、アツシユくんの優しい瞳と、窓の向こうの雪景色。やがて凜々と降る雪に誘われてボクたちは外へ向かった」

「夜になってからシュバルトが、雪山で決闘だ、なんて言い出して俺を外に出したんだったな。で、いつものようにおまえとウェンディも付いてきて」

そつえばそんなこともあったような覚えがある。私は寒いのが嫌だったから付いていかなかったけど。

「自然が作り出す美しい芸術的な舞台で、ボクたちは時間を忘れて遊び、愛の歌を紡いだ」

「いつものようにシュバルトが暴れて、ウエンディが止めたけど徒労に終わって、おまえが変な応援歌を歌って……」

「そして禁断の地に誘われるように、深い木々の群れの中に」

「気がつけば見事に遭難してた、と」

「空からは妖精の贈り物。やがて見つけた愛の巣」

「散々雪山を駆けずり回って、疲労と寒さで本当にやばくなり始めて、おまけに吹雪も始まったから空も飛べないし。ドロシーの封印空間より自然の力のほうが凄いな。まあとにかく、なんとか見つけたのは廃棄されたとは思えないぼろぼろの小屋で。まあ、あの時は天の助けと思っただけ」

「中には二人を一緒に包み込む暖かい毛布」

「燃やす物がなかったけど、必死に探してボロボロの布切れを寄せ集めたみたいな毛布を発見したんだ。だけど二人同時が限度だったんで、誰が使うか問題になって。まあ、ウエンディが問答無用で俺とシュバルトを殴り倒して使用权を主張したけど」

「そんな些細なことは忘れて頂戴」とウエンディ。

ピスキーは続けて「そして二人は肌と肌を合わせて暖め合う。二人の距離を隔てるものはなくなり、ただ寄り添い深く温もりを確かめ合う」

「俺たちが凍えて意識が朦朧として、明るい花畑の向こうで死んだばあさんが手招きしているのが見えてた時、おまえらが妙な声を出してたのはしっかり聞こえてたけど、なにやってたのか今でも気になってるぞ」

重ねてウエンディが「そういう細かいところは忘れてっば。それに君が考えてるようなことはまではしてないわよ」

までは？

「そして迎える二人の夜明け。ボクたちは朝日に彩られた銀世界を後にしてみんなの場所へ戻った」

「街から三百メートルぐらいしか離れてなかったのに気づかなかったのが致命的だったよな。吹雪で全然見えなかったせいだけだよ」

以上、二人の愛の夜、説明会終了。

「……」

静寂が場を支配する。

「「……」」

周囲の人たちはなにやら色々な意味で頭を悩ませてしまっている。

「「「……」」」

PFCもさすがに沈黙してお茶を啜っている。

「「「「……」」」」

行進隊では誰も音楽を聞いていないし見てもいないので、いつの間にか全員楽器を鳴らすのを止め「面倒くせーからさっさと行こーぜ」とあからさまにやる気をなくした様子で宮殿へ足を進めていた。建国の女王役のみすぐらんぷりは、自分の晴れ舞台を見てくれないのが悲しくなったのか、シクシクと泣き始めていた。主役に選ばれたのがよっぽど嬉しかったんだね、きつと。

「「「「「……」」」」」

しばらくしてピスキーはアッシュに期待に満ちた瞳を向ける。

「思い出してくれた？ アッシュくん」

「喧しいわ！ 黙って聞いてりゃ嘘八百並べやがって！」

それ以前に、迷宮事件の前だし。

「ボクは嘘なんかついてないよ」

懸命な表情で反論するピスキーに、アッシュはふと考え込んだ。

「……えーと、あれがこうで、これがあっちで」少し考えてから「

……いや、確かに嘘じゃないかもしれんが、なんつうか……」改めてアッシュは「明らかに誤解を招こうとする説明だろうが！」と怒鳴った。

「アッシュくん」ピスキーは人懐っこい微笑を戻す。

「おおっ！」

「怒っちゃダメ？」

「ざけんな！」

絶叫するとアツシュは力なくなっただれ、なにかを呟き始めた。

「もう嫌だよう、こんな学園生活。こいつのせいでなんかそういう趣味だと思われて、男は俺を避けるし。一部友達になっしてくれなんて言っで近づいてくる奴等もいるけど、そいつらホ　で俺を仲間だと思ってるし。女も女であんた　モなんでしょ、なんて相手にしてくれなくなるし。別に声もかけてないのに押し寄せてくる連中は、みんなが後ろ指指しても私たちは応援するとか、禁断の恋だけど負けないでとか、耽美な関係が素的とか、愛があれば性別なんて関係ないとか、そういう連中だし。世界を滅ぼすことは簡単にできるのに、なんでこいつはどうにもなんないんだ……」

人生の崖っ淵に立たされて、落下するのを必死で耐え続けた拳句、もう抵抗することに疲労し切った、解雇寸前の窓際族と称される会社員のような雰囲気を発散させるアツシュに、ピスキーが背中から包み込むように抱きしめる。

見様によつては恋人を慰めるの図、に見えなくもないけれど、当のアツシュにその気が全然ないのが明らかにわかる。

実際アツシュの口からは冷たく一言。

「離れろ」

ピスキーは聞こえたのかどうか「アツシュくん。なにがあつたのか知らないけど、とても疲れてるんだね」

「おまえのせいだつて何度言えはわかるかなー」

「ボクでよければいくらでも慰めてあげるよ？　ベッドの中であることとかそんなこととか色々……」

ゴン、と鈍い音がすると、ピスキーが床に倒れた。背中越しにアツシュが肘撃ちを、こめかみに当てたのだ。

「痛いじゃないかー」確かに痛そうだがこれは。

そんな子犬のように悲しげなピスキーに、アツシュは緩慢に視線を向けた。

その瞳に私は戦慄が走る。

感情があまりにも純粹かつ強烈過ぎて、かえって表面に現れず、むしろ障害となる存在をなんの感慨、殺意や敵意といったものを一切抱かずに、機械的に排除する、そんな爬虫類のような目 もう少しわかりやすく説明すると、「もう殺そう、殺してしまえば楽になる」てな感じにイっちゃった目 だった。

そして鷹揚のない声で「安心しろ、次は痛みを感じる余裕もないから」

次の瞬間、アッシュを中心に世界を構成する法則が急速変換され始めた。

それは空間と大気に強烈な力場を形成し、実効命令一つで対象を消し飛ばす極めて攻撃的な…… って、暢気に説明している場合じゃない。

私は半ば二つに割れたテーブルを蹴り飛ばして横に倒すと、その陰に隠れた。委員長も私に続いて横に避難して来た。

周囲の人たちもなにやらただならぬ気配に気付いたのか、いっせいに逃げ出そうとする。身を屈める、伏せる、隠れる。

そして！

COEON  
「来・た・れ」

凄まじい空間歪曲と衝撃波がピスキーに直撃し、高速度で遙か地平線の彼方へと飛ばした。

さらに急速に収斂した余波が周囲の大気を撓ませ、暴風の乱舞を発生させ、煽りで木々を薙ぎ倒し、屋台を転倒させ、人々を吹き飛ばし、あらゆる物を無差別に襲うそれは、人々の悲鳴と絶叫が響く、阿鼻叫喚の地獄が出現したようだった。

どれくらいの時間が経過しただろうか、正確には十秒も経過していないと思うが、気が付けば全ては終わり、静寂が訪れていた。

だが、それは精神に安らぎを与える静けさではなく、むしろ不安を掻き立てる無音だった。

カフェテラスを中心として、辺り一帯は台風が通過したような被

害が広がっていた。突然の災厄　というか人災　になす術もなく、人々はただ悲痛な怨嗟に呻くしかなかった。

ガラス窓は無残に砕け散り、パレードカーは横倒しになり、レンガの壁は剥げ落ちて、木の上の犬は降りられずに鳴いている。

倒壊した屋台で店主は呆然としており、壊されたトランペットで力なく音を鳴らそうと無駄な努力をする行進隊一人、あるいは太鼓やその他の楽器。

母を求めて泣く子供を押し退けて、半狂乱で高価なブランドバツクの行方を捜す厚化粧のおばさん。

「どうしてこんな目に遭うのよー！　せつかく女王役になれたのにー！」と泣いているミスグランプリの美女。

そして、なぜか無傷で何事もなかったかのようにこちらに聞こえるように囁き合うPFC三人衆。

信じ難いことだが、死者は出なかったようだ。

アッシュは一度大きく呼吸をすると、困難だが有意義なことを成し遂げた時のような、爽やかで清々しい笑顔で額の汗を拭う。

「これでよし」

「よしじゃないって！」ウェンディが瓦礫を押し退けて立ち上がった。「あなたなんてことするのよ！　ピスキー死んじやったんじゃないの！？　っていうかあなたが殺して、殺しコロころコロシロココ丁のココロが」

なにやら混乱して意味不明の言動に発展している。

対照的にアッシュは冷めた口調で返事。

「俺的には死んでくれたほうが嬉しいんだけどな」

「それだとあんた殺人犯ねー」私も瓦礫を押し退けて立ち上がる。とつさの判断とテーブルのおかげで怪我は免れた。お気に入りの服に埃が付いたけど、他の人の被害に比べれば微々たる物はある。

「どのくらいの罪になると思う？」

私は埃を払いながら「情状酌量の余地はあるんじゃない。器物破損と对人障害は免れないだろうけど」

「そういう問題じゃないでしょ！」

「まあまあ、落ち着いて委員長」

「委員長はあなたでしょう！」

つい口に出てしまった。

私は咳払いをして「大丈夫よ、ピスキーはあれくらいじゃ死んだりしないから」

私はピスキーの消えた地平線の彼方を指差した。

その青空の一点が昼なのにキラリと一つ輝くと、そこから右拳を頭上に掲げ左拳を腰に矯めたポーズで　スー　・マン。意味はわからなかったが、そんな単語が頭に浮かんた　飛来してきた。そして高速度でカフェテラスに到達すると、降り立つ寸前で急減速し、華麗に二回転して体操選手のように見事な着地を決める。手には　どこから持ってきたのか　十点と書かれたプラカードを持っていた。

「ただいま？　アッシュくん？」

「戻ってくるなよ。っていうかなんで平気なんだよ？　今の結構本気でやったんだぞ」

アッシュは力なくうなだれる。この場合、本気で魔法を撃ったことが問題かもしれないけど、それについてのコメントは面倒なのでパスする。

そしてピスキーは早速飼主の下にじゃれつき始めた。

アッシュの瞳が深淵の紫だというのは何度も説明したが、ピスキーも同じく深淵の紫で、実は資格が認定されてもおかしくないほどの成績を修めている。本人と関わっていると希薄になる認識だが、魔法実技ではアッシュを抜いて、主席を獲得している。そして筆記試験でもトップだ。

そしてさらに信じられないのだけど、アッシュは魔法実技だけではなく、筆記試験でも次席。

私は……私はどうでもいい。

とにかく、先ほどのアッシュの攻撃に対し、ピスキーは事前に防御する魔法を使っていたらしい。数百メートル上空からの帰還も同

じ理由だ。

「あのね、アッシュくん。広場でカップルコンテストっていうのをやっているんだって。一番仲の良い恋人は誰だって言うコンテストで、観客の投票で決めるんだって。それでね、優勝商品は二泊三日の旅行券なんだって。出てみようよー？」

「帰る」

即座に逃げ出そうとするアッシュの腕を、ピスキーは掴んで逃がそうとしない。

「えー、出ようよー。大丈夫、僕たちならとっても似合ってるって、みんな投票してくれるよ？」

「イヤだー。認めて欲しくないー。放してくれえー」泣き出しそうになっているアッシュ。

ウエンディが周囲の惨状を眺めて呟く。

「どうするのよ、この有様」

誰かがレスキュー隊や警察に通報したらしく、ちらほらとその姿が見え始めた。弁償どころの話じゃなくなったし、警察の厄介にならないうちに逃げたほうが良さそうだ。

ふと、私は懷から一枚の紙切れを取り出して眺めた。

「なにそれ？」ウエンディが尋ねてきた。

「ピスキーの学園登録書。気になることがあって、ちょっとコピーを貰ってきたの」

「ふうん。なんでそんな物貰ってきたの？」訊きながらウエンディは覗き込むと、不意に怪訝な表情になった。「あれ？これ間違えてるわ」

「合ってるわよ。まあ、本人目の前にしてるとちょっと信じられないけど、あれでも成績トップなのよね」

「そこじゃなくて、わたしはここのこと言ってるのよ」

と彼女は紙上の一点を指差す。

ピスキー・フィフス。

生年月日・聖暦2886年12月25日。

性別・女。

出身地・ソラリス連邦国。バーゼル区。タウゼント市……

「ほら、性別欄が女になってる」

「合ってるわよ」

ウエンディは意味を飲み込めなかったのか、しばらくきよとんと惚けたようにしていたが、やがて毅然と告げる。

「なに馬鹿なこと言ってるのよ。ピスキーは立派な男の子よ。好きになった人が偶然男だっただけで、別に心が女ってわけじゃないわ」  
そういう意味で言っただけじゃないんだけど。

「まあ、心が女の子って言うのもそれはそれで……」なにやら気になる変なことを呟いてから「いえ、とにかく学園に帰ったら先生に言っただけで修正してもらわないとね。まあいいわ、わたしがやっておくから。あなたに任せるといつまで放っておくかわからないし」

まったく信じてない。

というより、この場合問題なのは、そうやって自分とは本来無関係の仕事をやろうとするから委員長と呼ばれることなんだろうけど、その辺はどうでもいいし、私が楽なので、良しとする。

そしてウエンディは再びアッシュとピスキーに目を向けると「だから、やめなさい」と二人の所へ行ってしまった。

アッシュは相変わらずピスキーとどつき漫才染みたことをしているし、なぜか無傷のPFCでも、やはりこちらに聞こえるように小声で話すという巧み技で、性別を越えた真実の愛とか、男の子の恋愛が素敵とか、妙な方向で盛り上がっている。

なんで誰も気付かないんだろうか。私は本格的な懷疑の発作が起き始めていた。

特にアッシュ。毎日のように抱きつかれているんだから、妙に華

奢なんじゃないかとか、胸が柔らかいんじゃないかとか、匂いが全然違うとか、股の間に付いているべきものが付いてないんじゃないかとか、そういう疑問点に気づいても良さそうなのに、全く全然さっぱり一片の欠片も気付いていない。

もっともピスキーはそういう服を着ているだけで、自分の性別に関して明確な発言をしたことはない。周囲が勝手に誤解しているだけなんだから、厳密には虚言というわけではないだろうけれど、間違いを指摘しないのは、広い意味でやはり同じと見なした方が良さだろうか。

まあ、単純にピスキーはアッシュの反応を面白がっているだけなんだろうけど。

でも、驚愕の真実というものを教えたら、みんなはどうするだろうか。

それにいい加減に教えあげないと、アッシュの学園生活は、妙な方向に突っ走ったままだ。それにアッシュがどういう反応をするのか、少し興味がある。

私は教えるべきだという義務感と好奇心が出てきた。黙っていないければならない理由も必要もあるわけじゃない。

言ってみようかな……

「ねえねえ、どこ行くの？ アッシュくん」

「警察に捕まる前に逃げるんだよ。おまえを犯人として置いてだ」

「置いていかないでよー。ずっと一緒にいよ。ね？」

「ね、じゃねえ！ 放せ！」

「ピスキーちゃん、捨てられちゃうわ」

「そしたら僕が慰めてあげよう」

「そんなのダメー。ピスキーちゃんはアッシュと結ばれるの」

「そうよ、アッシュはピスキーを幸せにする義務があるんだから」

「無いっ！ 勝手なことぬかすな！」

「そんなに恥ずかしがらなくていいってばー」

「違うつつつてんだろぅが！ これ言っただの今日だけで何回目だ！

「？」

「二十八回目ー？　それでボクがこれを言うのは三十七回目ー？  
愛してるよー？　アッシュくん？」

「止める！　黙れ！　喋るな！　引っ付くな！　抱きつくなー！！」

「??????」

「!!!!!!」

面白いからもう少し黙っていよう。

おしまい

追記。こんな調子で私たちは警察の取調べをつやむやにして逃れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2172o/>

---

オズ魔法学園奮闘記

2010年12月26日14時26分発行